

愛媛大學埋蔵文化財調査室年報

— 1997・1998年度 —

愛媛大學埋蔵文化財調査室

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 1997・1998年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2002

序 文

愛媛大学は、松山市および愛媛県内各所に大小のキャンパスをもち、敷地総面積は464ヘクタールにおよび、本部事務局と4つの学部が所在する城北地区には文京遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味地区には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡など、数多くの遺跡をかかえている。愛媛大学では、埋蔵文化財調査室を設置し、こうした埋蔵文化財が諸工事で影響を受ける場合、影響度に応じて、本格的な全面調査、試掘調査、立会調査の方法で発掘調査を実施し保護処置を講じている。また、1992年度からは、大学構内における埋蔵文化財の有無や精度の高い分布状況を把握するため確認調査を実施している。

こうした調査の成果は、客観的な資料化を進め、調査報告書にまとめて公開する必要がある。この報告書の作成を通して初めて、遺跡の評価が行われるのであり、文化庁からも、調査終了後速やかな発掘調査報告書の刊行が促されている。

ところが、本格的な全面調査については、調査報告書刊行には現地での発掘作業と同等、あるいは出土遺物量やその質によっては、それ以上の時間を記録類や出土品の整理作業に要することになる。愛媛大学の場合、出土品の多さと、1995年から続く頻繁な発掘調査によって、速やかな報告書刊行を容易に行えない状況にある。そこで、大学事務局と協議を行い、全面調査の報告書刊行にむけて埋蔵文化財調査室の体制を再整備し整理作業を前進させることになった。これと同時に、2000年度からは、全面調査の概要報告と試掘・立会・確認調査の小規模調査の報告をあわせた年報を刊行している。本年報は、その1997・1998年度分である。

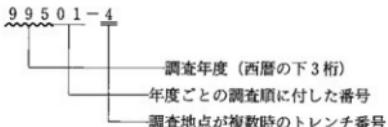
本書をまとめにあたり、多くの機関・部局・個人の方々から協力を得た。その労に深く感謝するとともに、本書が大学内外の多くの方々に利用・活用されることを祈念します。

平成14年3月1日

愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長 下條信行

例　　言

1. 本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1997年度と1998年度に愛媛大学構内で実施した大規模事前全面調査の概要と、試掘・立会・確認調査などの小規模調査の成果を報告する愛媛大学埋蔵文化財調査室年報であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告VIIにあたる。
2. 埋蔵文化財調査室では、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下3桁の後に各年度ごとの調査順に1からの2桁の通し番号を加えた5桁の番号で表示している。調査番号に加えて、複数の地点(トレンチ)を調査した場合、本書ではーの後に地点番号を付している。本書では、この調査番号ー調査トレンチ番号で調査地点を表示している。



3. 本書では、遺構番号に冠して、掘立柱建物：SB、竪穴式住居跡：SC、溝：SD、炉跡・竈：SF、樹列：SA、水田：SS、土壤：SK、柱穴・小穴：SP、自然流路：SR、その他の遺構：SXの記号で遺構の種別を表している。
4. 本書で表示した方位・標高数値は、全面調査においては、すべて平面直角座標IV系にしたがった。ただし、試掘・立会調査で座標系が利用できなかった場合は、調査地点周囲の平板測量成果を掲載し、磁北を表示した。
5. 城北団地と梅味団地では、既往の調査成果から、団地全域にわたる基本層序を設定し、個々の調査地点の個々の特徴は大区分を基本層序に準拠し、それを構成する土層群ごとに細かな特徴や構成を観察し記録化している。本書で報告する城北団地と梅味団地の調査報告では、この基本層序に基づく層序関係の表記を行っている。詳細については、2001年刊行の『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告VII)に記しているので、参照されたい。
6. また、城北団地では、1998年、国土座標系X=-93900、Y=-66800を基点として、東から西へ向かって、5mおきにAA・AB・AC・AD……BA・BB・BC・BD……EM・EN・EO・EP、南から北へ向かって1・2・3・4・5・6……115・116・117・118・119・120に区割りし、両者を組み合わせた5m方眼の団地全域の調査区画を設定し、遺物の取り上げや遺構実測などの基準としている。本書で報告する城北団地(文京遺跡)の調査区割りはこれによっている。
7. 土色・遺物の色調は、1991年以降、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1967)に準拠している。
8. 本書に使用した遺構図は、田崎博之・吉田広・三吉秀充・宮崎直栄が作成し浄写を行った。
9. 本書に使用した遺物図は、田崎・吉田・三吉・宮崎に加えて、山村芳貴・上山喜也が作成し浄写を行った。
10. 本書で使用した写真は、田崎・吉田・三吉が撮影した。
11. 本書は田崎・吉田・三吉・山村が執筆し、編集を下條信行の指導のもとに田崎が行った。
12. 本書に報告した調査に係わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

本文目次

序説

1 愛媛大学における埋蔵文化財調査と体制	1
2 愛媛大学における埋蔵文化財の普及活動と活用状況	1
3 愛媛大学における埋蔵文化財の保護状況	3
4 発掘調査報告書の刊行へ向けての整理作業体制の再整備	9
5 愛媛大学における埋蔵文化財の把握状況	9
 I 1997年度の調査	
99701 工学部校舎新営第III期工事に伴う調査 その1 (文京遺跡16次調査A区)	13
99702 工学部校舎新営第III期工事に伴う調査 その2 (文京遺跡16次調査B区)	23
99703 ATM-LAN整備工事に伴う調査	25
99704 事務局案内標識板取設工事に伴う調査	29
99705 持田団地内構内光ケーブル布設工事に伴う調査	29
99706 持田地区北側囲障改修工事に伴う調査	31
99707 榛味団地(附農高) 校舎新営に伴う試掘調査	33
99708 榛味団地排水工事に伴う調査	37
99709 工学部校舎新営電気設備工事(その2)に伴う調査	38
99710 北吉井宿舎屋外配水管改修に伴う調査	44
99711 北吉井宿舎屋外ガス管改修に伴う調査	49
99712 農学部附属農業高等学校校舎新営に伴う調査(榛味遺跡4次調査)	50
99713 附属農高運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設工事に伴う調査	53
99714 附属農高校舎埋蔵文化財発掘調査に伴う支障建物整備工事(農機舎及び車庫)に伴う調査	55
99715 1997年度構内遺跡確認調査(文京遺跡17次調査)	56
99716 附属農高運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設工事に伴う調査	71
99717 工学部校舎新営に伴う外壁施設整備工事に伴う調査	75
 II 1998年度の調査	
99801 「大正天皇お手植えの松」移植に伴う調査	78
99802 総合情報処理センター新営に伴う調査(文京遺跡18次調査)	80
99803 工学部本館等事務室改修機械設備工事に伴う調査	81
99804 遺伝子実験施設新営その他工事に伴う試掘調査	94
99805 教育学部2号館南消火用水漏れ改修工事に伴う調査	95
99806 理学部本館南消火栓管路改修工事に伴う調査	100
99807 遺伝子実験施設新営その他工事に伴う調査(榛味遺跡5次調査)	101
99808 医学部附属病院病棟建設に伴う調査	107
99809 学生会館ガス管改修工事に伴う調査	110

插図目次

図1 文京遺跡保存地区（グリーンゾーン）位置図 （縮尺1/1,000）	5	（縮尺1/500、1/40）	39
図2 1997年度城北圃地（文京遺跡）調査地点 （縮尺1/4,000）	11	図22 99709調査5・6トレンチ位置図および土層柱 状図（縮尺1/500、1/40）	39
図3 1997年度樽味圃地（樽味遺跡）調査地点 （縮尺1/4,000）	12	図23 99709調査7・8トレンチ位置図 （縮尺1/500）	39
図4 1997年度持田圃地（持田遺跡）調査地点 （縮尺1/4,000）	12	図24 99709調査3・4・7・8・10トレンチ平面図 および土層断面図（縮尺1/40）	40
図5 99701調査（文京遺跡16次A区）遺構配置図 （縮尺1/200）	14-15	図25 99709調査出土遺物実測図（縮尺1/4）	43
図6 滑石製指輪実測図（縮尺1/1）	17	図26 99710調査地点A・B土層柱状図 （縮尺1/40）	44
図7 南東九州系土器実測図（縮尺1/4）	21	図27 99710・99711・99508調査区遺構配置図 （縮尺1/250）	45
図8 99703調査区全体図および土層断面図 （縮尺1/1,000、1/40）	26	図28 99712調査（樽味遺跡4次）遺構配置図および 土層断面図（縮尺1/200）	50-51
図9 99704調査地点位置図および土層断面図 （縮尺1/400、1/40）	28	図29 99313調査1～4トレンチ位置図および平面・ 土層断面図（縮尺1/500、1/40）	54
図10 99705調査1・3トレンチ位置図および1・2 トレンチ土層柱状図 （縮尺1/500、1/40）	30	図30 99714調査1トレンチ位置図および 土層柱状図（縮尺1/500、1/40）	56
図11 99705調査1トレンチ土層断面図 （縮尺1/40）	30	図31 99714調査2トレンチ位置図および土層柱 状図（縮尺1/500、1/40）	56
図12 99705調査1トレンチ出土遺物（縮尺1/4）	30	図32 99715調査（文京遺跡17次）1・2トレンチ 平面図および土層断面図 （縮尺1/100、1/40）	58-59
図13 99706調査地点位置図および持田圃地北側土 層断面図（縮尺1/2,000、1/80）	31	図33 99715調査（文京遺跡17次）1トレンチSR-01 出土遺物実測図（縮尺1/4）	60
図14 99706調査1～3トレンチ土層柱状図 （縮尺1/40）	32	図34 99715調査（文京遺跡17次）1トレンチ III層出土遺物実測図1（縮尺1/4）	60
図15 99707調査1～8トレンチ土層柱状図 （縮尺1/40）	33	図35 99715調査（文京遺跡17次）1トレンチ III層出土遺物実測図2（縮尺1/2）	61
図16 99707調査1～8トレンチ位置図 （縮尺1/1,000）	34	図36 99715調査（文京遺跡17次）2トレンチ III層出土遺物実測図1（縮尺1/4）	63
図17 計画管路⑩部分土層推定断面図 （縮尺1/500、1/125）	36	図37 99715調査（文京遺跡17次）2トレンチ III層出土遺物実測図2（縮尺1/2）	63
図18 99708調査地点位置図（縮尺1/500）	37	図38 99715調査（文京遺跡17次）SC-20出土遺物 実測図（縮尺1/2）	64
図19 99708調査区西壁土層断面図（縮尺1/40）	37	図39 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチ平面図 および土層断面図（縮尺1/100、1/40）	66
図20 99709調査3・9・10トレンチ位置図および 9トレンチ土層柱状図 （縮尺1/500、1/40）	38	図40 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチSR-50 出土遺物実測図1（縮尺1/4）	68
図21 99709調査1・2・4トレンチ位置図および 1・2トレンチ土層柱状図			

図41	99715調査（文京遺跡17次）3トレンチSR-50 出土遺物実測図2（縮尺1/4）	69
図42	99715調査（文京遺跡17次）3トレンチIII層出 土遺物実測図1（縮尺1/4）	70
図43	99715調査（文京遺跡17次）3トレンチIII層出 土遺物実測図2（縮尺1/2）	70
図44	99716調査1～10トレンチ位置図 (縮尺1/500)	72
図45	99716調査1～5トレンチ平面図および土層断 面図（縮尺1/40）	75
図46	99716調査6～10トレンチ平面図および土層断 面図（縮尺1/40）	76
図47	1998年度城北団地（文京遺跡）調査地点 (縮尺1/4,000)	78
図48	1998年度重信団地調査地点（縮尺1/4,000）	79
図49	1998年度樽味団地（樽味遺跡）調査地点 (縮尺1/4,000)	80
図50	99801調査1・2トレンチ土層柱状図 (縮尺1/40)	80
図51	99802調査（文京遺跡18次）A区上層 水田・中層水田および調査区土層断面図 (縮尺1/200)	82-83
図52	99802調査（文京遺跡18次）A区下層 水田・自然河道・微高地上の遺構および 調査区土層断面図（縮尺1/200）	82-83
図53	99802調査（文京遺跡18次）B区遺構配置図 および調査区土層断面図（縮尺1/200）	89
図54	99802調査（文京遺跡18次）B区南端部遺構 配置図（縮尺1/50）	90
図55	99803調査地点位置図および土層柱状図 (縮尺1/400、1/40)	94
図56	99804調査1～9トレンチ位置図 (縮尺1/800)	96
図57	99804調査1～9トレンチ土層断面図 (縮尺1/40)	97
図58	99804調査出土遺物実測図1（縮尺1/4）	99
図59	99804調査出土遺物実測図2（縮尺1/6）	99
図60	99805調査地点および土層柱状図 (縮尺1/200、1/40)	100
図61	99806調査土層柱状図（縮尺1/40）	101
図62	樽味団地調査地点位置図 (縮尺1/1,500)	102-103
図63	99807調査（樽味遺跡5次）II We-f区、 II Ee-f区周辺遺構配置図 (縮尺1/200)	102-103
図64	99807調査（樽味遺跡5次）III・IV区遺構 配置図（縮尺1/200）	104
図65	99808調査1・2トレンチ配置図 (縮尺1/1,000)	108
図66	99808調査土層柱状図（縮尺1/40）	109

写真目次

写真 1	構内遺跡広報パンフレット、「文京遺跡 シンポジウム」資料集および記録集	2
写真 2	99701調査（文京遺跡16次A区）・99702 調査（文京遺跡16次B区）全景（南から）	14
写真 3	99701調査（文京遺跡16次A区） 出土遺構	16
写真 4	99702調査（文京遺跡16次B区）完掘全景 (北から)	23
写真 5	99702調査（文京遺跡16次B区）出土遺構	24
写真 6	99703調査A・B区全景および土層断面	27
写真 7	99705調査1トレンチ土層断面（南から）	30
写真 8	99706調査1～3トレンチ土層断面	32
写真 9	99707調査2・4・5・7トレンチ土層断面	
写真10	99708調査地点土層断面（西壁）	37
写真11	99709調査3・4トレンチ土層断面	41
写真12	99709調査7～10トレンチ土層断面	42
写真13	99710調査出土遺構	47
写真14	99710・99711調査出土遺構	48
写真15	99712調査（樽味遺跡4次）全景	51
写真16	99712調査（樽味遺跡4次）SR-1・2	52
写真17	99713調査1～4トレンチ	53
写真18	99715調査（文京遺跡17次） 1・2トレンチ	59
写真19	99715調査（文京遺跡17次）3トレンチ	67
写真20	99716調査地点遠景および	

1～4 トレンチ	73	および南端部の遺構群	91
写真21 99716調査 5～10トレンチ	74	写真28 99802調査（文京遺跡18次）B区	
写真22 99801調査土層断面	81	出土遺構	92
写真23 99802調査（文京遺跡18次）A区東壁 土層断面	82	写真29 99804調査 1～6 トレンチ	98
写真24 99802調査（文京遺跡18次）A区上層水田 ・中層水田	84	写真30 99804調査 7～9 トレンチ	99
写真25 99802調査（文京遺跡18次）A区下層水田 ・自然流路・微高地上の遺構	85	写真31 99807調査（樽味遺跡 5 次）I 区	102
写真26 99802調査（文京遺跡18次）A区出土遺構	86	写真32 99807調査（樽味遺跡 5 次）II 区	103
写真27 99802調査（文京遺跡18次）B区全景		写真33 99807調査（樽味遺跡 5 次）III・IV 区	105
		写真34 99807調査（樽味遺跡 5 次）V・VI 区	107
		写真35 99808調査地点遠景・土層断面	109

表 目 次

表1 「文京遺跡シンポジウム－弥生大集落の解明－」参加者構成	3
表2 99715調査（文京遺跡17次）遺構一覧 1	57
表3 99715調査（文京遺跡17次）遺構一覧 2	58
表4 99715調査（文京遺跡17次）遺構一覧 3	62

付 図

付図1 文京遺跡12・14・16次調査区遺構配置図（縮尺1/200）

序 説

1 愛媛大学における埋蔵文化財調査と体制

1996年4月に、吉田と三吉が着任し、2調査班体制が整備されるとともに、埋蔵文化財調査室も改修され、狭いながらも整理作業と収納のスペースを確保することができた。

吉田・三吉は着任後、直ちに文京遺跡14次調査にあたることとなったが、予想した以上の遺構密集と豊富な出土遺物によって、調査に予定以上の時間を費やすこととなった。そのため、1997年3月には、工事着工区域のみの調査を終えて、残る区域は16次調査B区として調査を継続することとなった。そのため、田崎班が1997年4月～12月までA区の発掘調査にあたると併行し、吉田・三吉班は、7月までB区、その後も試掘・立会調査の小規模調査、樽味遺跡4次調査と、ほぼ一年を通じて発掘調査にあたることとなった。

調査体制が整えられたとは言え、このような状況に陥った一因は、遺跡の広がりや濃度が的確に把握されていなかったことによる。そうした反省から実施したのが1996年度の文京遺跡15次調査、1997年度の17次調査の構内遺跡確認調査である。とくに、17次調査では、後述のように、旧グラウンドにおける遺跡の分布密度を確認することに努めた。

1998年度からは発掘調査の様相がやや変わってくる。これは経済状況とそれを踏まえた政府の経済政策、

つまり、景気浮揚対策として補正予算が計上され、それによる建物建設に伴う発掘調査が恒常化する。1998年度の総合情報処理センター新館に伴う文京遺跡18次調査、遺伝子実験施設等新館工事に伴う樽味遺跡5次調査、そして1999年度のサテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリ－新館に伴う文京遺跡20次調査は、いずれも補正予算による建物建設が調査原因である。

こうした補正予算による発掘調査の恒常化は、年度当初の調査室運営計画を大きく変更することを余儀なくし、とりわけ1995年度以降の発掘調査報告書の刊行を大幅に遅らせる主因となっている。また、補正予算であるが故に、建物竣工までの時間が限られており、どうしても短時間で発掘調査を立ち上げ、できる限り短期間での発掘調査の終了が求められる。2調査班体制が整備されたことが逆に、整理作業を棚上げした相次ぐ発掘調査の実施につながったとも言えるかもしれない。その1995～1999年度の調査は、全面調査が11件（文京遺跡13次、14次、16A次、16B次、18次、19A次、19B次、20次、樽味遺跡4次、5次、北吉井遺跡）、試掘調査16件、立会調査27件、確認調査2件（文京遺跡15次、17次）にのぼる。これに対して、報告書の刊行は1997年3月刊行の『樽味遺跡III』と『愛媛大学構内遺跡調査集報I』の2冊にとどまっている。（吉田）

2 愛媛大学における埋蔵文化財の普及活動と活用状況

埋蔵文化財調査室の調査体制が整備された一方で、少ないながら発掘調査の成果を公開する普及活動も実施できるようになった。

まずは、本格全面調査に際する現地説明会の開催であり、「学報」への調査速報の掲載である。現地説明会は、文京遺跡13次調査（1996年4月2日）、14次調査（1997年2月28日、3月1日）、16次調査（1997年11月8日）、18次調査（1999年5月15日）、20次調査（2000年6月10日）と、5回実施しており、毎回、大学内外

から多くの方々の参加をえている。

一方、「学報」への掲載は、文京遺跡13次調査の速報を394号（1996年7月）に、14次調査を396号（1996年9月）、397号（1996年10月）、398号（1996年11月）、399号（1996年12月）、400号（1997年1月）、401号（1997年2月）、402号（1997年3月）、404号（1997年5月）に、16次調査を409号（1997年10月）、412号（1998年1月）に、17次調査の成果を416号（1998年5月）に、20次調査を438号（2000年3月）、440号（2000年5月）、441号（2000年6



写真1 構内遺跡広報パンフレット、「文京遺跡シンポジウム」資料集および記録集

月)、442号(2000年7月)に、博味5次調査の速報を414号(1998年3月)に、同5次を432号(1999年9月)に、北吉井団地の調査を413号(1998年2月)に、そして、古墳時代の文京遺跡と題して421号(1998年10月)、422号(1998年11月)、423号(1998年12月)に連載し、微細遺物の選別について436号(2000年1月)に文章を寄せた。以上、埋蔵文化財調査室から都合23回にわたって記事を寄せたことになる。

また、1998年度には、広報用パンフレットを作成し、全学の教職員とともに、1999年度以降の新入学生に配布し、足下の遺跡への注意・興味の喚起に努めている(写真1左)。

さて、普及活動で特筆すべきは、1998年7月11日に開催した『文京遺跡シンポジウム－弥生大集落の解明－』である。学外から小田富士雄氏(福岡大学人文学部教授)、広瀬和雄氏(奈良女子大学文学部教授)、七田忠昭氏(佐賀県教育委員会吉野ヶ里遺跡班主査)、藤田三郎氏(奈良県田原本町教育委員会文化課係長)を招き、福岡県須玖岡本遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡、大阪府池上曾根遺跡、奈良県唐古・鏡遺跡など、各地の弥生時代の大集落と比較・検討し、文京遺跡の評価をはかろうとしたものである。このシンポジウムによって、これまで調査次数ごとの現地説明会資料程度しか公表されていなかった調査成果を、整理途上とは言え、

公表できた意味は大きい(写真1中央)。さらに、一部出土遺物の展示も行った。当日は、共通教育大講義棟が満杯となる478名もの参加者で、立ち見が出るほどの盛況振りであった。

その参加者構成をみると、愛媛大学の学生が132名と多いとともに、学外から257名もの市民の方々の参加をえたことは特筆される。県外からの参加者も目立つ。九州・関西地区や遠く愛知からの参加者もあった。年齢構成別にみると、20~40代が65%で、他の文化講演会などでは60歳以上が大半を占めることと比べて、今回の中のシンポジウムでは年齢層が若いことが大きな特徴である(表1右)。

こうした参加者数と構成は、大学内外の文京遺跡に対する関心の高さを物語っている。その記録を、8月に『文京遺跡シンポジウムの記録－参加者集計・学内外からの声・報道記事－』としてまとめ、学内の各部局に配布した。その中には、参加者からの文京遺跡の保存や出土品の公開を求める声が非常に多く寄せられている(写真1右)。

シンポジウムで文京遺跡の重要性がアピールされたことをきっかけに、大学内外の関心がそれまで以上に高まり、資料の借用や利用が相次ぐようになってきた。1997年度から現在まで、既に50件を超えている。

その中では、学外からの資料調査や借用がとくに多

表1 「文京遺跡シンポジウム—弥生大集落の解明—」
参加者構成

区分	参加者数	内訳
一般	257	松山市内 愛媛県内 県外 (福岡県・佐賀県・熊本県・大分県・ 山口県・香川県・高知県・徳島県・ 岡山県・兵庫県・大阪府・愛知県ほか)
学生	167	小中高校生 愛媛大学 他大学 (香川大学・岡山大学・島根大学・大 阪大学・京都大学・奈良大学・別府 大学ほか)
教職員	34	
回答なし	20	
合計	478	

い。個人の考古学研究者だけではなく、松山市考古館、愛媛県歴史文化博物館、滋賀県立安土城考古博物館などの調査・研究機関からも、出土品や調査記録類の借

用がある。また、考古学の研究者や機関だけではなく、マスコミ・出版関係からの写真類の掲載、市民からの資料の請求も目立つ。そして、愛媛県内の市民だけではなく、遠く関西や関東から現地説明会やシンポジウム資料集についての問い合わせがあり、複写などで対応している。

これに加えて、法文学部や教育学部の教育・研究用資料としての利用、「愛媛大学50年史」や各部局のポスターへの掲載にかかる写真類の貸し出し、さらには大学生協情報誌への掲載など、広範囲に及ぶ。

こうした要望に対して、埋蔵文化財調査室ではできるかぎりの対応を行っている。例えば、資料調査に対しては、その度ごとに収納施設から搬出で対応している。今後、さらに資料調査依頼が増えると思われ、それに十分対応できるだけの出土品や記録類の整理と収納の体制整備をはかることが今後の課題である。

(田崎・吉田)

3 愛媛大学における埋蔵文化財の保護状況

連年の相次ぐ発掘調査の一方で、一部地区を遺跡の現状保存・保護をはかるグリーンゾーンの範囲として利用することが決定されたことは特筆に値する。

1994年頃までは、文京遺跡の弥生時代集落に対しては、大型掘立柱建物が法文学部本館西端で発見され、一般の小集落とは異なる遺跡であり、比較的大きな集落であるといった程度の理解が実情であった。ところが、1995年以降、旧グラウンドで工学部1号館の建設に伴う発掘調査（文京遺跡12・14・16次調査）が始まると、これまでの想定を大きく覆す濃密な分布の住居跡群が発見され、すでに明らかにされていた大型掘立柱建物を中心とした非常に大規模な集落であることが明らかになり、文京遺跡の再評価が迫られた。

そのため、埋蔵文化財調査室では、1996年と1997年の2ヶ年にわって、確認調査（文京遺跡15・17次調査）を実施し、文京遺跡における弥生時代集落の分布範囲と密度の把握に努めることとした。その結果、文京遺跡の弥生時代集落は、

- ①城北キャンパスの南西部を中心として、東西300m、南北200mの約60,000m²に、住居や倉庫などが密集して営まれ、旧グラウンド北側には谷状の窪地（=旧河道）が分布すること、

- ②12・14・16次調査の4,500m²で、弥生中期後葉～後期中葉の堅穴式住居跡だけで約100軒が出土し、異常な密集度であること、
 - ③弥生時代中期後葉～後期初頭前に、何度もなく住居や倉庫が建て直され、同時に建てられていた住居や倉庫の数也非常に多かったこと、
 - ④集落の中でも住居や倉庫が密集する住居域と比べて、もともと0.5cm～1mほど高い場所に、床面積が100m²をこえる弥生時代の超大型建物が4棟も発見され、それに接して、祭祀遺物を含む方形壇が設けられていたこと、
 - ⑤ガラス滓や土器焼成残滓が出土し、キャンパス南西部の工学部2～4号館一帯で、ガラス製装身具や土器が生産されていたこと、
 - ⑥大規模集落の内部が、居住域や倉庫域、工房域など、機能ごとに区画されていた可能性が強いこと、
 - ⑦中国鏡・石製指輪・鋳造鉄斧などの大陸系文物の出土から、国内外における交流拠点であることがうかがえること、
- などを明らかにでき、文京遺跡は西日本でも屈指の大規模集落で、かつ具体的な集落像を復元できる数少ない事例であるとの認識を得ることができた。埋蔵文化

財調査室は、こうした文京遺跡の調査成果と学問的評価をまとめ、埋蔵文化財調査委員会へ報告するとともに、前述のシンポジウムでも公開した。

この頃、愛媛大学では施設整備長期計画の見直しが進められていた。長期計画では、大学構内の面積が狭いため、建物のスクラップ・アンド・ビルで再開発を進めることとされ、遺跡の濃密に分布する旧グラウンドは再開発の主要範囲とされ、建物建設計画が目白押しの状態であった。

一方、これまでの調査報告を踏まえ、1997年7月1日、松山市文化財専門委員会から、「文京遺跡（愛媛大学構内遺跡）の保存・保護について」の要望書が提出された（資料1）。しかも、その保存要望書には具体的に保存範囲の指定があり、それは再開発を行う予定範囲と重複していた。

こうした遺跡保存と保護の要望を踏まえ、1997年9月10日の将来計画委員会では、1993年2月の「城北団地及び山越団地の施設整備基本計画」の抜本的見直しが提言され、埋蔵文化財に対する愛媛大学の方針決定も含み込むことが確認された。見直しの具体的な事項は、城北団地及び山越団地長期計画検討部会が設置され議論が行われることとなった。この検討部会では、埋蔵文化財調査室の下條信行室長によって、遺跡の分布状況や密度、学問的な評価が報告された。また、埋蔵文化財調査室は、遺跡の現状保存の要望文書を提出した。

その結果、検討部会では、

- ①埋蔵文化財の発掘調査に伴う遺跡は何らかの形で保存されなければならない、
- ②しかし、文京遺跡が所在する城北団地は、あまりにも狭隘で、大学の第一義たる教育・研究とのかわりで厳しく考慮されなければならない、

という視点が確認され、埋蔵文化財にかかる事項は、必要な時点で施設整備委員会および埋蔵文化財調査委員会で審議されることとなった。

これを受け、1998年5月13日の将来計画委員会では、文京遺跡の遺構密集区を離れた位置に、総合情報処理センターと図書館を建設する計画が了承されたが、法文学部西側と工学部講義棟予定地に関しては、学術的価値が確認された時点で見直す必要があるとされた。また、1998年7月8日の埋蔵文化財調査委員会でも、今後の施設整備にあたり、グリーンゾーン的なものも考慮に入れながら、施設整備委員会および埋蔵文化財調査委員会で、この調和について検討を進めていくこととされた。

これら一連の学内協議を踏まえて、8月17日付で事務局長名で松山市教育委員会文化課宛に、これまでの経緯説明の文書が提出される（資料2）。一方で、保存要望書に示された範囲内に総合情報処理センター新設計画が進んでおり、この新設位置も含めて、学長・事務局長・施設部と埋蔵文化財調査室の間で再三にわたり協議が重ねられた。その間、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会からは、9月29日付で、「文京遺跡の保存に関する要望書」が提出された（資料3）。

このような学外からの要望に応える形で、施設整備委員会では、工学部講義棟位置を変更し、住居跡が濃密に分布する総合情報処理センターと工学部校舎間の旧グラウンド部分（東西113.8m×南北49m、約5,525m²）と、大型掘立柱建物群が確認されている法文学部西側駐車場周辺（東西35m×南北44m、約1,270m²）を、グリーンゾーンとして積極的に活用することが了承された（図1）。それは、10月15日、松山市文化財専門委員会へ学長名で回答され、同時に日本考古学協会へも同様な回答が送付された（資料4）。（田崎・吉田）

〈資料1〉

愛媛大学
学長 鮎川恭三 殿

松（教委文）第318号
平成9年7月1日

松山市教育長 池田尚郷（公印）

文京遺跡（愛媛大学構内遺跡）の保存・保護について

このことについて、松山市文化財専門委員会より要望がありましたので別紙のとおり関係書類を送付いたしま

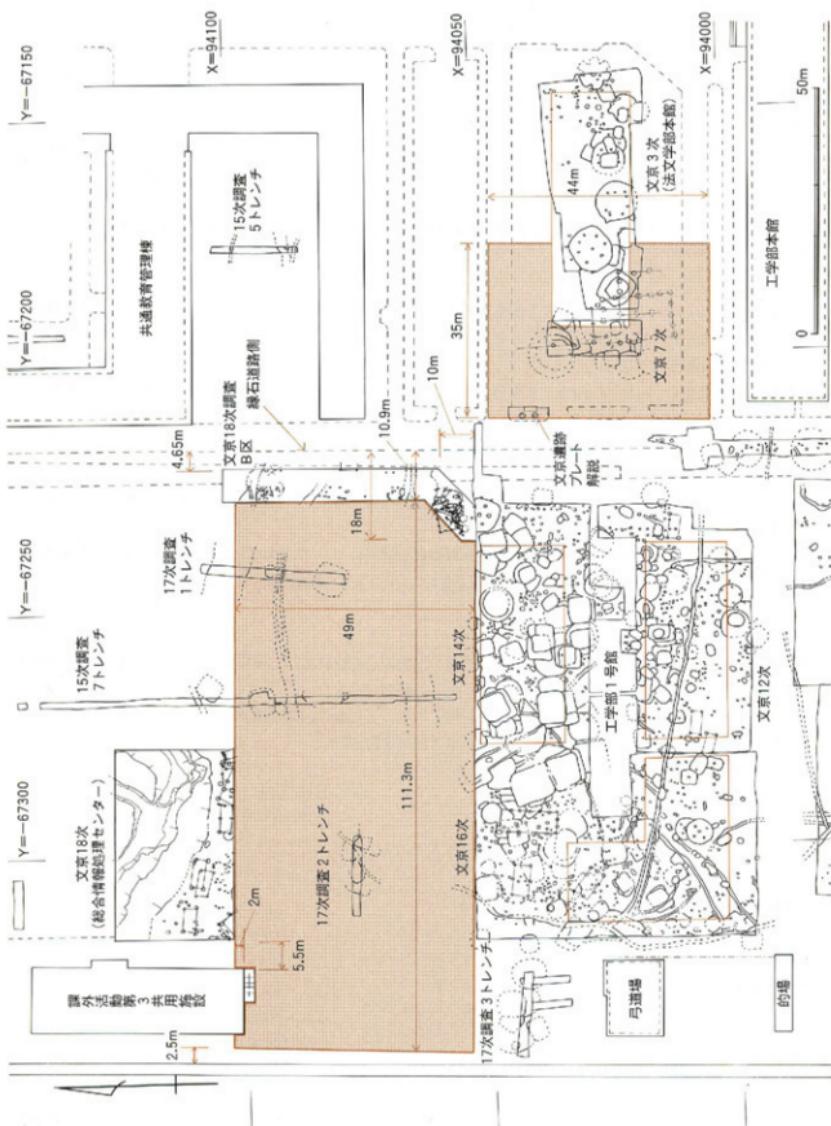


図1 文京遺跡保存地区（グリーンゾーン）位置図（縮尺1/1,000）

す。よろしくご配慮下さいますようお願い申し上げます。

平成9年6月30日

愛媛大学
学長 鮎川恭三 殿

松山市文化財専門委員会
委員長 景浦 勉

文京遺跡（愛媛大学構内遺跡）の保存・保護に関する要望書

趣旨

文京遺跡は、これまで明治42年に平形銅鏡20数本が出土したのをはじめ、故松岡文一氏による愛媛大学構内遺跡出土の弥生式土器による土器編年が行われ伊予古代史を物語る示準的な遺跡として、現在も形式編年作業の進む学史上貴重な遺跡である。

また、昭和50年代からは、松山市教育委員会をはじめ愛媛大学埋蔵文化財調査室により学内施設の増改築に伴う発掘調査が行われ、松山平野での弥生期の拠点集落遺跡的様相を持つ集落構造が明らかにされるとともに、瀬戸内海交流を示す前漢鏡や在地色の強い分銅形土製品等貴重な出土文化財が数多く検出されている。

特に、平成8年度に発掘調査が行われた文京遺跡第13次調査では、吉野ヶ里遺跡級の大形掘立柱建造物が検出されており、古代伊予国の中核的集落を構成する可能性が高まってきており、弥生時代から古墳時代にかけての西日本屈指の重要遺跡として評価されてきている。

これらのことから、現在進めておられる学内施設の建設設計画についてご検討頂き、文京遺跡の保存を前提とした、学内施設等の建設設計画策定に向けてご配慮頂けますよう下記の通り要望いたします。

要望事項

1. 伊予の古代史を物語る重要な遺跡として、遺跡の保護の必要性に鑑み、検出遺構をはじめ中核的様相を持つ集落範囲での遺構保存及び保護措置が図られるようご配慮を頂きたい。
2. これら出土文化財及び遺跡が、国民の共有財産であることに鑑み、文京遺跡の公開を前提とした、出土文化財の公開展示及び保存・保護施設の設置についてご配慮を頂きたい。

* 図面は割愛

〈資料2〉

平成10年8月17日

松山市教育委員会
文化教育課長 松平泰定 殿

愛媛大学事務局長 田中 勇（公印）

文京遺跡（愛媛大学構内遺跡）の保存・保護に関する要望について

このことについて、松山市文化財専門委員会から要望書の送付がありました。本学としては、文化財保護の重要性に鑑み下記のとおり取り扱うことが予定されておりますので、参考までにお知らせいたします。

記

- 1 大學改革の進展にともない城北団地施設整備基本計画を見直すことが平成9年9月に決定され、その際に埋蔵文化財の取り扱いを含めて検討することとされた。その結果、平成10年3月に「埋蔵文化財の発掘調査に伴う遺跡は何らかの形で保存されなければならないが、ことに文京地区のあまりの狭隘さということも大學の第一義たる教育、研究とのかかわりで厳しく考慮されなければならない。この2つの視点に立ちつつ、埋蔵文化財にかかる事項は、検討部会で結論を出すことなく、必要な時点での施設整備委員会及び埋蔵文化財調査委員会等で審議するものとする。」とされた。
- 2 平成10年7月に埋蔵文化財調査委員会が開催され、平成10年度実施事業及び予算について審議され、その際に埋蔵文化財の取り扱いについては、「この団地は建て詰まり状況にあり、遺跡保存の要請と教育研究棟の設置要求との調和を図らなければならない。今後の施設整備に当たり、グリーンゾーン的なものも考慮に入れながら、施設整備委員会及び埋蔵文化財調査委員会でこの調和について知恵を出して検討を進めていくこと」が了承された。

〔注1〕グリーンゾーン的なものの範囲として考えられているのは、大型掘立柱建物遺構跡及び工学部講義棟建設予定地であると、事務的には理解しております。

* 註2 および添付図面は割愛

<資料3>

埋文委 第4号
1998年9月29日

文化庁長官 林田英樹様
文部大臣 有馬朗人様
愛媛県知事 伊賀貞雪様
愛媛県教育長 高橋 弘様
松山市長 田中誠一様
松山市教育長 池田尚郷様
愛媛大学学長 鮎川恭三様

日本考古学協会
埋蔵文化財保護対策委員会
委員長 矢島國雄（公印）

文京遺跡の保存に関する要望書について

標記の件について、別添書類の如く、当該遺跡は学術上きわめて重要な内容をもつものでありますので、貴殿において、その保存の対策を速やかに講ぜられることを要望いたします。

なお、当件の具体的な措置、対策については10月30日（金）までに、ご回答を下さるようお願いいたします。

記

一、別添書類 一通

埋文委 第4号
1998年9月29日

要 望 書

文化庁長官 林田英樹様
文部大臣 有馬朗人様
愛媛県知事 伊賀貞雪様
愛媛県教育長 高橋 弘様
松山市長 田中誠一様
松山市教育長 池田尚郷様
愛媛大学学長 鮎川恭三様

日本考古学協会
埋蔵文化財保護対策委員会
委員長 矢島國雄（公印）

文京遺跡の保存に関する要望書

文京遺跡は、愛媛県松山市文京町の愛媛大学城北キャンパス内に所在し、すでに1950年代にはその所在が知られ、1963年には「旧練兵場遺跡」として愛媛県教育委員会の作成した遺跡台帳に登録されております。

その後1975年以降現在に至るまで、同遺跡については、都合54回にわたる大・小規模の調査が行われ、縄文時代～古墳時代にかけての数多くの遺構や遺物が発見されてきております。特に、弥生時代中期後葉～後期初頭にかけての集落は、東西300m、南北200mの規模で展開され、大型掘立柱建物群を中心とした中枢地区、竪穴式住居の密集する居住地、ガラスなどの製作工房址をもつ生産地区などから構成される、該期の大集落であることが明らかとなってきました。

当該期の集落からは漢鏡や鉄器類、搬入土器を含んだ大量の土器群などが発見されていますが、これらの遺物は、文京遺跡が西日本各地やさらに朝鮮・中国との交流拠点であったことを示しております。

これらから、文京遺跡は、当該期の西日本の社会の様相を知る上で学術上貴重なことはもとより、さらには日本の原始国家形成胎動期の社会を解明する上できわめて重要な遺跡であるということができます。

以上のことから、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会は、文京遺跡を現状で保存し、史跡として整備し、国民的資産として広く公開できるよう、下記の事項を要望いたします。

記

- 過去の調査に鑑み、当面、すでに良好な遺存状態が確認される範囲（別紙参照）の現状での保存をはかり、さらに史跡としての整備をしていただくこと。
- 文京遺跡の範囲の確認、および周辺遺跡との関連につき調査をすすめていただき、遺跡の総合的な把握をし、その保存・活用をおはかりいただくこと。
- 遺跡と出土品の公開・活用について、展示公開施設などの整備・充実をおはかりいただくこと。

* 図面は割愛

以上

<資料4>

愛大 第178号
平成10年10月15日

松山市文化財専門委員会

委員長 景浦 勉 殿

愛媛大学長 鮎川恭三（公印）

文京遺跡（愛媛大学構内遺跡）の保存・保護について

このことについて、平成10年8月17日に本学事務局長から、松山市教育委員会文化教育課長宛に、これまでの本学の状況について回答しておりますが、その後、平成10年10月14日の愛媛大学施設整備委員会で、文京遺跡（愛媛大学城北団地内遺跡）の重要性を考慮して、別紙のとおりグリーンゾーンの範囲を決定し、遺跡の現状保存・保護をはかり、学生・市民の憩いの広場として活用する計画を進めることとしました。

* 別紙で示されたグリーンゾーンの範囲は図1参照。

4 発掘調査報告書の刊行へ向けての整理作業体制の再整備

文京遺跡の現状保存・保護をはかり、学生・市民の憩いの広場として活用するグリーンゾーンの範囲が決定された一方で、調査成果の公開は愛媛大学と埋蔵文化財調査室の次の問題である。その公開の基本は、正式調査報告書の刊行である。ところが、前述したように、1994年度以降、整理作業を擱上げした状態で相次ぐ発掘調査に追われ、正式調査報告書の刊行は大幅に遅れている。2001年度末現在、城北団地にある文京遺跡では1994年度以降に実施した12次調査から24次調査、樽味団地では1997年度以降の樽味遺跡4次調査から6次調査の正式調査報告書は刊行されていない。

こうした状況を少しでも打開するために、1995年度からは出土遺物の洗浄・分類・選別・復元作業を行なうパート職員を採用し、遺物の整理作業を進めてきた。また、2000年12月から翌年2月にわたって、埋蔵文化財調査委員会委員長を座長として大学事務局施設部と埋蔵文化財調査室は協議を重ね、2001年度から以下の整理作業体制の再整備をはかることとした。

①これまで立会・試掘・確認調査成果の報告書としてきた「愛媛大学構内遺跡調査集報」にかえて、1995年から年度ごとの『愛媛大学埋蔵文化財調査年報』を刊行し、立会・試掘・確認調査の小規模調査の正式報告に加えて、全面調査の概要報告を行う。

②発掘調査順にこだわらず、出土遺構や遺物が少ない調査から、正式調査報告書を順次刊行する。

③発掘調査を担当した調査員とともに、累積した出土遺物の実測・製図を行う技術を持つパート職員を採用し、速やかな正式調査報告書の刊行を目指す。

以上の整理作業体制の再整備によって、2002年度には樽味遺跡4・5次調査、2003ないし2004年度には文京遺跡13次調査の正式発掘報告書を刊行できる見通しを得ることができた。これ以外の文京遺跡や樽味遺跡の報告書も、順次刊行する予定である。（田崎）

5 愛媛大学における埋蔵文化財の把握状況

愛媛大学の敷地は松山市および愛媛県内の各所に分

散し、敷地の総面積は464ヘクタールにおよぶ。現在、

把握できている埋蔵文化財の分布は以下の通りである。

城北団地：松山市道後桜又10番、文京町2・3番
法文学部・教育学部・理学部・工学部・大学事務局が所在する。1951年から遺物が採集され、文京遺跡として周知化されている。これまで、1~3・5~24次にわたる全面調査と確認・試掘・立会調査で、繩文時代後期~中世の集落遺跡・生産遺跡であることが確認されている。

持田団地：松山市持田町1丁目5番22号

教育学部附属中・小・幼・養護学校が所在する。近年、団地北東側の隣接した地点で松山市埋蔵文化財センターが14世紀を前後する水田跡を調査しており、その水田層が持田団地内にも広がると推測される。既往の調査成果を含めて、団地北半部には遺跡が分布すると考えられる。

梅味団地：松山市梅味3丁目5番7号

農学部・附属高等学校・附属研究施設が所在し、既往の調査では、団地東半部には14~15世紀の中世集落や自然河川、西半部には古墳時代5~6世紀代の集落遺跡、そして南半部は流路帯となることが明らかになっている。

御幸団地：松山市御幸町2丁目3番15号

学生寄宿舎が所在するが、既往の調査で団地西半部には中世以前の水田層の一部を確認している。

米野団地：松山市米野町乙184-1

農学部附属演習林が所在するが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

梅津寺団地：松山市梅津寺1861

大学課外活動施設が所在するが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

北持田団地：松山市北持田町128-1

職員宿舎が所在しているが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

東長戸団地：松山市東長戸4丁目3番1号

職員宿舎が所在し、既往の調査から、団地東半部を中心として遺跡が営まれている可能性がある。

喜与団地：松山市喜与町1丁目8番8号

職員宿舎が所在しているが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

北吉井団地：松山市桑原2丁目9番8号

職員宿舎が所在し、既往の調査で、古墳時代後期の

集落遺跡が団地全面に展開することが確認されている。

鷹子団地：松山市鷹子町40

国際交流会館が所在し、鷹子遺跡1次調査で、弥生時代中期後葉、7~8世紀、中世の土壙や溝が確認されている。

山越団地：松山市山越4丁目11番10号

大学課外活動施設の野球場・馬場・サッカーフィールドなどの施設がある。丘陵部裾からびる段丘の落ち際に位置し、団地東半部では弥生時代以降の水田層、西半部では古墳時代に埋没した自然河道が確認されている。

中島団地：温泉郡中島町大字小浜字瀬戸木

理学部附属臨海実験所が所在する。既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

重信団地：温泉郡重信町大字志津川

医学部および附属病院が所在する。既往の調査の成果では団地東北部分には遺跡が残る可能性がある。

溝辺団地：松山市溝辺町乙298

農学部附属高等学校の校舎があるが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

横河原団地：温泉郡重信町大字横河原字横川

職員宿舎が所在する。現在の重信川の氾濫原上にあり、埋蔵文化財は分布していない。

北条団地：北条市八反地字伊利甲498

農学部附属農場が所在するが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

津田山団地：松山市北斎院町津田山

教育学部附属養護学校の施設が所在する。1996年度までに2件の調査を実施したが、埋蔵文化財の分布は確認されていない。

伊予団地：伊予市森字下新田729

大学課外活動施設が所在するが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

大井野団地：松山市大井野町乙145-2

農学部附属演習林が所在するが、既往の調査はなく、埋蔵文化財の有無は未確認である。

東野団地：松山市東野4丁目222

農学部附属演習林・短期学生宿舎が所在する。団地および周辺は、東野古墳群として周知化されている。

(吉田)

I 1997年度の調査

1997年度は、本格全面調査として、城北団地における工学部校舎新営Ⅲ期工事に伴う調査（文京遺跡16次調査A区・16次調査B区）と、北吉井団地における屋外排水管改修工事に伴う調査、そして樽味団地における附属農業高等学校校舎新営工事に伴う調査（樽味遺跡4次調査）の4件を実施した。1996年度から行なった確認調査として、城北団地グラウンドで文京遺跡17次調査を行い、遺跡範囲の広がりの把握につとめ

た。また、城北団地で2件、持田団地で2件、樽味団地で5件、北吉井団地で1件の試掘・立会調査を実施した。

件数のみからも明らかなように、1997年度も調査過多の状況はかわらない。これは、吉田・三吉班が文京遺跡14次調査予定分を、その過度の遺構密集から、一部文京遺跡16次調査B区として持ち越したからに他ならない。そのため、同時に持ち越されていた試掘・立

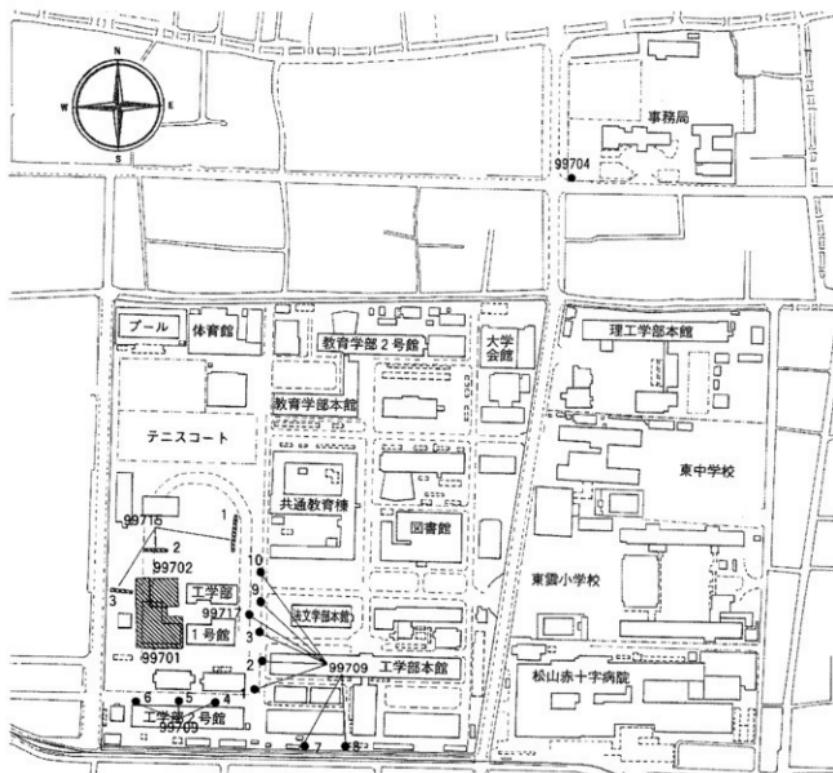


図2 1997年度城北団地（文京遺跡）調査地点（縮尺1/4,000）

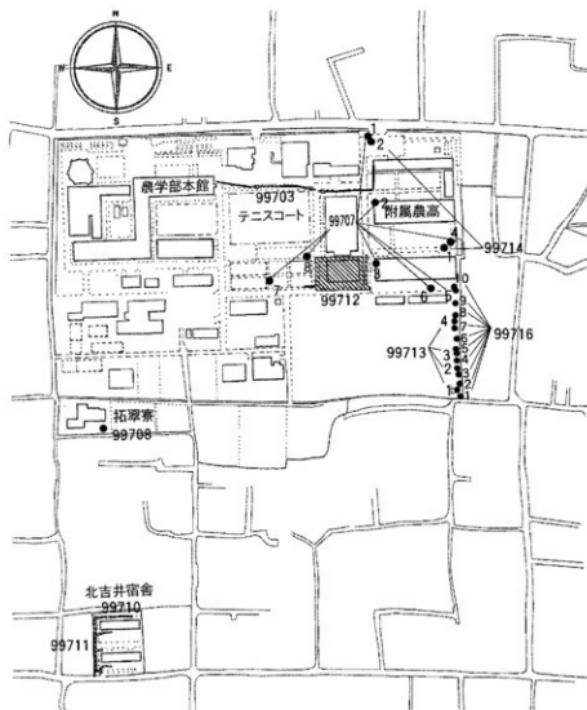


図3 1997年度梅味団地（梅味遺跡）調査地点（縮尺1/4,000）

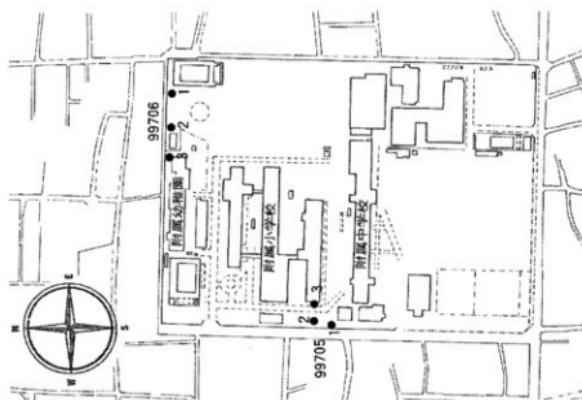


図4 1997年度持田団地（持田遺跡）調査地点（縮尺1/4,000）

会調査を文京遺跡16次調査B区の調査を終えてすぐ着手することとなり、また北吉井団地における調査、樽味遺跡4次調査、文京遺跡17次調査を連続して実施し、

田崎班が担当した文京遺跡16次調査A区とあわせ、2調査班ともが、ほぼ1年を通じて発掘調査にあたるという多忙な年度となった。
(吉田)

99701 工学部校舎新営第III期工事に伴う調査 その1 (文京遺跡16次調査A区)

調査地点 松山市文京町3番

城北団地

調査面積 1,384m²

調査期間 1997年4月28日～1997年12月22日

調査の種別 全面調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄

依頼文書 平成8年9月20日付

愛大工発第502号

1 調査に至る経緯

前年度に着手した工学部校舎新営第II期工事に伴う文京遺跡14次調査では、第II期建物の建設範囲をこえて第III期工事として予定されていた一部を含めて調査範囲が設定されていた。ところが、後述するように、予想以上に遺構が密集し、発掘調査は年度を越すことになった。そのため、文京遺跡14次調査として調査を進めていた第III期工事の範囲の627m²を16次調査B区として第14次調査から分離し、吉田・三吉が引き続き調査にあたり、残る工事範囲の1,384m²を16次調査A区として田崎が発掘調査を実施することとなった。16次調査A区には99701、16次調査B区には99702の調査番号を個々に付した。

2 調査の概要

16次調査A区地点は、城北団地の西南部に位置し、城北団地全域に設定した調査区割りではDS～DZ-20～31区にあたる。1945年以前に練兵場として利用されていた当時の塹壕、愛媛大学が運動場を建設した際の排水管路などによって、遺構の一部は大きく破壊されている。しかし、竪穴式住居跡38、掘立柱建物4、柵列1、溝17、土壙85など、数多くの遺構が出土した(図5)。

出土遺構の中で、竪穴式住居跡・掘立柱建物・土壙・溝には、検出順に1～100、501～554までの通し遺構番号、小穴・柱穴には101～497までの遺構番号を付し、

遺構の種別を示す遺構略号を冠している。ただし、遺構57・58・520・528・542・550、および495・496は欠番である。なお、竪穴式住居跡の一部には、小型で土壙の可能性を残すものも含まれる。

以下、遺構の種別ごとに概要を報告するが、SC-25・554、SK-70、SD-10・73・79は出土遺物と配置関係から古墳時代後期の遺構、柵列であるSA-552は古墳時代後期～中世の遺構と考えられる。掘立柱建物のSB-74・548・549・551は出土遺物の中で時期を確定できるものがないが、弥生時代もしくは古墳時代後期のものと考える。これら以外は、基本的に弥生時代中期後葉～後期前葉の時期幅におさまる遺構である。

[竪穴式住居跡]

SC-4 DS・DT-21・22区に位置する2本柱構造の長方形の竪穴式住居跡である(写真3-①)。埋土は、粘性がややあるため、しっかりとした質感の黒褐色シルトで、部分的に黄褐色砂質シルトの直径5cm前後の小塊が少量混じる。比較的明確にプランを確認できた。小指先大のごく小さな炭化物片が散漫に混じる。床面中央ではSK-22を検出した。極暗褐色砂質土に少量の小指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊や炭化物が混じる浅い皿状の炉跡である。また、東壁際でも焼土・炭化物の広がりが検出され、上面からやや大型の土器片が出土した。また、土製紡錘車1点が出土。

SC-5 DS・DT-22区で検出された。中央部分を塹壕で破壊されているが、3×4.7mの長方形プランを持つ(写真3-①)。床面西側の塹壕際で柱穴を確認できた。2本柱構造と考えられる。埋土は、SC-4とくらべて淡い色調の黒褐色シルトである。ごく少量、小指先大の炭化物がまばらに含まれる。遺物は、小片が散漫に出土したのみである。

SC-6 DS-22・23区で検出した。SC-5に切られる。埋土は、極暗褐色土に点々と浅黄色土の小塊が混じるため、やや淡い黒褐色の土色である。塹壕の壁面でSC-6の壁の立ち上がりを確認したが、非常に緩や

かで、土壤である可能性も残す。

SC-8 DS-23・24区でSD-10に切られ、大部分は調査区外にのびる。黒褐色砂質シルトの埋土で、炭化物の小片が点々と含まれる。SD-10に切られる。切り合は、SD-10がやや粘性の強い埋土であるため、はっきり

と区分できた。

SC-9 DT-23区で「コ」字形に残存する。DT-22区北端で検出した小穴を柱穴とする1本柱構造の竪穴式住居跡と考えた。埋土は、黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じるために、やや淡い色

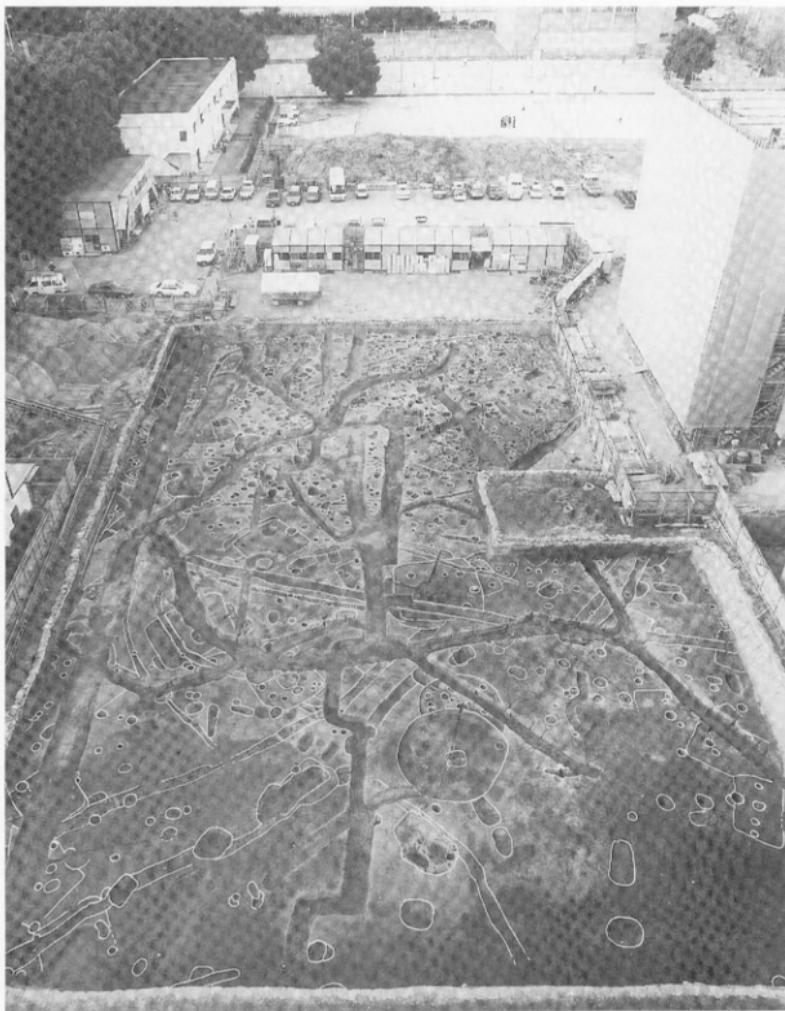


写真2 99701調査（文京遺跡16次A区）・99702調査（文京遺跡16次B区）全景（南から）

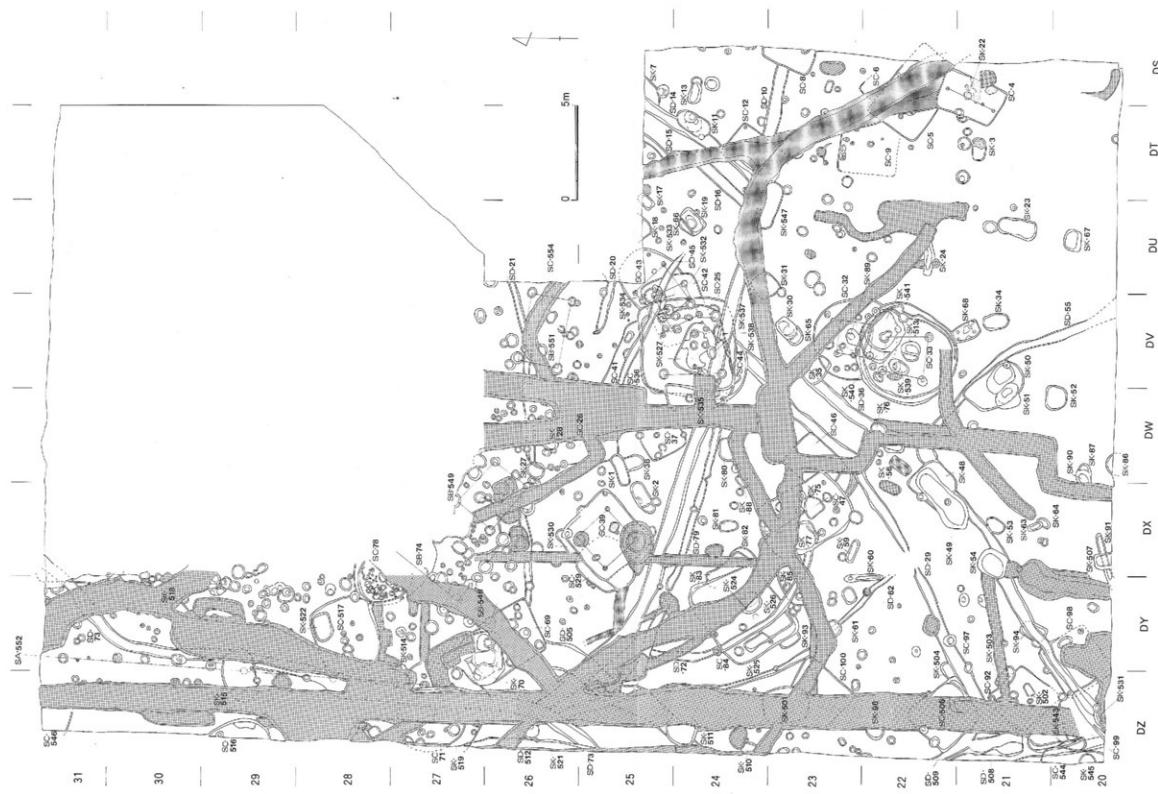


図5 99701調査(文京遭跡16次A区)遺構配置図(縮尺1/200)

調の土色となっている。炭化物の小指先大のブロックが少量散見される。

SC-12 DT-24区で、SD-14との切り合う落ち込みを確認した。土層断面で浅いながら急に立ち上がる壁を確認し、SC-4とほぼ同規模の小型の堅穴式住居跡と考えた。埋土は、暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が少量、散漫に混じる。出土土器には南東九州系の土器がある。

SC-25 DV・DW-24・25区に位置する胴張りの方形プランの堅穴式住居跡である（写真3-②）。 5×5 mほどの規模で、4本柱構造を持つ。SD-10に切られる。埋土中から、南東九州系の土器（図7-1）が出土したが、下層の遺構からの混じり込みと考える。

SC-26 DW-25・26区に位置する隅丸方形プランの堅穴式住居跡。東側の大部分を塹壕で破壊され、SD-21・SK-28・SP-194などに切られている。4本柱構造と考えられる。埋土は、極暗褐色砂質シルトに浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土の親指先大の小塊が多く混じり、IV層上面でも遺構の輪郭はやや不明瞭であった。

SC-32 DV-22・23区に位置する直径4.7mの円形プランの4本柱構造の堅穴式住居跡である。SC-33に切られる。床面中央には、炉跡と考えられる不整円形の土壤（SK-89）がある。サヌカイト製の凹基式打製石鏡1、サヌカイト碎片1が出土。

SC-33 DV・DW-22・23区に位置する。 5.1×5.4 mのほぼ円形の平面形を持つ4本柱構造の堅穴式住居跡である。床面中央には、炉跡と考えられる不整円形の土壤（SK-513）がある。埋土上部には、弥生時代後期前半の土器が廃棄され、これに混じりガラス小玉が53点（ライトブルー完形品20・碎片14、ブルー完形品14・碎片5）、碧玉製管玉2点、磨製石庖丁1点などが出土している。

SC-37 DW-24・25区で確認された。長方形の平面形を持つ。東側は塹壕で破壊され、長軸長は不明であるが、短辺は2.2mほどであり、SC-4と同様な小型の堅穴式住居跡と考えた。床面中央で検出した小穴を柱穴とする1本柱構造を想定しておく。埋土は、暗灰黄色砂質土で、角礫が多く混じり、黄褐色砂質土の大小の楕円形の塊が少量見られる。

SC-39 DX-25・26、DY-25区に位置する。 3.5×3.8 mの不整形の堅穴式住居跡で、4本柱構造と考えられる。出土土器には南東九州系の土器がある（図7-3～6）。また、凹基式の磨製石鏡1、砂岩製の砥石1が

出土した。

SC-41 DV・DW-25区で検出した。埋土は、暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土の塊が多く混じり、検出時の平面形輪郭は非常に不明瞭であった。隅丸方形の堅穴式住居跡と考えるが、SD-45、SC-25などに切られ、北側の壁と床面の一部しか残存せず、柱穴も明らかでない（写真3-②）。

SC-42 DU・DV-24・25区に位置する。4本柱構造の小型の堅穴式住居跡である。SC-25に切られる（写真3-②）。埋土は、暗褐色砂質シルトに直径3～4cm大的浅黄色砂質シルトが斑紋状に混じり、比較的の輪郭がぼやけていたが、IV層上面を少し掘り下げることで遺構の輪郭を確認できた。

SC-43 DU・DV-24・25区で検出した小判形の平面形を持ち、4本柱構造の堅穴式住居跡である。埋土は、極暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土の3～4cm大的塊が斑紋状に多く混じる。SC-42と比べて、斑紋はとくに多いが、IV層との区分はかなり容易で、輪郭線も明確で、SC-42に切られるることを確認した。

SC-44 DV・DW-24区に位置する。円形プランと考えられる堅穴式住居跡で、大部分をSC-25に切られる。

SC-46 DW-23区に位置する。 3.9×2.2 mほどの長方形の平面形を持つ。大部分を塹壕で破壊されており、床面では柱穴は確認できていない。

SC-47 DW-23、DX-23・24区に位置する隅丸長方形の堅穴式住居跡である。2本柱構造と考えられる。埋土は極暗褐色砂質シルトで、部分的に砂礫が多く混じる部分もある。SC-46を切る。埋土の上下より比較的大形の土器片が出土。

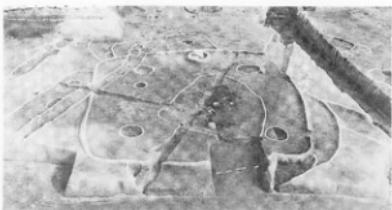
SC-60 DY・DZ-26・27区に位置する長方形プランの堅穴式住居跡である。中央を塹壕、その北側はSK-70に切られる。2柱構造の可能性を考えられるが、確定ではない。

SC-71 DY・DZ-27区に位置する小判形の小型の堅穴式住居跡である。大部分を塹壕で破壊されているが、規模から2本柱構造と考える。SC-71はSC-519と切り合うが、SC-519の掘り下げ中に確認したため、時間的な前後関係は不明である。

SC-78 DY-27・28区で西壁のごく一部を確認した。16次調査B区に大部分がかかる。埋土は上下ともほぼ均質で、暗褐色砂質シルトで、埋土上部には小豆～親指先大の小塊が点々と、下部には比較的多く混じる。弥生土器の小片が埋土上～下部から散漫に出土。埋土



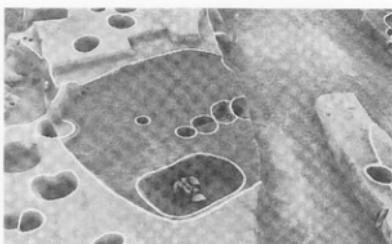
① SC-4・5、SK-3（南から）



② SC-25・41～44・536周辺（西から）



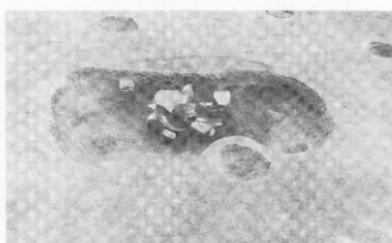
③ SC-84、SK-82・83・93・524（南から）



④ SC-517、SK-522（北から）



⑤ SK-511（東から）



⑥ SK-19（南東から）



⑦ 調査区南西部の溝群（南から）



⑧ SD-79（DV-24区）IV層上面で検出した掻削痕跡

写真3 99701調査（文京遺跡16次A区）出土遺構

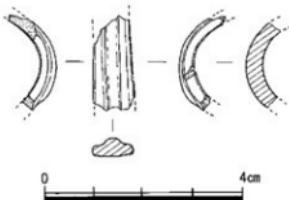


図6 滑石製指輪実測図（縮尺1/1）

の観察からは、一気に埋められたと考えられる。

SC-84 DX-24、DY-23・24区のやや歪んだ隅丸方形の竪穴式住居跡である（写真3-③）。床面中央でSK-524を検出したが、他に柱穴と考えられるものは確認できなかった。滑石製の指輪が出土（図6）。

SC-82 DY-21、DZ-20・21区に位置する方形の竪穴式住居跡である。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトで、浅黄色砂質土の直径3～4cm大の塊が非常に多く見られる。床面の中央で検出した小穴を柱穴とする1本柱構造をとるものと考えた。

SC-87 DZ-21・22区に位置する。当初、SC-506と同じ遺構として掘り下げたが、途中で2つの遺構の切り合いで気づいた。土層断面では、SC-506の上面に重複して掘られた浅い長方形の竪穴式住居跡と考える。SD-29に切られる。

SC-88 DY-20・21、DZ-20区で、SC-99とSD-36に切られる。小型の方形プランの竪穴式住居跡である。東側の壁に沿って細長い土壌を床面で検出した。埋土は、暗褐色砂質シルトに親指先大のにおい黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。

SC-98 DZ-20区で、SC-98を切る方形の竪穴式住居跡である。南東九州系の土器が出土（図7-2）。

SC-100 DY・DZ-23区に位置するやや歪んだ方形の小型竪穴式住居である。床面では柱穴などは確認されていない。

SC-506 DZ-21・22区に位置する。SC-97の下部で確認した。中央を管路で破壊されている。方形プランの小型の竪穴式住居跡で、1本柱構造を考える。埋土中からは弥生時代中期後葉の土器が比較的まとまって出土した。

SC-516 DZ-29区の調査区西壁沿いで確認した。円形プランの竪穴式住居跡である。貼り床が施されている。

SC-517 DY-28区に位置する胸張りの隅丸方形の竪穴式住居跡である（写真3-④）。床面でいくつか小穴を検出したが、その中の1個が柱穴となる1本柱構造を考える。南西部分で埋土中位から炭化物片が比較的集中して出土した。また、埋土中からは弥生土器の小片が散漫に出土。

SC-519 DZ-27区で、SC-71と切り合う。隅丸方形の竪穴式住居跡と考えるが、規模は不明。

SC-523 16次調査B区のSC-54の西端部分である。SC-517を切る。

SC-529 DX・DY-25・26区で、SC-39に切られる胸張りの不整形プランと考えられる。床面では柱穴などは検出されていない。

SC-536 DV・DW-24・25区のSC-25の下部で確認した隅丸方形の竪穴式住居跡である（写真3-②）。埋土は、暗褐色砂質シルトの中に浅黄色・におい黄褐色砂質シルトの拳大の塊が多く混じる。埋め戻された土層か？ 周壁溝が巡るが、その埋土は暗褐色砂質シルトである。

SC-544 DZ-20・21区でSD-508下で検出した隅丸方形の平面形を持つと考えられる竪穴式住居跡である。SK-543を切り、SK-545に切られる。埋土中からは弥生時代中期後葉の土器片と花崗岩の円錐がたまつて出土した。

SC-546 DZ-31区で検出した竪穴式住居跡の一部である。

SC-553 調査の最終段階にDU-25区の調査区壁面を精査中にSC-43の上部にほぼ平坦な床面をもつ遺構を確認できた。壁は垂直に立ち上がり、竪穴式住居跡と考えた。

SC-554 DU-25・26区の調査区壁を精査中に、竪穴式住居跡の断面を確認し、これをSC-554とした。SD-21に切られている。

【掘立柱建物】

SB-74 DX-26・27、DY-27に位置する。3間×1間+αの掘立柱建物で、大半は16次調査B区にのびる。

SB-548 DX・DY-26・27区で確認した梁間1間(2.67m)×桁行2間(6.35m)の掘立柱建物。柱痕跡は直径17～22cm前後である。

SB-549 DW・DX-26・27区で確認した梁間1間(2.3m)×桁行1間(3.05m)の掘立柱建物。柱痕跡は直径15～17cm前後である。

SB-551 DV-26区に位置する梁間1間(2.3m)×桁

行1間(3.5m)の掘立柱建物。SB-548と主軸方向がほぼ一致する。柱痕跡は直径16cm前後である。

[柵列]

SA-552 DY-29~31、DZ-27~29区で、ほぼ等間隔に直線的に並び、立柱痕跡を持つ小穴の列を確認し、SA-552とした。16次調査B区SB-1の主軸方向とほぼ平行し、同時期に営まれた可能性が強い。

[溝]

SD-10 調査区のほぼ中央、DS-DT-23、DT~DX-24、DX・DY-25区のほぼ東西方向にのびる幅50~80cmの溝である。擾乱で破壊されているが、DZ-26区で南北方向にのびるSD-73と連接すると考えられる。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

SD-14 SD-15とほぼ平行して掘られた幅狭の溝である。

SD-15 DT-25区で検出した幅35~40cmの溝である。埋土は、暗褐色砂質シルトに大小の浅黄色砂質土の小塊が多く混じる。

SD-16 DT・DU-24区で検出した幅60cmの溝である。SD-15と方向がずれるが、SD-14とほぼ平行するように掘られている。埋土は、極暗褐色シルトに直径2~5cm大の浅黄色砂質土の塊が点々と混じる。横断面が浅い皿状で、底面には鍬もしくは鍬による掘削痕跡が残され、小さな凹凸にとむ。底面近くからサヌカイト製の凹基式打製石鐵1点が出土。

SD-20 DU・DV-25区で、ほぼ東西方向にのびる幅の狭い溝である。

SD-21 DU~DY-26区で、ほぼ東西方向にのびる幅の狭い溝である。SC-26を切り、SK-27とSC-69に切られる。埋土は極暗褐色砂質シルト。

SD-28 DV-24、DW-23、DX-22、DY-21~22、DZ-21区で、北東~南西にのびる幅60~80cmの溝である。浅い溝のために、DX-22区では部分的に途切れる。SD-36とほぼ平行してのびる(写真3-⑦)。溝底面には鍬もしくは鍬による掘削痕跡が多く残る。埋土は極暗褐色砂質シルトで、下部を中心として、にぶい黄褐色や浅黄色砂質シルトの親指先大~直径3cm大の小塊が点々と混じる。

SD-36 DV-23、DW-22~23、DX-21、DY-20~21、DZ-20区で、SD-29とほぼ平行して北東~南西にのびる幅60~80cmの溝である(写真3-⑦)。DW-22区付近では、SK-48などの遺構に切られ、一旦途切れる。DV-23、DW-22~23区付近では浅いが、調査区南西部で急激に

深さを増し、DZ-20区では溝底から、弥生時代中期後葉の土器と花崗岩の円礫が出土。

SD-45 DU-24~25、DV-25区で北西~南東にのびる幅30~40cmの溝である(写真3-②)。SC-41の掘り下げ中に確認され、そのためSC-41の上部とSD-45の上部の遺物には混乱が生じている。しかし、SC-25・41・42を切ることを土層断面で確認した。

SD-55 DV-20~21、DW-21~22区で、北西~南東にのびる溝である。南東に向かってやや幅が広くなる。

SD-62 DY-22~23、DZ-23~25区で、北西~南東にややカーブしながらのびる幅の狭い溝である。埋土は、浅黄色の細砂質土と暗褐色砂質シルトが互いに塊となって混じり合う。溝底面には、鋤痕跡と考えられる凹凸が溝方向と直交してみられる。

SD-72 DX-23、DY-23~25区で緩やかにカーブしながら南北にのびる幅の狭い溝である。SC-84を切るが、SC-47やSK-77との切り合い関係は不明。

SD-73 調査区の北西部にあたるDZ-25・26、DZ-28、DY-28~31、DX-31区で、塹壕に切られながら南北にのびる溝である。DY-30・31区部分で北東方向へ緩やかにカーブする。SD-10・79とDZ-26区付近で連絡するものと考える。

SD-79 DW・DX-24、DY-24~25区で検出したSD-10に平行して掘られた幅40~45cmの溝である。検出面では非常に浅く、その延長線上のDV-24区では鍬もしくは鍬による掘削痕跡を確認できた(写真3-⑥)。

SD-505 DZ-24、DY・DZ-25~26区で、北東~南西にのびる幅1.3~1.4mの浅い溝である。DY-26区でSC-69、DY-25区でSD-10、DZ-24~25区ではSK-511に切られる。

SD-508 DZ-20~22区で、ほぼ南北にのびる溝である。SD-509を切る。出土土器には南東九州系の土器が含まれる(図7-8・9)。

SD-509 DZ-20~22区で、SD-508を切りながらほぼ南北にのびる溝である。

SD-512 DZ-25~27区で、壁際で確認した。

[土壤]

SK-1 DW・DX-25区に位置する長楕円形の土壤で、SK-38を切る。埋土の水洗中に、ライトブルーのガラス小玉2点(完形品1、碎片1)が出土した。

SK-2 DX-25区に位置する長楕円形の土壤である。埋土中から石庖丁と考えられる石片1、サヌカイト製の平基式の打製石鐵1点が出土した。

SK-3 DT-21区に位置する隅丸長方形の土壌である（写真3-①）。埋土は、ツヤのある極暗褐色シルトで、小指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊を点々と少量含む。土壌底面の西側には灰白色の粘土質土の塊が埋置されていた。

SK-7 DS-25区でSD-14に切られる不整形プランの土壌である。

SK-11 DT-24区でSD-14と切り合う不整楕円形の土壌である。全体に淡い黒褐色砂質シルトの埋土であるが、切り合うSD-14よりもわずかに黒みを帯びる。親指先大の淡黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。また、一部、灰色みをおびた粘土質土の小塊がみられる。上面より土器片が出土。小指先大の炭化物が土壌中央底付近で点々とみられた。

SK-13 DS-24区に位置する不整楕円形の土壌である。

SK-17 DT・DU-25区に位置する小型の長方形プランの土壌である。

SK-18 DU-25区で部分的に確認できた。埋土は、浅黄色砂質土に小指先大～親指先大の極暗褐色砂質土の小塊が非常に多く混じる。底面には小さな凹凸がみられる。堅穴式住居跡の可能性も残る。

SK-19 DU-24区で検出された長方形プランの土壌である。SK-66を切る（写真3-⑥）。

SK-22 SC-4の炉跡。

SK-23 DU-21区に位置する隅丸長方形プランの土壌である。深さ9cmと深い。埋土は、ややツヤのある黒褐色砂質土で、小指大の暗赤褐色土の塊が所々にシミ状に混じる。下層には、黄褐色シルトの塊が点々と見られる。弥生土器の小片が出土。

SK-24 DU-22区で検出された溝状の土壌である。東側を塗壕で破壊されている。

SK-27 DW-26区に位置し、SC-26に切られる。埋土上部は極暗褐色砂質シルト、下部～土壌底近くでは親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。

SK-28 DW-26区で、SC-26を切る円形の土壌。埋土は極暗褐色砂質シルトで、下部～底面近くには親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。また、ごく少量、炭化物が含まれる。

SK-30 DV-23区に位置する不整長方形の平面形の土壌である。埋土は暗褐色砂質シルトで、上半部分は砂っぽい。

SK-31 DU-23・24・DV-23区で検出された胴張りの方形プランの比較的浅い土壌である。塗壕によって北側を破壊されている。埋土は極暗褐色シルトで、浅黄色砂質土の小塊がごく少量点々と混じる。検出面付近で弥生土器片が出土。

SK-34 DV-21区に位置する隅丸長方形の平面形を持つ土壌である。土壌底面はかなり凹凸がある。埋土は、暗褐色砂質土で、黄褐色シルトの小塊大～5cmの大の小塊が多く混じる。弥生土器片・炭化物片が少量出土した。

SK-35 DV-23区に位置する不整楕円形プランの土壌である。SC-32に切られる。

SK-38 DW-25区で、SK-1に切られた長楕円形プランの浅い皿状の土壌である。埋土は暗褐色砂質土で、点々と浅黄色砂質土の小塊がまじる。土壌底面はかなり凹凸にとむ。

SK-48 DW・DX-21区に位置する隅丸方形の浅い土壌である。分銅形土製品1点が出土。

SK-49 DW-22、DX-21・22区で、SK-48を切る不整な長楕円形の土壌である。埋土中から多くの弥生時代中期後葉の土器が出土した。

SK-50 DV・DW-21区に位置する。不整楕円形の土壌で、床面中央は2段に掘り込まれ、その中に弥生土器・花崗岩の円礫が詰まっていた。

SK-51 DV・DW-21区でSK-50を掘り下げ中に確認した不整楕円形の土壌で、SK-50に切られる。

SK-52 DV・DW-20・21区に位置する不整な楕円形プランの土壌である。埋土は暗褐色砂質シルトで、小指～親指先大の浅黄色砂質シルトの塊が少量混じる。浅いが、比較的しっかりした掘り方である。

SK-53 DX-21区で検出した浅い皿状の土壌である。埋土は、暗褐色砂質シルトに浅黄色の細砂質土の拳大の塊が多く混じる。III・IV層の層界部分の自然の凹みとも考えられる。

SK-54 DX-21区に位置する不整円形の土壌である。SD-36と切り合う。

SK-58 DW-22区で検出した不整な楕円形の小型の土壌で、東側を塗壕で破壊されている。

SK-59 DX-23区に位置する細長い溝状の土壌である。土壌底はかなり凹凸にとむ。

SK-60 DX・DY-22・23区で検出した細長い溝状の土壌である。土壌底はかなり凹凸にとみ、北側は小穴状に窪む。

SK-61 DY-23区に位置し、SD-62と切り合う浅い皿状の土壌である。埋土は、暗褐色砂質シルトに浅黄色の親指先～拳大の塊が多く混じる。小豆大ないし小指先大の炭化物の小片が点々と含まれる。

SK-63 DX-21区に位置する不整な長梢円形の小型の土壌。埋土は暗褐色砂質シルトで、小豆大の浅黄色細砂質土の小塊が多く混じる。SK-64と切り合う。

SK-64 DX-21区でSK-63に切られた小型の土壌である。埋土は、暗褐色砂質シルトに親指先大の浅黄色細砂質土の小塊が多く混じる。土壌底は凹凸にとむ。

SK-65 DV-23区でSK-30に切られる胸張りの方形プランの小型土壌である。埋土は暗褐色砂質土で、浅黄色細砂質土の直径1～3cm大の横にひしゃげた塊が多く混じる。

SK-66 DU-24区でSK-19に切られる小型の土壌である。埋土は黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色シルトと褐色シルトの混ざりあった5～6cm大の縦長の塊がごく少量混じる。床面直上から6cm大の円錐が数個出土した。

SK-67 DU-20区に位置する。胸張りの方形プランを持つ土壌である。埋土は全体的に粘質土が主体で、下部に特に粘性の強い土が5～8cmの層となっている。

SK-68 DV-21・22区でSC-33に切られる胸張りの不整な長方形の土壌である。土壌底面は凹凸にとむ。

SK-75 SC-47の炉跡で、炭化物、焼土がつまる暗褐色砂質土。遺構自体は浅い皿状の不整形の凹みで、土壤底は凹凸にとむ。

SK-76 DW-22区に位置する梢円形の小型土壌。埋土上部は、極暗褐色砂質シルトに浅黄色、にぶい黄褐色砂質土の小塊が点々と混じる。下部は、暗褐色砂質土に浅黄色砂質土が非常に多く混じる。甕が一個体分出土。

SK-77 DX-23区で、SC-47の床面で検出した。不整円形の土壌で、塗壙溝壁でSC-47を切ることを確認。

SK-80 DW-24区で、塗壙に両側を切られた梢円形の土壌である。埋土は暗褐色砂質シルトで、指先大の浅黄色砂質土が塊で多く混じる。とくに埋土下部に多い。

SK-81 DX-24区のほぼ中央に位置する浅い皿状の土壌。埋土は暗褐色砂質シルトで、下部を中心に浅黄色砂質土が多く混じる。

SK-82 DX-24区でSK-83と切り合う不整円形の土壌(写真3-③)。埋土は、暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土の2～5cm大の不整形な塊が多く混じる。

SK-83 DX・DY-24で、SC-84に切られる土壌である(写真3-③)。当初、住居跡と考えたが、床面が平坦でないため土壌とした。埋土は、暗褐色砂質シルトに、ごく少量の浅黄色やにぶい黄褐色砂質シルトが混じる。SC-82との関係は、切り合い部分が攪乱で失われているために不明であるが、遺物の出土状況からはSK-83がSK-82を切る可能性が強い。

SK-85 DX・DY-23区に位置する梢円形の土壌で、南半部は塗壙で切られている。

SK-86 DW-20区に位置する円形の土壌で、大半は調査区外にのびる。

SK-87 DW-20区に位置し、SK-90と切り合う。

SK-88 DW-24区とDX-24区の境界部にある小型の土壌。埋土は極暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土の直径2～3cm大の塊が埋土下部を中心として混じる。

SK-89 DV-23区に位置するSC-32の炉跡である。

SK-90 DW-20区に位置し、SK-87と切り合う。土壌断面を観察中にSK-87とSK-90の切り合いに気がついた。そのため、一部の遺物に混乱が生じている。

SK-91 DX・DY-20区に位置し、SK-507を切る細長い溝状の土壌である。埋土は、極暗褐色砂質シルトで、III層と比べてやや光沢をおびた土質である。

SK-93 DY-23区で、SC-84に切られる。非常に浅い土壌(写真3-③)。埋土上部には、小豆大の浅黄色砂質土の小塊が点々と混じり、下部ではそうした塊がやや大きくなつて多く含まれる。

SK-94 DY-21区でSD-36を切る隅丸長方形の小型土壌。

SK-95 DW-20区の調査区壁面で、SK-86の上部や東側にずれて確認した土壌と考えられる遺構である。埋土は、黒褐色砂質土で、褐色シルトの粒状の塊が少量混じる。また、1～3mm大の角礫や小石を多く含む。高坏の脚部破片が出土。

SK-96 DZ-22区で塗壙に東半部分を切られた円形の土壌である。埋土は、暗褐色砂質シルトに、わずかに浅黄色砂質土が混じる。

SK-901 DZ-23区に位置する。大部分を管路掘方で破壊されるが、2.5×2mほどの小判形の平面形をもつ土壌と考えられる。

SK-902 DZ-20・21区で、SC-92床面で検出した。非常に浅い皿状の凹みで、SC-92に伴う遺構である可能性が強い。埋土は、暗褐色砂質シルトに浅黄色の3～5cm大の薄いレンズ状の塊が多く混じる。

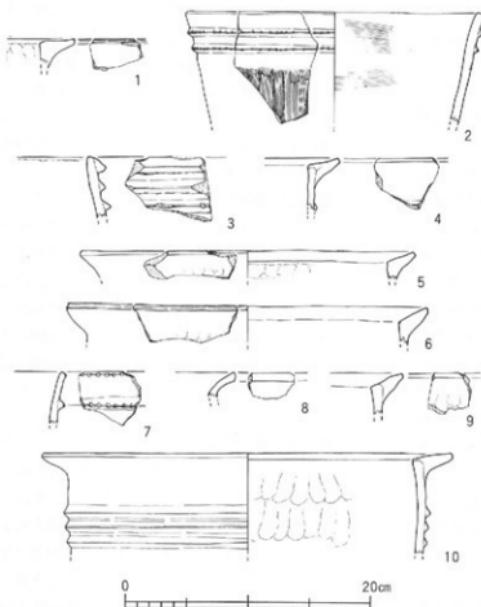


図7 南東九州系土器実測図（縮尺1/4）

SK-503 DY・DZ-21区で、SC-92を切る非常に浅い角底状の土壤である。埋土は、暗褐色砂質土に浅黄色やにぶい黄褐色砂質土の小豆～親指先大の小塊が非常に多く混じる。

SK-504 DY・DZ-22区で、SD-29とSC-97に切られた梢円形プランの土壤である。埋土は暗褐色砂質シルトに小豆～親指先大の浅黄色砂質土の塊が混じり、特に埋土下部に多い。

SK-507 DX-20区で、SK-91に切られる不整な長方形の土壤である。

SK-510 DZ-24区に位置し、攪乱部分で大半を破壊されている。埋土は、極暗褐色砂質シルトで、下部にはにぶい黄褐色砂質シルトの小豆大の小塊がごく少量、点々と混じる。

SK-511 DZ-24・25区に位置する不整な梢円形の土壤である（写真3-⑤）。SK-505を切る。埋土は暗褐色砂質シルトで、砂礫を多く含み、1～2cm大の花崗岩や砂岩の玉石が多く混じる。弥生時代中期後葉の壺が

数個まとまって出土した。また、埋土下底部からはサヌカイト製の平基式打製石鏃1点が出土。

SK-513 DV-22区のSC-33の炉跡。

SK-514 DY-27区の擾乱溝の壁面で確認した。土壤底は南側はかなり凹凸があるが、北側はほぼ平坦である。埋土は、砂礫を少量含む暗褐色砂質シルトで、小豆～親指先大の浅黄色砂質土の塊が多く混じる。

SK-515 DY・DZ-29区に位置する。小判形の土壤と考えられるが、東西を擾乱溝で破壊され、規模は不明である。埋土は暗褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色や灰白色粗砂の大小の塊が点々と混じる。土壤底はかなり凹凸にとむ。

SK-518 DY-30区で、攪乱溝で大半を切られた状態で検出した。埋土は暗褐色砂質シルトで、小円錐や小石が多く混じり、下部を中心として浅黄色のひしゃげた親指先大の小塊が多くみられる。

SK-521 DZ-26区で、北側を塹壕で破壊された円形プランの土壤である。

SK-522 DY-28区で、SC-517の床面で検出したやや重んだ隅丸長方形の土壤である（写真3-④）。屋内貯蔵穴など、SC-517に伴う何らかの施設であると考えられる。

SK-524 DY-24区のSC-84の床面で検出した。埋土は暗褐色砂質シルトで、上半部を中心として不整形の焼土の小塊がみられ、土壤底の南半部からは炭化物が集中して出土。配置関係からも、SC-84の炉跡と考える（写真3-③）。

SK-525 DY-23・24区のSC-84の床面で検出した細長い隅丸長方形の土壤である。SC-526に切られる。埋土は暗褐色砂質シルトであるが、浅黄色砂質土が少量含まれるため、やや白っぽい土色である。また、にぶい黄褐色砂質シルトの大きな塊が混じる。

SK-526 DY-23・24区のSC-84の床面で検出した隅丸長方形の土壤。SD-72に切られ、SK-525を切る。埋土は暗褐色砂質シルトで、浅黄色砂質土の大小の塊が多く混じる。炭化した梅の種子など、炭化物片が出土。

SK-527 DV-24区のSC-25の床面で検出した（写真

3-②)。埋土は暗褐色砂質シルトで炭化物を多く含み、底面には炭化物が集積する。埋土を水洗中に、ガラス管玉(?)1点とガラス小玉4(ライトブルー3、ブルー1)、磨製石庖丁1点が出土。

SK-530 DX-26区でSC-39に切られる細長い溝状の土壤。

SK-531 DZ-20区に位置する。南側の大部分を搅乱壙で切られている。搅乱壙の壁面でSD-36・SC-99を切っていることを確認した。SP-438に切られる。

SK-532 DV-25区のSC-25の床面で検出した。SC-536を切る。浅い7cmほどの深さの横円形の土壤で、埋土は暗褐色砂質シルトに、不整形の浅黄色砂質土やにぶい黄褐色砂質シルトの3~5cm大の塊が多く混じる。

SK-533 DU・DV-25区でSD-45に切られた長楕円形の土壤。SC-25の床面で検出され、SC-536に切られる。SK-532と共通する埋土をもち、浅黄色砂質土が多い。

SK-534 DU・DV-25区のSC-42の床面で検出した不整円形の土壤。埋土は暗褐色砂質シルトで、浅黄色砂質土が縞状に混じる。

SK-535 DV・DW-24・25区で、SC-25に切られた不整長方形の土壤である(写真3-②)。埋土は、暗褐色砂質シルトに少量の浅黄色砂質土の塊が点々と混じる。

SK-537 DV-24区のSC-25内SK-527の下部で検出した。埋土は極暗褐色シルトで、SK-527と異なり炭化物は混じらない。

SK-538 DV-24区のSC-536南壁沿いで確認した。SC-536の出入り口施設の可能性がある。埋土は、暗褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質シルトの3~4cm大の塊が非常に多く混じる。

SK-539 DV-22区のSC-33の床面で確認した長楕円形の土壤。SC-33に敷設された遺構である可能性を持つ。

SK-540 DV-22・23のSC-33下部で検出した隅丸長方形の土壤。SK-541に切られる。

SK-541 DV-22区でSC-33下部で検出した不整な円形プランの土壤。SK-540を切る。東側から投げ込まれた状態で弥生時代中期後葉の土器片や人頭大の石が出土した。

SK-543 DZ-20区でSC-544に切られる胴張りの長方形プランの土壤である。

SK-545 調査区南西端のDZ-20区で、SD-508下で検出した円形の土壤である。SC-544を切る。埋土は黒褐色砂質シルトで、鈍い黄褐色シルトの小塊が多く混じり、全体に白っぽい土色となっている、炭化物の小片が出土。

SK-547 DT・DU-23・24区で、北側を斬塚で破壊された長楕円形の土壤である。

[Ⅲ層出土の遺物]

Ⅲ層中からは、黒曜石片1、柱状片刃石斧1、緑色片岩製の磨製石庖丁8(内2点は未製品)、サヌカイト製の打製石庖丁1、石鐵4、サヌカイト石片2、砥石1、分鋼形土器品1、土製鉗鉗車1、鉄鋤1ほかが出土している。土器では、繩文土器と弥生時代前期の土器片が各1点、調査区西南部では南東九州系の土器(図7-10)が出土している。

3 調査のまとめ

城北キャンパスの南西部では、これまでに、のべ約9,000m²の発掘調査を行っている。その中で、今回の調査を含めて、弥生時代中期後葉～後期前葉の大型掘立柱建物が4棟、高床倉庫と考えられる小型掘立柱建物が22+α棟、堅穴式住居跡が約150軒、その他土壙が100基以上が確認されている。こうした大規模な弥生時代集落の範囲は、分布密度がやや低くなりながらも、今次調査区よりさらに西側へ広がっていることを確認できた。

当該期の出土遺物の中では、とくに南東九州系の土器(図7)と滑石製指輪(図6)が注目される。南東九州系の土器は瓈形土器ばかりであり、在地の弥生時代中期後葉の土器とともに出土している。現在の宮崎県～鹿児島県の大陵地域に分布する弥生時代中期後葉の瓈形土器と形状が類似するだけではなく、共通した胎土と器面調整をもち、搬入品もしくは忠実に模倣されたものと考えられ、西部瀬戸内と南東九州の弥生時代中期後葉の地域間交流の実態を探る手がかりとなる。

滑石製の指輪は、SC-84で弥生時代中期後葉の土器とともに出土した。内径17mm、外径21mm、幅8.3mmを測り、現在の指輪号数では14号にある。横断面は膨らみをもった平べったいD字形を呈し、外面には幅3mmほどの隆起帯がめぐる。現在、繩文時代～弥生時代の指輪と考えられる遺物は33遺跡80例ほどが出土している。繩文時代～弥生時代中期中頃までの指輪は、貝製・鹿角製・石製・獸骨製があり、弥生時代中期後半にな

ると石製・青銅製・ガラス製の指輪が出土し始める。さらに、後期には舶載品である青銅製品と銀製品が加わる。石製品は弥生時代中期中頃以前には少なく、中期後半以降に多くなる。

古墳時代後期の造構は、今回の調査地点では少ないが、調査区南部～北西部でSD-10がSD-73に連結しな

がらL字形にのびている。その内側にあたる14・16次調査B区には、同時期の竪穴式住居跡や掘立柱建物などが群集する。しかも、南側にあたる12・16次調査A区の南半部では遺構や遺物は出土していない。古墳時代後期の集落を区画する溝であり、当該期の集落の南西角を確認できたことになる。
(田崎)

99702 工学部校舎新営第III期工事に伴う調査 その2 (文京遺跡16次調査B区)

調査地點 松山市文京町3番

城北団地

調査面積 627m²

調査期間 1997年4月9日～7月29日

調査の種別 全面調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成8年1月11日付

愛大企発 第502号

1 調査に至る経緯

1996年度の工学部校舎新営第II期工事に伴う調査は、予想以上の造構密度によって、計画期間内に調査を終えることが不可能な状態に立ち至った。その状況が明らかとなった1996年12月に、埋蔵文化財調査の計画変更を行い、当初計画期間内には、工学部校舎新営第II期工事建物本体部分(1,349m²)のみについて、埋蔵文化財調査を終えることとした。そして、残る627m²に関しては、工学部校舎新営第III期工事建物部分北

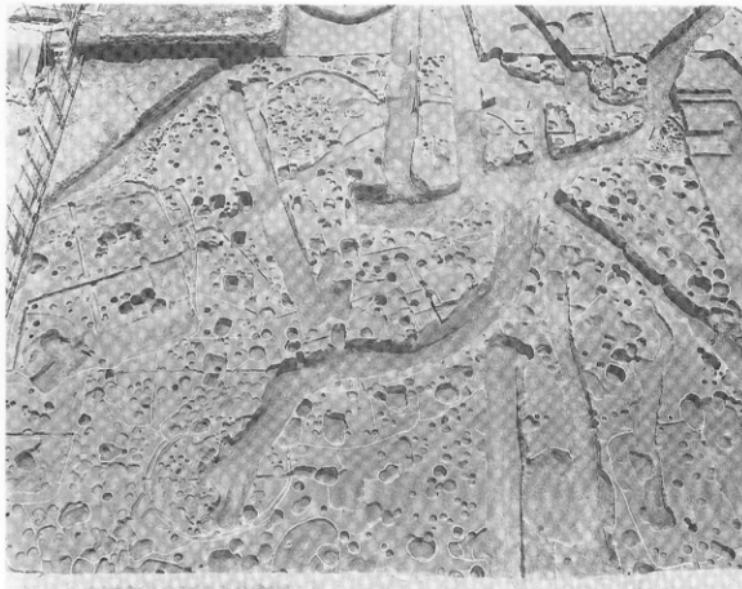
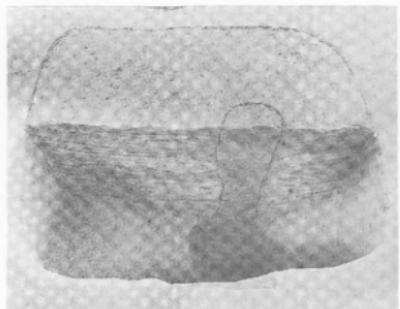


写真4 99702調査(文京遺跡16次B区) 完掘全景(北から)



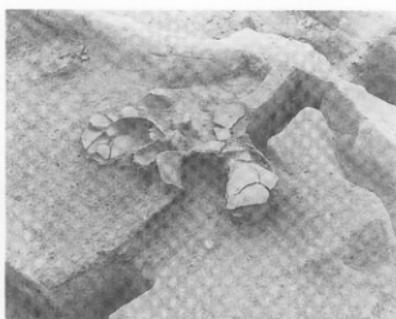
① SB-1 柱穴SP-110土層断面（西から）



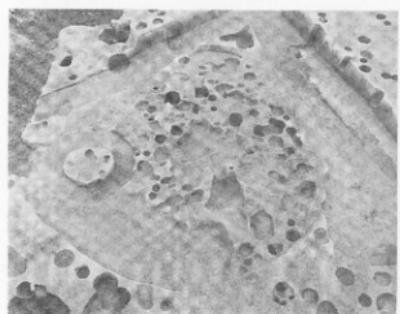
② SB-1 (北から)



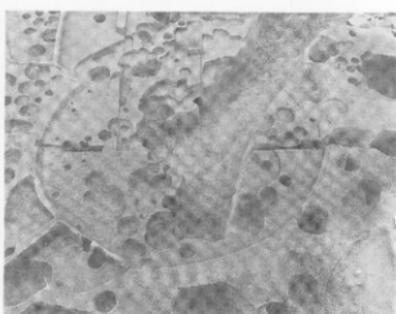
③ SC-14カマド周辺遺物出土状況（南東から）



④ SC-14カマド内遺物出土状況（南東から）



⑤ SC-3 (南から)



⑥ SC-22 (北から)

写真5 99702調査（文京遺跡16次B区）出土遺構

半に該当し、この残る南半部分とともに、工学部校舍新営第III期工事に伴う調査として対応することとした。南半部分は、文京遺跡16次調査A区とし、田崎が担当し、対して北半部分をB区として、14次調査に引き続いて吉田・三吉が調査を担当することとなった。なお、16次調査B区については、当初14次調査内で、表土から第III層の掘削を終えており、それ以降の作業を16次調査B区とし、既に出土していた遺物については、表土部分はそのまま14次調査出土とし、地点の明確な第III層以下の遺物は、16次調査B区に振り替えを行った。

2 調査の概要

出土遺構は、竪穴式住居跡 $35+\alpha$ 棟、掘立柱建物跡 $2+\alpha$ 棟、土壙 $18+\alpha$ 基、溝 $3+\alpha$ 条、そして柱穴多数である(付図1、写真4)。竪穴式住居跡は、弥生時代中期後葉から後期前葉のものと古墳時代後期のものがあり、弥生時代のものは、径5m前後の大型円形のもの(SC-2・3など、写真5-⑤)と、径3~4mの小型円形(SC-22・41・53など、写真5-⑥)、そして一辺4m以下の小型長方形ないし方形(SC-13・18・19・20など)の3者が存在する。そこには機能差が存在するのかもしれない。

一方、古墳時代のものは基本的に方形で、一辺6m

を超える大型のもの(SC-4・5・8・14など)と、4m以下の小型のもの(SC-23・43など)に分ける。大型の竪穴式住居跡には基本的にカマドが付随し、SC-14ではカマド横に供膳器である須恵器壺身・壺蓋が置かれ、カマドには横2連に甕がかけられた状態で検出された(写真5-③・④)。また、古墳時代の竪穴式住居跡群を囲繞すると見られる溝(SD-47)の一端が、調査区北西端で見つかっており、文京遺跡16次調査A区のSD-10・73、文京遺跡12次調査のSD-6へと接続すると思われる。なお、SD-47は、埋土が砂層と粘質土がレンズ状に互層をなし、水流の痕跡を認められる。

これら古墳時代後期の竪穴式住居跡をさらに切って掘立柱建物が数棟営まれている。そのうち1棟(SB-1)は南北長辺11m・東西4~4.5mの6間×3間の大型で、柱穴掘方が長方形を呈する(写真5-①・②)。少ない出土遺物に、竪穴式住居跡と差異を見出しがたいが、あるいは古代まで時期が下がるかも知れない。なお、東の文京遺跡14次調査区ではほとんど認められなかった中世の遺物も出土が見られ、II層に近似するオーレ褐色土等を埋土とする遺構も、柱穴数基と大型土壙1基(SK-45)を確認している。出土遺物から、11~13世紀と見られる。

(吉田・三吉)

99703 ATM-LAN整備工事に伴う調査

調査地点 松山市樽味3丁目5番7号

樽味団地

調査面積 131m²

調査期間 1997年4月14日~4月17日

調査の種別 全面調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄

依頼文書 平成9年1月13日付

愛大企発第2号

1 調査にいたる経緯

愛媛大学では、学術情報センターが構築・運営しているSINETの高度化・高速化に対応した学内ネットワーク環境の整備が進められ、それを支えるATM-LAN(高速マルチメディアネットワークシステム)の設置工事が計画・実施されることとなった。

しかし、ATM-LAN管路は、幅は狭いものの、構内の建物の間を繋ぐので調査面積が比較的広くなる。そのため、施設部との協議を行い、

①既設管路がある場合には、その掘り方内に埋設する、

②周辺の既往調査データから、工事に伴う掘削深度を埋蔵文化財に影響のない程度にとどめる、こととなった。

こうした協議を進めたが、樽味団地においては、工事による掘削深度を現地表下50cmに設定したものの、農学部本館と附属農業高等学校校舎を繋ぐ管路部分東半部では、周辺で既往の調査例がないために、埋蔵文化財に影響を与えるか否か判断ができなかった。

そこで、管路東半部分と掘削深度が1mをこえる地中箱設置地点について、事前に調査を実施することになった。また、管路西半部についても、既往の調査成

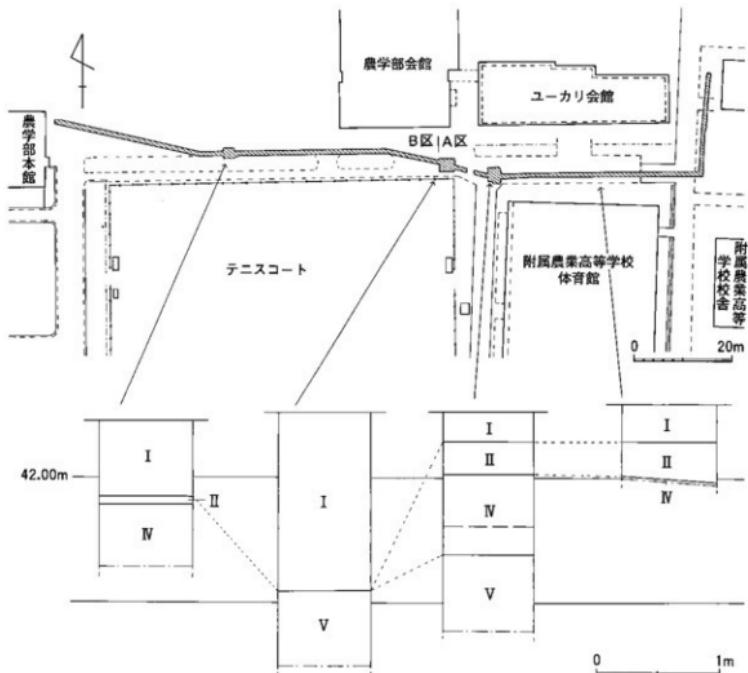


図8 99703調査区全体図および土層断面図（縮尺1/1,000、1/40）

果(調査番号：98704・99214・99303・99311・99312)から、掘削の根切り面が遺構検出面の直上にあたるので、立会形式の調査を行うこととした。

調査では、全面調査を行う管路東半部分をA区、立会形式で調査を行う管路西半部分をB区とした(図8)。また、調査にあたっては、すでに設定している専用団地全域にわたる基本層序I～V層に準拠して土層の観察を行った。

2 調査の記録

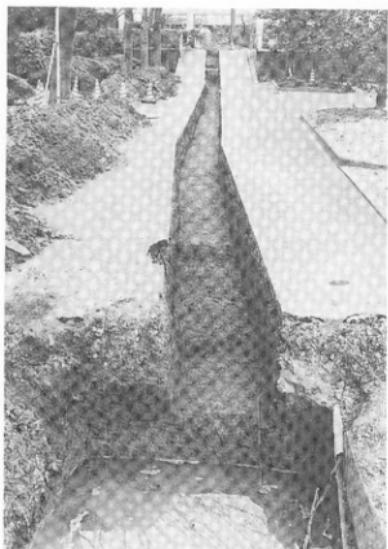
(1) A区の調査

A区は、団地の中央北よりにあるテニスコートの北東角付近から附属農業高等学校校舎までのL字形の調査区で、管路と地中箱の設置部分である。

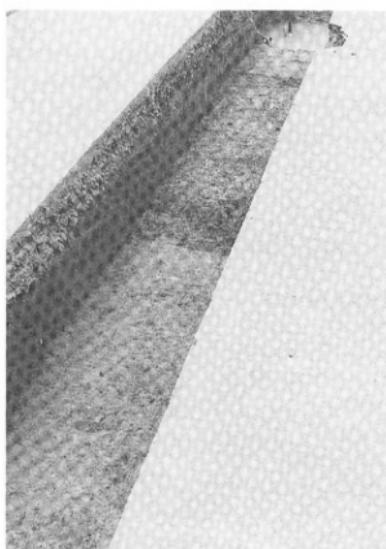
調査は、農学部敷地の中で附属農業高等学校敷地の

東端を流れる用水路の東西の2地点に設置される地中箱地点から開始した。西側の地中箱設置地点では、擾乱が著しく、現地表下1.45mで拳へ頭大の礫層があらわれた。東側の地点では、I・II層の下面、現地表下50cmでIV層の黄褐色粘質シルト層を検出し、他の地点で確認されている弥生時代～古墳時代の遺物を包含するIII層はみられなかった。IV層上面で遺構検出に努めたが、遺構・遺物は出土しなかった。工事では現地表下2mまで掘削されるので、さらにIV層を掘り下げたが、IV層下部は黄色みが強いAT火山灰を含むとみられるシルト層に変化する。さらに、IV層の下部には、西側の地中箱地点と同じく拳へ頭大の礫層があらわれた。この礫層は、西側地点の礫層とともに、基本層序のV層にあたる。

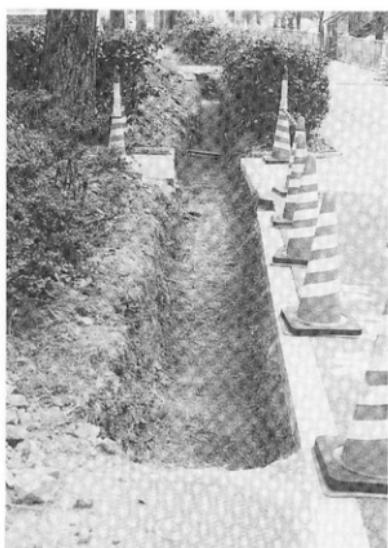
管路部分の調査では、工事で掘削される現地表下50



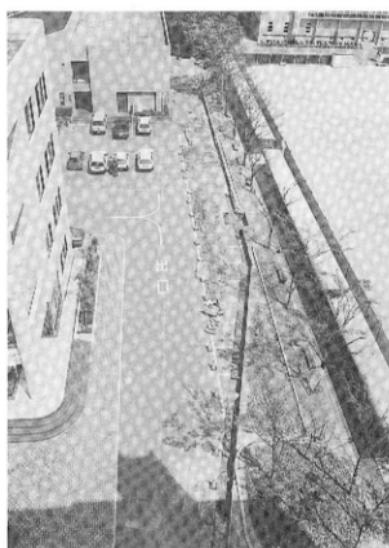
① A区体育館北側全景（西から）



② A区西端土層断面



③ A区附属農高東側全景（北から）



④ B区全景（西から）

写真 6 99703調査A・B区全景および土層断面

cmまで掘り下げて調査を行ったが、水路東側の地中箱周辺ではIV層上面を確認したものの、附属農業高等学校体育館前では団地造成以前の旧水田層にあたるII層が続く。附属農業高等学校体育館の玄関前付近で、一部、II層を掘り下げたが、現地表下60cmでIV層上面を検出した。この地点のIV層は、砂礫が多く混じる黄褐色シルト層である。この砂礫を多く含む土層は、樽味遺跡2次調査(調査番号:99101)層では、AT火山灰を多く含む黄褐色粘質土層と同じく、IV層の中でも下部を構成する堆積物である。したがって、周辺はかなりの削平を受けているものと考えられる。

また、体育館北東角～附属農業高等学校校舎付近では、現地表下50～55cmまで、造成土および搅乱土が続く。体育館東側には、擁壁が設けられている。この擁壁の設置工事に関わる造成土と考えられる。

(2)B区の調査

B区は、団地の中央北よりにあるテニスコートの北側に沿った部分である。地中箱を埋設する部分が1ヶ所あり、造成土のI層と旧水田層のII層を除去し、現

地表下65cmでIV層上面を確認した。遺構検出に努めたが、遺構・遺物は出土しなかった。

地中箱設置地点から東側の管路部分では、現地表下40cmで建物基礎があらわれ、埋蔵文化財はすでに破壊されているものと判断した。また、西側の管路部分では、工事に立ち会って、掘削の根切り面を観察したが、掘削が造成土の中におさまることを確認して調査を終了した。

3 調査のまとめ

今回は、施設部との協議を重ねて、設計変更などにより、埋蔵文化財への影響を最小限にとどめることができた。また、これまで、調査が実施されていなかつた附属農業高等学校敷地の北西部分では、体育館東側の擁壁工事で、周辺の削平と造成が行われていることを確認できた。しかし、今回の調査は部分的なものであり、削平と造成の範囲と深度がどの程度まで及んでいるのかは確認できていない。(田崎)

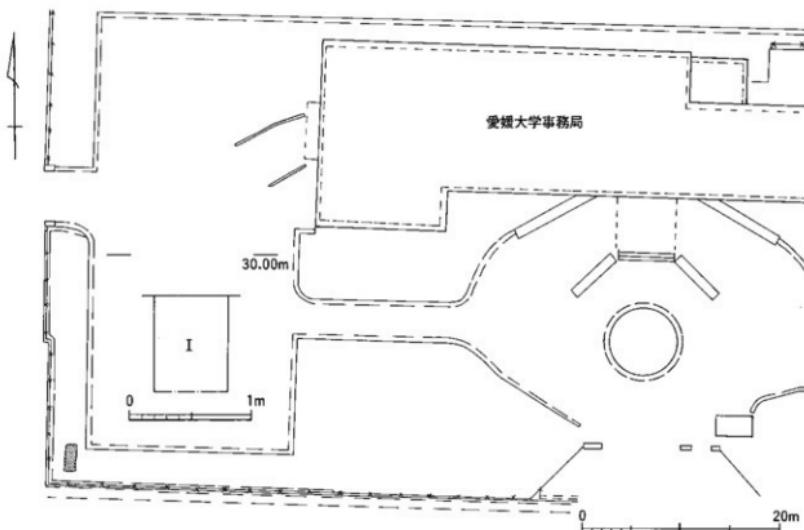


図9 99704調査地点位置図および土層断面図(縮尺1/400、1/40)

99704 事務局案内標識板取設工事に伴う調査

調査地点 松山市道後頃又10番13号
 城北団地
 調査面積 2.7m²
 調査期間 1997年8月4日
 調査の種別 立会調査
 調査担当 吉田広・三吉秀充
 依頼文書 平成9年4月22日付
 施設課長発事務連絡

1 調査にいたる経緯

城北団地において事務局案内標識板の取設工事が行

われることとなり、立会調査を実施することとした。

2 調査の記録

工事予定地は、城北団地（事務局）南西角に位置する。現地表下80cmまで掘削を行ったが、瓦礫を伴った表土層が続いており、遺構・遺物は出土しなかった（図9）。

3 調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。

（吉田）

99705 持田団地内構内光ケーブル布設工事に伴う調査

調査地点 松山市持田町1丁目5番22号
 持田団地
 調査面積 4.5m²
 調査期間 1997年8月4日
 調査の種別 立会調査
 調査担当 吉田広・三吉秀充
 依頼文書 平成9年7月7日発
 愛大絶情発 第17号

1 調査にいたる経緯

持田団地内において、光ケーブルの布設が計画され、該当範囲内において、埋蔵文化財調査に対応することとなった。しかし、周辺では、既往の調査例（調査番号：99309-2）は少なく、ケーブル管路部分の工事による掘削深度（現地表下60cm）では、埋蔵文化財への影響が及ぶ可能性は低いと推測されたものの、掘削深度が100cmをこえる地中箱設置地点については、埋蔵文化財への影響が予想された。そこで、地中箱設置地点部分に関して、まず立会形式の調査を行うこととし、その結果によって、管路部分について判断することとした。

2 調査の記録

調査では、地中箱設置地点について、南西のものを1トレンチ、北西を2トレンチ、校舎に近接する北東

を3トレンチとした（図10）。

(1) 1トレンチ

既設構造物のため、当初計画より西に位置をずらし、持田団地西側壁に接する位置にトレンチを設定した。現地表から40cmほどの深さまでは擾乱層で、東半分は既設管路により布設掘削深度まで擾乱層が及ぶ。管路による擾乱の及ばない西半分は、地表下40cmから掘削深度の100cmまで、5mmの大石を多く含むにぼい黄色シルト（II層）が続く。そのうち上部（II-①層）は砂質が強いのに対して、下部（II-②層）は粘性があり、マンガンの沈着がより多く認められ、炭化物も混じる（図11、写真7）。II層中からは、重機で掘削途中に近世以降の陶器片が出土している（図12）。

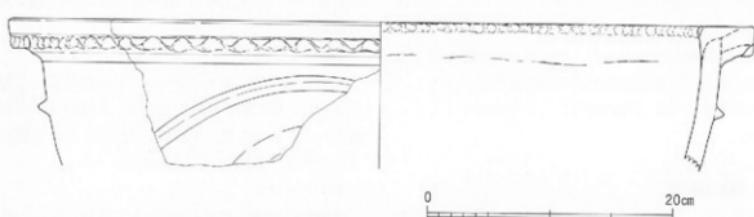
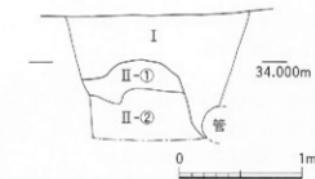
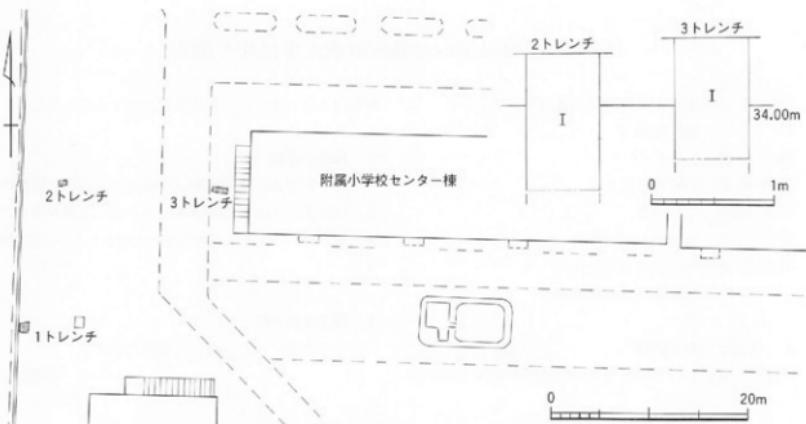
このII層は、これまでの持田団地で確認されている中世水田層（99309-1・2の③層；黄褐色砂質土層）とは異なり、出土土器から近世以降の耕作土層と考えられる。

(2) 2トレンチ

地中箱設置深度である100cmまで重機によって掘り下げたが、擾乱層が続く。ただし、擾乱後すぐに埋め戻されているようで、1トレンチで見られたII層が小ブロック状に擾乱土中に混在する。

(3) 3トレンチ

地中箱設置深度である100cmまで重機によって掘り下げたが、擾乱層が続く。ただし、附属小学校教棟建



設時の余掘り埋め戻し埋土ではない。

以上の3トレンチの結果から、1トレンチで認められたII層が広がることも予測されたため、1-2トレンチ間の管路部分についても、立会調査を継続した。ところが、その間の南半はゴミ焼却穴の堆積が掘削深度60cmまで及び、北半でも2トレンチの擾乱層に共通した。II層とした層の広がりは、一部に限られるよう

である。なお、同様に2-3トレンチ間部分についても、擾乱層中で掘削が留まっていることを追認している。

3 調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。

(吉田)

99706 持田地区北側囲障改修工事に伴う調査

調査地点 松山市持田町1丁目5番22号
持田団地
調査面積 6.1m²
調査期間 1997年8月5日～6日
調査の種別 試掘調査
調査担当 吉田広・三吉秀充
依頼文書 平成9年8月1日付
教育学部事務長発事務連絡

なった。工事予定地は、持田団地の北東角に位置している。団地内周辺では既往の調査（調査番号：99309）を行ったのみで十分なデーターがそろっていないことに加えて、松山市埋蔵文化財センターが、1996年度に団地の東隣接地を調査し、中世の水田遺構を確認しており、工事予定地にも中世の水田遺構の存在が考えられ、事前に試掘調査を実施することとした。

2 調査の記録

調査は北側囲障に沿う形で、東西方向に3ヶ所のトレンチを設定し、東から順に1～3トレンチとした（図

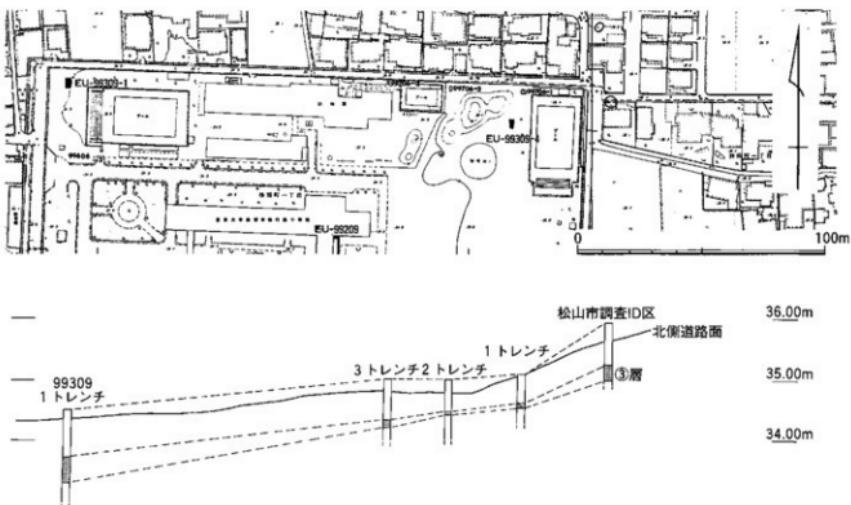
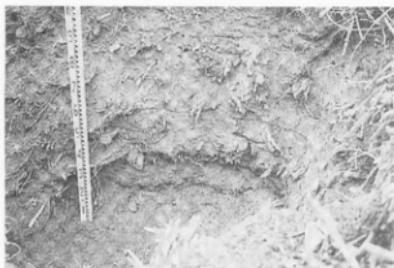


図13 99706調査地点位置図および持田団地北側土層断面図（縮尺1/2,000、1/80）

13)。以下、各トレーニングの層序の報告を行っていく。なお、堆積土は99309調査の層位と対応する。

(1) 1トレーニチ

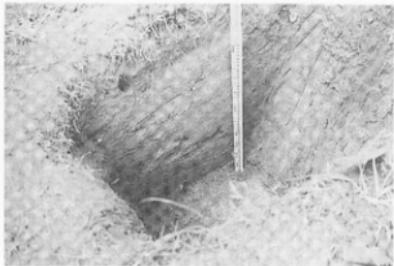
表土層及び暗オリーブ色土の②-3層を掘削し、現地表下50cmで黄褐色土の③-1層を確認した。③-1層は黄褐色の砂質土層で、ラミナ状に黄褐色の強い粘質土



① 1トレーニチ土層断面



② 2トレーニチ土層断面



③ 3トレーニチ土層断面

写真8 99706調査1～3トレーニチ土層断面

が混じっている。③-2層は暗灰黄色砂質土である。④層は灰黃褐色砂質土の砂礫層である(図14-①、写真8-①)。

(2) 2トレーニチ

表土層及び②-3層を掘削し、現地表下60cmで③-1層を確認した。以下、現地表下140cmまで掘削を進め③-2層、④層を確認した(図14-②、写真8-②)。

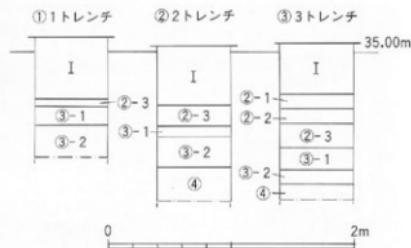
(3) 3トレーニチ

①層は瓦礫を含む表土層である。②-1層は暗灰黄色の砂層、②-2層はオリーブ褐色の砂層、②-3層は暗オリーブ色の砂質土層である。本トレーニチでは、現地表下90cmで③-1層を確認した(図14-③、写真8-③)。

3 調査のまとめ

今回の試掘調査地点からは、遺物の出土は認められなかったことから、各層の時期を窺うことはできないが、持田団地の北西角で実施した確認調査(調査番号:99309)や松山市埋蔵文化財センターが実施した隣接地での調査等を参考にすると、③層は中世の水田層の可能性が高い。

図13には、持田団地北側部分を東西方向に見た横断面を示した。現地表面と中世の水田層と考えられる③



I層：造成土。

②-1層：暗灰黄色土(2.5Y4/2)。やや粘性有り。砂礫の含有量少ない。

②-2層：オリーブ褐色土(2.5Y4/3)。やや砂礫(～5mm)を含む。

②-3層：暗オリーブ褐色土(5Y4/3)。②-1層に比べてやや砂礫多いが、粘性有。

③-1層：黄褐色砂質土(2.5Y5/4)。ラミナ状に黄褐色の色合いが強い部分有。粘質土もわずかにラミナ状にはいる。

③-2層：暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)。土質は③-1層に同じ。

④層：灰黃褐色砂礫質土(10YR4/2)。人頃の大礫石も含む。

図14 99706調査1～3トレーニチ土層柱状図(縮尺1/40)

層上面の高さを示したものである。現地表面が東から西にかけて標高が低くなるのに伴って水田面も同様に低くなっていくことが想定される。

以上のことから、工事予定地において現地表下から50cmを超える掘削を行うには、全面調査が必要となる。
(吉田)

99707 榛味団地（附農高）校舎新営に伴う試掘調査

調査地点 松山市榛味3丁目5番7号

榛味団地

調査面積 12.2m²

調査期間 1997年8月6日～7日

調査の種別 試掘調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成9年5月28日発

愛大農発 第344号

1 調査にいたる経緯

附属農業高等学校の校舎新営が計画され、本体部分に関しては、昨年度事前の遺跡確認のための試掘調査（調査番号：99603）が行われ、部分的な遺構の存在が予想され、全面調査が必要との判断を示した。今年度になって、詳細な計画建物の設計図が提示され、校舎新営に伴う管路の新設位置・深度が示された。しかし、本体部分から広範囲に派生する管路部分について、既往調査のデータのみでは、遺跡の存在・深度を推測できない状況にあった。したがって、新営校舎本体に付随する新設管路部分（計画管路⑥、⑨、⑩、⑪、⑫）における遺物包含層の有無の確認を目的とした調査を実施することとなった。

2 調査の記録

調査地点は、図1の通り8箇所である（図16）。

(1) 1トレンチ（図15-①）

現地表下約80cmまで掘り進めたが、表土層が続いており、遺構・遺物ともに出土しなかった。なお、現地表下約35cmには、コンクリート土間があらわれた。

(2) 2トレンチ（図15-②、写真9-①）

表土層であるI層が現地下約115cmまで続き、造成以前の近世～近代の水田層と考えられるII層の暗灰黄色シルトは5cmほどを残すのみ。現地下約120cmで遺物包含層であるIII層が現れる。この地点のIII層は、黒褐灰色粘質土で、粘性が高い。

(3) 3トレンチ（図15-③）

現地表下120cmまで掘削を行ったが、瓦礫を伴う表土層が続いており、遺構・遺物ともに出土しなかった。

(4) 4トレンチ（図15-④、写真9-②）

表土層であるI層を掘り進め、現地表下100cmでIV層を確認した。IV層は明黄褐色を呈し、ややきめの粗い、堅くしまりのある砂質土層である。

(5) 5トレンチ（図15-⑤、写真9-③）

トレンチ東側では、現地表下30cmでIV層を確認した。このトレンチのIV層は、明黄褐色砂質シルトで、やや粘性があり、しまりもある。また、黄褐色砂質シルト

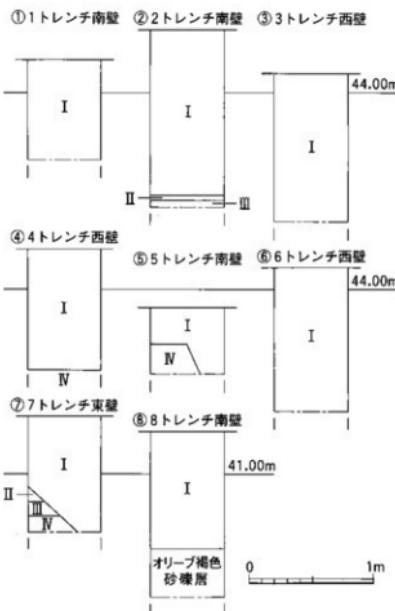


図15 99707調査1～8トレンチ土層柱状図（縮尺1/40）

を斑状に含む。一方、トレンチ西側では、既設管路が現地表下60cmに埋設されており、それ以上の掘削は行わなかった。

(6) 6 トレンチ (図15-⑥)

現地表下100cmまで掘削を行ったが、表土層が続いており、遺構・遺物とも出土しなかった。

(7) 7 トレンチ (図15-⑦、写真9-④)

現地表下100cmまで掘削を行った結果、トレンチの北

側では現地表下60cmでII層、70cmで遺物包含層であるIII層を確認したが、南側では100cmの深度まで擾乱が及ぶ。II層は灰黄色シルトで、小砂粒を多く含み、鉄やマンガンの沈着が観察できる。III層は、黒褐色粘質土で粘性が高く、暗灰色粘質土がまばらに混じる。

(8) 8 トレンチ (図15-⑧)

地表下100cm以下でオリーブ褐色砂礫層を確認した。この層は全体にしまりがなく、何らかの流路内堆積と

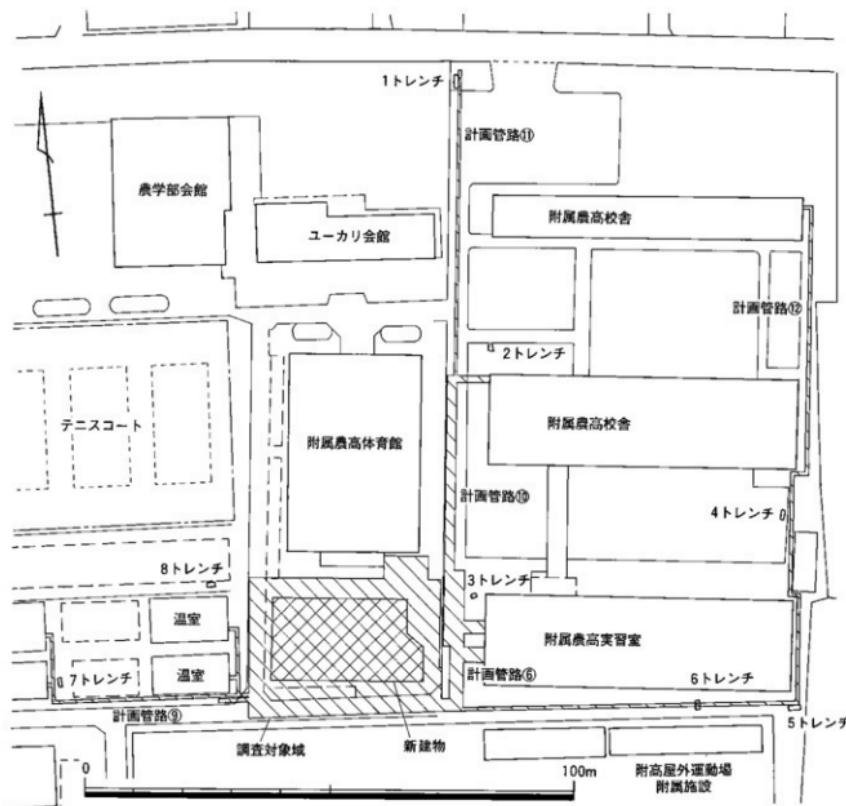


図16 99707調査1～8 トレンチ位置図 (縮尺1/1,000)

考えられる。本体部分の事前試掘調査で認められた水利灌溉関連構内の堆積（99603調査1・2トレンチ①層）に共通する堆積のようである。なお、この層は現地表下140cmまで掘削を行ったが、湧水が多いため、それ以上は掘削を断念した。

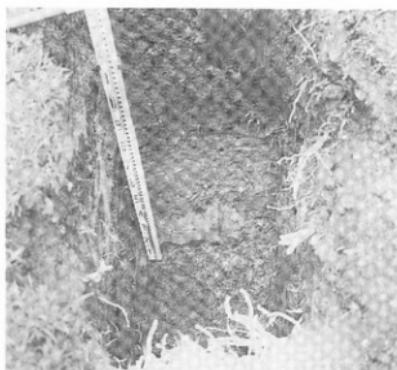
3 調査のまとめ

以上の試掘結果に基づいて、以下の判断を示した。計画管路⑩は、現地表より70cmの掘削深度が予定されているが、1・2トレンチの試掘結果から、その掘削

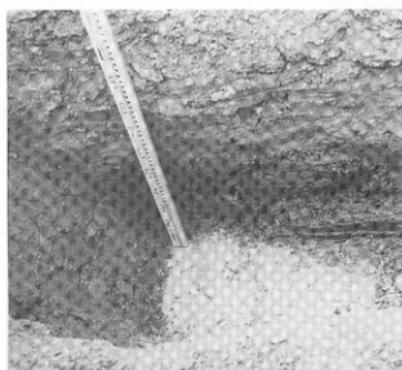
深度では遺跡に影響はないものと考えられる。

計画管路⑩は、現地表より103cmの掘削深度が予定されているが、2トレンチの試掘結果並びに、埋設道路部分がかつて土盛り工事を行っており、北半については、上の掘削深度では遺跡に影響はないものと判断できる。南半（計画建物東側部分）については、深度的には包含層に一部あたる可能性があるものの、道路擁壁の基礎工事に際して攪乱の及んでいる可能性が高い。

計画管路⑥については、3トレンチで良好な試掘結



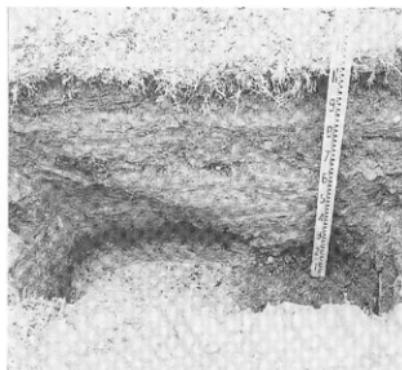
① 2トレンチ土層断面（北から）



② 4トレンチ土層断面（東から）



③ 5トレンチ土層断面（北から）



④ 7トレンチ土層断面（西から）

写真9 99707調査2・4・5・7トレンチ土層断面

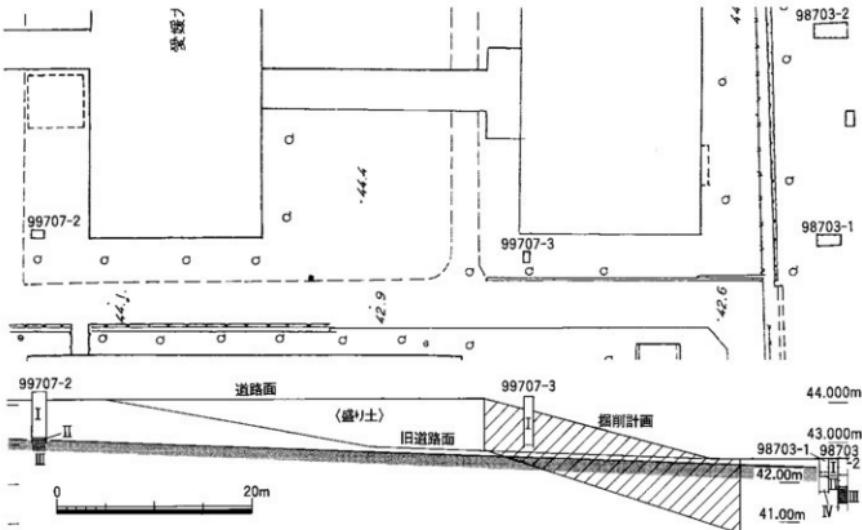


図17 計画管路⑩部分土層推定断面図（縮尺1/500、1/125）

果が得られなかったため、やや離れるが、2トレンチと附属農校グラウンドの試掘結果(98703調査1、2トレンチ)により、想定される遺跡包含層の上面レベルと計画管路の掘削深度を図17の通り比較してみた。結果、掘削計画域のほぼ全域にわたって遺物包含層にまで掘削が及ぶものと判断された。

計画管路⑩に関しては、掘削深度が現地表から50cmが予定されているが、そのうち樽味団地東端の南北管路部分については、既設建物建築時の余掘り内に埋設されることが確認され、一部余掘り内に含まれない校舎間の部分に、4トレンチを設定した。その結果、遺物包含層は確認できなかったものの、現地表から100cmの深さまで擾乱の及んでいることが確認され、既設建物の余掘りと余掘りの間の、狭い範囲においては、計画管路部分においても同様の深度まで擾乱が及ぶものと類推される。

一方、計画管路⑩の校舎南を東西に走る部分については、5トレンチ東側で未擾乱のIV層を現地表下30cm

で確認したが、西半では計画深度50cmまで擾乱が及ぶ。6トレンチでも、現地表100cmまで擾乱が及んでおり、この計画範囲全域について、既設建物の余掘りかグラウンド法面の裏込めにあたるものと判断できる。

計画管路⑩については、8トレンチでは明確な遺物包含層を確認できなかったが、7トレンチにおいて現地表下70cmで遺物包含層を確認した。掘削深度が87cmに設定されており、遺物包含層に影響があるものと判断される。

以上の判断により、協議の結果、計画管路⑩の北半、⑪、⑫に関しては遺跡に影響のないものとして、全面調査の対象から外すこととし、計画管路⑩についても、当初の埋設深度の87cmを65cmに計画変更することで、全面調査の対象から除外することとした。ただし、計画管路⑩については、全面調査の対象に含み込むこととした。なお、計画管路⑩の南半については、全面調査の対象からは外すが、隣接する⑩の状況に応じて、柔軟に対応することとした。

(吉田)

99708 榎味団地排水工事に伴う調査

調査地点 松山市榎味3丁目5番7号

榎味団地

調査面積 2.4m²

調査期間 1997年8月7日

調査の種別 立会調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成9年6月27日発

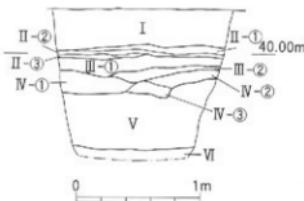
愛大農業 第396号

1 調査にいたる経緯

榎味団地拓翠寮の排水工事に伴って掘削の必要が生じた。拓翠寮では、既往の調査(99207)で遺物包含層を確認していることから、遺構が存在することが考えられ、立会調査を実施することとした。

2 調査の記録

調査地点は、拓翠寮敷地南東の隅部である(図18)。表土層であるI層および造成以前の近世～近代の水田層と考えられるII層を掘削し、現地表下40cmで遺物包含層と考えられるIII層を検出した。III層は暗褐色シルト質土で、農学部構内に見られた遺物包含層であるIII層に比べてやや薄い色を呈する。III-①層には鉄分・マンガンの沈着が認められる。III-②層はやや粘性が弱い。遺物の出土はなかった。IV層は黄褐色からオリーブ褐色の砂質土あるいは砂礫質土である。V層はにぶ



I層：表土。

II-①層：暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)。鉄分・マンガンが点的に沈着。やや粘性があり、しまりあり。

II-②層：暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)。鉄分・マンガンが点的に沈着。やや粘性があり、しさりあり。

II-③層：暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)。鉄分・マンガンが点的に沈着。やや粘性があり、しまりあり。

III-①層：暗褐色シルト質土(7.5YR3/3)。鉄分・マンガンの沈着有。機質・IV層小ブロックを点在し、粘性強い。

III-②層：暗褐色シルト質土(7.5YR3/4)。III-①層に比べ、IV層小ブロック多く、粘性やや低い。

IV-①層：黄褐色砂質土(2.5Y5/6)。1mm前後の砂粒かなり含む。

IV-②層：オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/6)。粘性あり、シルト質に近い。

IV-③層：黄褐色砂礫質土(2.5Y5/6)。IV-①層に2～3cmの大の小礫を混じる。

V層：にぶい黄褐色砂礫。～10cm大までの砂礫を混在する。

VI層：褐色砂(10YR4/4)。～1mmまでの砂粒からなる流路内堆積。

図19 99708調査区西壁土層断面図(縮尺1/40)

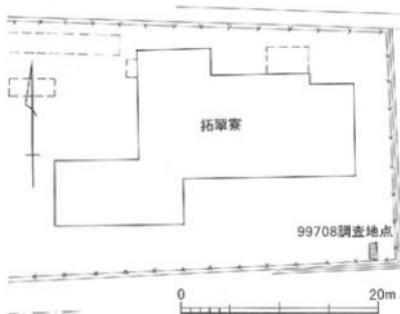


図18 99708調査地点位置図(縮尺1/500)



写真10 99708調査地点土層断面(西壁)

い黄褐色砂疊層で、10cm大の砾も含む。VI層は砂粒1mmまでの褐色砂層である。なお、IV-V層の間に一部有機質土が薄く認められた（図19、写真10）。

99709 工学部校舎新営電気設備工事（その2）に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番

城北団地

調査面積 12.2m²

調査期間 1997年8月18日～21日、9月18日

調査の種別 立会調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

調査補助 橋本麻紀

依頼文書 平成9年8月14日

愛大工発 第410号

3 調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。（吉田）

(4) 4トレンチ（図21・24-②、写真11-②）

瓦礫を伴うI層除去後、現地表下130cmでIII層を検出し、以下人力で掘り進めた。III層は暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の小指大のブロックと炭化物を少量含む。薄いIII層を掘り下げ、IV層上面で遺構を検出した。その遺構埋土は、暗褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の不定形ブロックがIII層よりも多く、しまりがある。堅穴式住居跡のコーナー部分にあたると考えられ、SC-1とした。

1 調査にいたる経緯

工学部校舎の新営に伴って、道路の改修が行われ、歩道部分に夜間照明灯が新設されることになった。その電灯基礎は地表下125cmに及ぶ計画であり、既往の調査から遺跡包含層に達することが予想された。しかし、既設建物の余掘り等で既に遺跡が削られていることも予測され、むしろ遺跡存在の可能性は低いものとの見通しにより、立会形式で調査を進めることとした。

2 調査の記録

調査地点は、図20～23に示すとおり、8ヶ所に及ぶ。

(1) 1トレンチ（図21）

現地表下130cmまで掘り進めたが瓦礫を伴うI層が続いている。遺構・遺物とともに認められなかった。

(2) 2トレンチ（図21）

現地表下130cmまで掘り進めたが、I層が続き、遺構・遺物とともに出土しなかった。

(3) 3トレンチ（図20・24-①、写真11-①）

トレンチ北側部分にて、現地表下110cmまで掘り進めたところで、遺物包含層であるIII層を検出した。そのためIII層以下は人力で掘り進めた。調査範囲が狭いこともあり遺構の掘り方は認められなかったが、III層は暗褐色砂質シルトで、にぶい黄橙色の不定形ブロックや白色の砂粒を多く含み、粘性を帯びる。炭化物も少量含む。堅穴式住居等の壙土に相当する可能性も考えられる。III層の下はIV層である明黄褐色砂質土。



図20 99709調査3・9・10トレンチ位置図および9トレンチ土層柱状図（縮尺1/500、1/40）

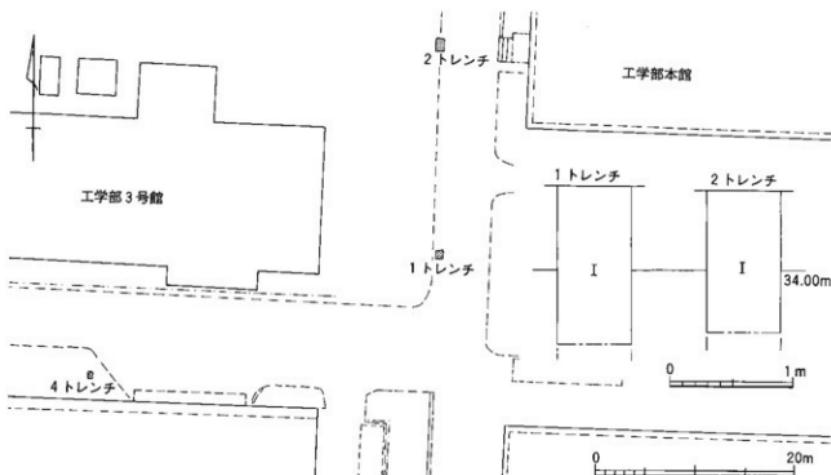


図21 99709調査1・2・4トレンチ位置図および1・2トレンチ土層柱状図（縮尺1/500、1/40）

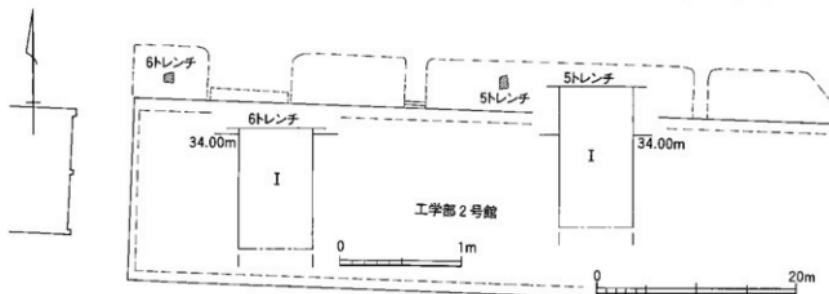


図22 99709調査5・6トレンチ位置図および土層柱状図（縮尺1/500、1/40）

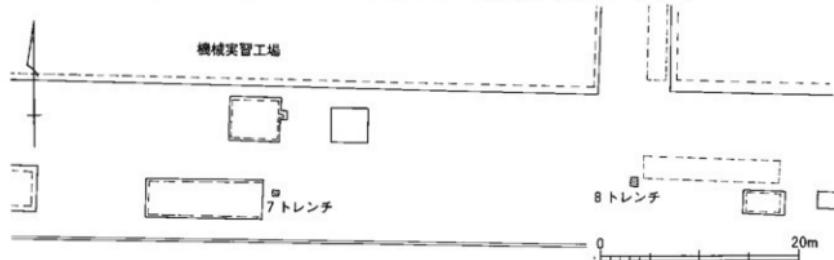


図23 99709調査7・8トレンチ位置図（縮尺1/500）

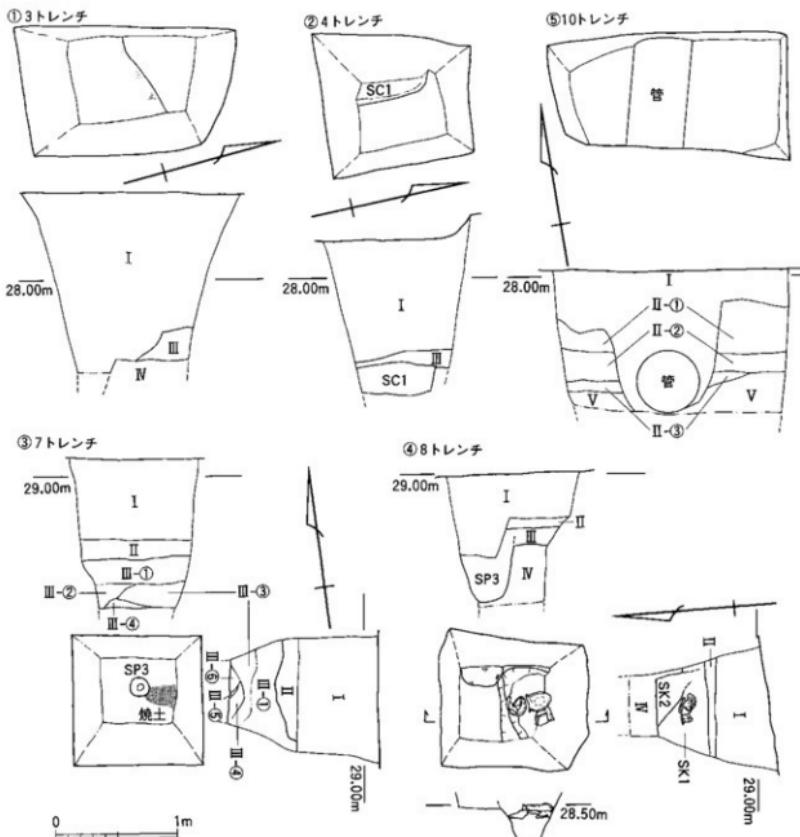


図24 99709調査3・4・7・8・10トレンチ平面図および土層断面図（縮尺1/40）

(5) 5トレンチ (図22)

現地表下130cmまで掘り進めたが、表土層であるI層が続いており、遺構・遺物ともに出土しなかった。

(6) 6トレンチ (図22)

現地表下130cmまで掘り進めたが、表土層であるI層が続いており、遺構・遺物ともに出土しなかった。

(7) 7トレンチ (図23・24-③・25、写真12-①・②)

現地表下70cmまでは搅乱が及ぶ。以下では、まずオリーブ褐色土のII層を検出した。ただし、II層は南壁

際では認められず、南壁ではI層直下がIII層となる。III層は60cm程の厚さで堆積するが、細分が可能である。狭いトレンチで、確定は難しいが、2棟の竪穴式住居跡が重複しているようである。まず、上層のSC-1は、標高28.15mあたりで床面を形成する。まず埋土であるIII-①層は暗褐色砂質土で、炭化物を少量含み、粘性がややある。また、床面造成土と見られるIII-②層は、にぶい黄褐色砂質土で、暗褐色砂質土に地山のIV層の塊を混在させたしまりのある土層である。なお、IV層



① 3 トレンチ土層断面 (南東から)



② 4 トレンチ土層断面 (北東から)

写真11 99709調査3・4 トレンチ土層断面

上面で検出したSP-3は、後記するカマドの堆積を切っており、このSC-1に伴うものと考えられる。

SC-1の下層、標高27.90mあたりを床面とするのがSC-2である。このSC-2埋土であるIII-③層は暗褐色砂質土で、SC-1埋土に比べて炭化物が若干多く、しまりがある。この埋土の下にIII-④～⑥層がある。III-④層は、暗褐色砂質土ながら、上層埋土に比べて、炭化物の混在が多く、しかも大きい。また焼土の小塊も混じえる。カマド使用に伴う堆積と見られる。III-⑤層は褐色砂質土で、焼土層。カマドの被熱部分であろう。III-⑥層は暗褐色砂質土で、IV層ブロックを混じえ、しまりは強い。カマドの基台部と見られる、これらカマド関係の堆積は、狭いトレンチの中ではあるが、やや北東に偏するようである。

西側に近接する文京遺跡5次調査(調査番号:98401)では、古墳時代後期(7世紀初頭)の掘立柱建物跡1棟を検出している。今回の調査で出土した遺物はいずれも細片で図化できるものはないが、須恵器片が出ており、やはり今回の竪穴式住居跡2棟も、古墳時代後期の遺構の広がりと推定される。また同時に弥生土器の細片も多く出土しており、弥生時代においても、周辺に何らかの遺構の広がりが予想される。

(B) 8 トレンチ (図23・24-④、写真12-③・④)

表土から60cmまで掘削したところで、III層である遺物包含層を検出したため、以下人力で掘り進めた。III層と遺構の埋土との区別が困難を極め、IV層上面でようやくSK-1を検出した。発掘面積が狭く、遺構の全貌を窺うことはできないが、SK-1は幅40～50cm程度の

細長い土壙の一部と考えられる。SK-1の埋土からは弥生時代終末の土器4点が折り重なった状況で出土しており、一括性が高い。埋土は、暗褐色砂質シルト中に明黄褐色砂質土の小指先大のブロックを少量含み、しまりがかなりある。

SK-2は南壁のみで検出した。SK-1の埋土に比べ、明褐色砂質土の不定形ブロックが多く混じりしまる。土器片を含んでいない。SK-1の一部とも考えられるが詳細は不明である。

SP-3は、IV層を重機で再度掘削中に調査区東壁で確認した。IV層の上面を精査した際には遺構の存在を確認できなかったことから、調査区東壁に接して掘り込まれる柱穴と考えられる。SK-1との関係は不明。

出土遺物の遺構との対応は、確実にSK-1に伴うのは図25-1～3・5・6・8・9であるが、4・7もIII層出土で取り上げており、共伴の可能性がある。

1～3は斐形土器。1は尖底で頸の縮まりがやや弱く、外反気味に開く短い口縁部をもつ。内外面のハケメをよく残す。底部外面下半は、火熱を強く受けて赤変し、表面が剥落する。2は1に比べてやや球形制。同じく内外ともハケメをよく残す。底はわずかに凸状を呈するものと思われる。胴下半は、煤が付着するものの、1のような赤変は、底部先端付近に限られる。3はさらに底が明瞭なもの。外面は叩きの後、縦方向のハケメ調整。内面はケズリの後、ハケメ調整。4は壺形土器の上胴部。頸部には突帯を貼り付け、ハケメ原体による刻目を施す。外面には粗いミガキ、内面にはハケメ調整が施される。5は鉢形土器。深みのある

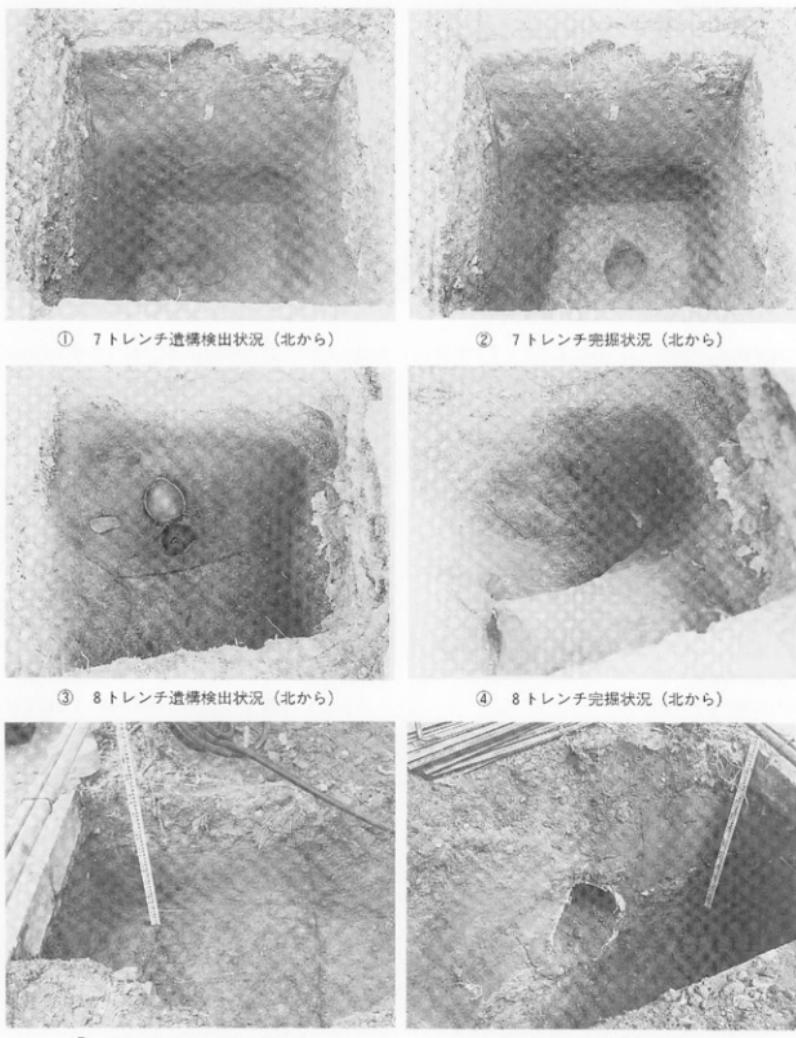


写真12 99709調査7～10トレンチ土層断面

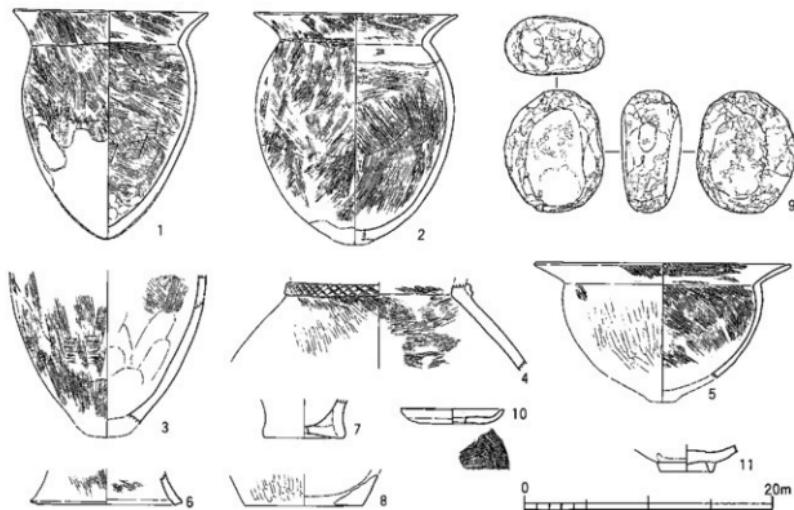


図25 99709調査出土遺物実測図（縮尺1/4）

体部に、長めに伸びる口縁部をもつ。内面はハケメを残すが、外面は粗いミガキ。6は脚部。あるいは壺形土器の口縁の可能性もある。7は壺形、8は壺形土器の底部。9は叩石。側面に握部と思われる面がある。なお表裏の面は、台石としても使用している。石材は花崗岩。10は中世土師器小皿、口径8.4cm、器高1.2cm。底部は回転糸引の後、板目圧痕。

これら出土遺物は10を除いて、ほぼ弥生時代終末にまとまっており、土壤あるいは住居跡出土一括資料として評価できる可能性がある。

(9) 9 レンチ (図20・25、写真12-⑤)

瓦礫を伴ったⅠ層除去後、表土から約40cmの深さでⅡ層の上面を検出した。Ⅱ層以下は慎重に掘削を行い、深度80cmでⅢ層の上面を検出した。本レンチは周辺の調査（調査番号：98602・99506等）から文京遺跡の中でも重要な遺構の存在が予想されたため、Ⅲ層上面検出時点で掘削を中止した。

また、レンチの東側ではⅡ層の落ちこみを確認した。現地表下80cmで掘削を中止したため、詳細については不明であるが、流路等の存在も想定される。

(10) 10 レンチ (図20・24-⑤、写真12-⑥)

現地表下130cmまで掘削を行った。レンチ中央部は管路埋設に伴う擾乱によって擾乱を受けているが、擾乱を挟んで東側と西側は旧層序を保っていた。

I層の下には、II層が続く。II層は2層に細分ができる。II-①層はオリーブ褐色砂質土で、粘性もあり炭化物・遺物の細片を含む。II-②層は、①層に比べて砂質が強く、鉄分やマンガンの沈着によってやや明るいオリーブ褐色砂質土である。この下には、明褐色砂礫層が認められる。1cmを越える砂礫はほとんど混じらず、2~3mm大の砂粒からなる。しまりは弱い。近世の陶磁器（図25-11）を含んでおり、II-③層とした。文京遺跡15次調査5レンチで検出した自然流路（SR-2・3・6）と一緒にものかもしれない。この砂礫層の下にV層である灰黄褐色砂礫層が続く。10cmまでの砂礫を含み、鉄やマンガンの沈着による黒褐色や暗褐色の変色部分が認められる。

3 調査後の対応

9レンチを除いては、以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。9レンチについては先記したように、大型掘立柱建物群など、文京遺跡中枢域に近接するた

め、現場では遺物包含であるIII層の検出面で掘削を留めた。その上で、これ以上の掘削を回避するよう、基

礎設置工法の変更等を協議した。

(吉田・三吉)

99710 北吉井宿舎屋外配水管改修に伴う調査

調査地点 松山市桑原2丁目9番8号

北吉井団地

調査面積 100.4m²

調査期間 1997年10月8日～10月31日

11月6・12・13・18日

12月1日

調査の種別 全面調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成9年9月1日発

愛大施発 第1号

1 調査にいたる経緯

平成8年度に公共下水道管が北吉井団地地域に新規敷設され、団地内の下水道管を接続するための排水管改修工事を行うこととなった。北吉井団地内は、既存の調査（調査番号：99401-99508）で明らかのように、古墳時代を中心とする遺跡が存在することから、事前に調査を実施することとした。

まず、調査にあたっては、調査室・施設部・施工業者・管財係・棟代表で協議を行い、団地内の日常生活にできる限り支障をきたさないよう配慮した。その結果、全面調査とは言え、1号棟以南（2号棟南管路部分・主管南部分・2号棟北管路部分）と1号棟以北（1号棟南管路部分・主管北部分・1号棟北管路部分）の2段階に分けて調査を行うこととなった。

管路埋設に伴う掘削幅は50cmであったが、作業範囲などを考慮した上で、既存の建物の余掘り等により遺跡が破壊されていると思われる部分を除いて、幅75cmの発掘区を設定した。

2 調査の概要

北吉井団地全域においては、基本層序は樟味団地と共にし、表土層であるI層の下に、近世～近・現代の水田層である暗灰黄色～オリーブ褐色シルトのII層がある。本来なら下層に遺物包含層である暗褐色シルト質土のIII層が存在するが、調査区一帯では耕作土であるII層によって削平されてしまっている。したがって、

今回の調査域においては、II層直下の地山面において遺構の残存を確認したことになる。地山は調査区南部では褐色～にぶい褐色シルトのIV-a層として現れ、その下に黄褐色シルトのIV-b層が続く。ただし、調査域の北部では、直接黄褐色シルトが地山面となる。集水枠部分の深掘時の所見によれば（図26）、下層には砂疊混明黄褐色シルトのIV-c層、にぶい黄橙色シルトのIV-d層とシルト層が続く。IV層全体の厚さは、1号棟南北隅付近（図27-地点B）で約50cm、2号棟北西隅付近（図27-地点A）で約75cmと、南側に厚くなる。この下にオリーブ灰色粘土のV層となり、地点Bでは30cmの厚さで、2～3mm大の砂粒からなる灰色砂のVI層に変わる。地点Aでは掘削深度の都合上、V層の掘削は20cmに留まっている。なお、IV～V層間に部分的に粘性の高い黒褐色シルト質土が介在し、ある時期土壤化していた可能性がある。

調査区は管路に従っており、その管路の枝毎に記述を進めていく（図27）。

① 2号棟南管路部分

当初、2号棟建物際は、建築時の余掘り内と推測して調査対象地域から外していたが、並行して行った管路本体部分の掘削範囲でも搅乱は及んでいないことが確認され、施工業者と協議の上、計画管路部分すべてについても、調査を実施することにした。

この地点では、アスファルト舗装面からおよそ45cm

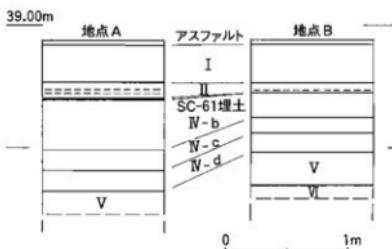


図26 99710調査地点A・B土柱状図（縮尺1/40）

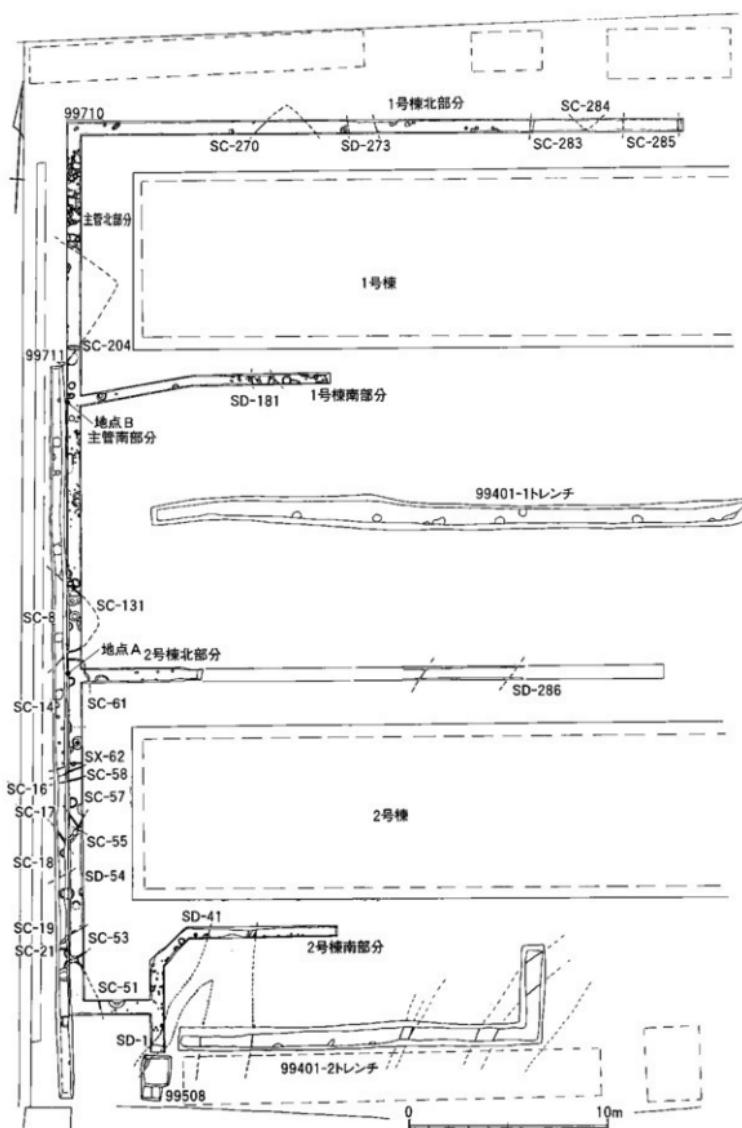


図27 99710・99711・99508調査区遺構配置図（縮尺1/250）

ほどの深さで遺構を検出した。この地点で検出された遺構の大半は、杭跡と思われる径10cm前後の小柱穴であり、それに若干の柱穴が伴う。他に目立った遺構として、2ヶ所で溝を確認した。まず校舎の最南端部分で北東—南西方向の深さ35cm以上のSD-1を確認した。埋土は黒褐色シルト質土で、地山IV層の小塊を含み、一部がラミナ状の堆積をなす。後に集水井設置に伴う立会調査で、その延長部分が確認でき、深さが95cmにも及ぶことが判明した。また、2号棟壁際のやや西よりの地点で、幅約2m、深さ80cmのSD-41を検出した(写真13-①)。上層はシルト質の土がブロック状に堆積して少し遺物を含むのに対し、下層は砂質が強く、明らかに水流の痕跡が認められる。遺物の包含も多い。時期は6世紀後半。このSD-41は位置関係等から、99401のSD-21にあたるものである。また、SD-1もこのSD-41の分流と考えられるようである。

(2)主管路南(2号棟西)部分

今回の調査域の中で、もっとも遺構が集中する部分である。とりわけ、2号棟西側は住居跡等が累重する。アスファルト舗装面から約45cmの深さで遺構を検出した。

主管南端では、SC-51を検出した。主軸を北北西—南南東にふる方形の竪穴式住居跡と思われる(写真13-②)。その北にSK-52、SC-53が連なる。SK-52は小型の土壌で、SC-51にその南端を辛うじて切られる。SC-53は、SK-52を切るが、北をSD-54に切られて、1m程の範囲が残るのみ。SC-51に主軸を平行させる方形竪穴式住居跡らしい。SD-54は幅5m・深さ50cmに及ぶ落ち込みで、一応、溝と考えた。しかし、底面で柱穴が検出されたり、埋土が上下に分層可能であったりして、あるいは住居・溝等の重複の可能性もある(写真13-③)。この北側には、SD-54に切られた住居跡の重複がある。南から、SC-55はSD-54に切られ、SC-57はSC-55に切られ、SC-58がSC-57に切られる。いずれも方形の竪穴式住居跡の一辺と推定される。なお時期に関しては、SC-57床面及びSC-57埋土を再掘削したSP-56の埋土中から6世紀後半代の須恵器が出土しており(写真13-④)、時期の一点をそこに求めることができる。

さらに北には、SC-58との間にわずかに地表面を挟んで、SX-62・SC-61がある。当初1棟の住居跡を想定していたが、南側1m強の範囲で床面のレベルが異なり、別の遺構が存在するものと判断した。ただし、SX

-62とSC-61の切り合い関係は不明。SX-62についても検出幅が1m強と狭く、住居跡であるかどうかは保留せざるを得ない(写真14-①)。

(3)主管路中央(駐車場西)部分

SC-61の北にやはりわずかの地表面を挟んでSC-131がある。北西—南東に主軸を振る竪穴式住居跡で、隅丸方形となるものと思われる(写真14-②)。規模は不明。このSC-131よりも北側は、遺構が疊らになり、柱穴・小柱穴を数基確認するのみである。

(4)号棟北管路部分

当初調査域を設定していた主管から東へ6mほどの範囲においては、柱穴1基と小柱穴5基を検出したのみである(写真13-⑤)。

それ以東は、供用中の管路があつて調査域には含み込んでいなかつたが、調査域の最東の所見から、遺構の残存が十分窺われていた。ちょうどガス管改修工事に伴う立会調査(調査番号:99711)の際に、配水管敷設業者から管路敷設に伴う掘削によって遺跡が発見されたとの通報を受けて、調査を行った。およそ遺構の上面5~10cmほどを削ってはいたが、既に敷設深度まで掘削が達し、埋設管も準備されており、調査は検出できた遺構の記録のみに留めた。

遺構は、主管から約20m東の地点で検出した。幅約4.5mの落ち込みで溝状を呈するものと推測される。SD-286としたが、若干南西—北東にふるらしく、遺物も比較的多い。2号棟南で検出したSD-41に続くものと推測する。

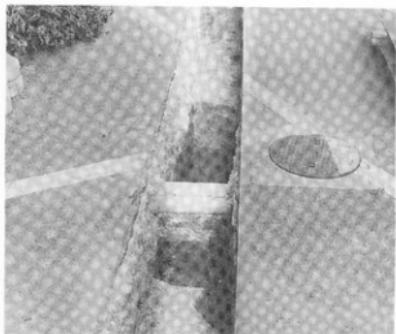
(5)号棟南管路部分

この地点も本来の計画では、建物際は調査対象から外していたが、2号棟同様にやはり遺構の残存が確認され急遽調査対象とした。

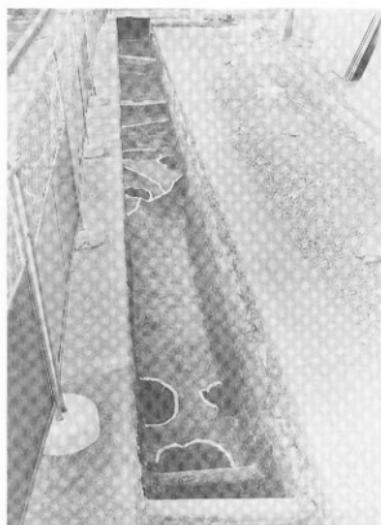
現在のアスファルト面に傾斜があるものの、II層直下のほぼ水平な面(西端で深さ40cm・東端で深さ55cm)で遺構を検出した。主管南部分の周辺と同様に、西半は遺構が特に疊らである。東半も大きな遺構ではなく、柱穴・小柱穴がほとんどである。唯一幅1m程の落ち込みが認められ、SD-181とした。ただし、これも深さ10cm程度で、2号棟の南北で検出した溝(SD-1・41・286)に直接は連らないと考えられる。

(6)主管路北(1号棟西)部分

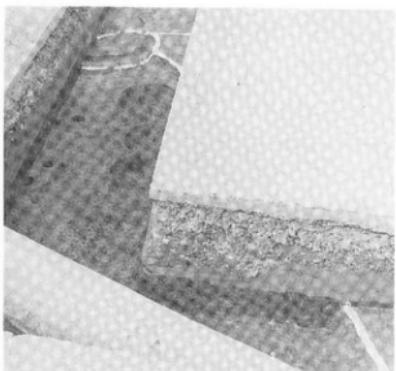
アスファルト面から45cmほどの深さで遺構を検出した。南半分は、一辺4mを超える方形の竪穴式住居跡SC-204。北半は柱穴が密集する。あるいは、住居跡の



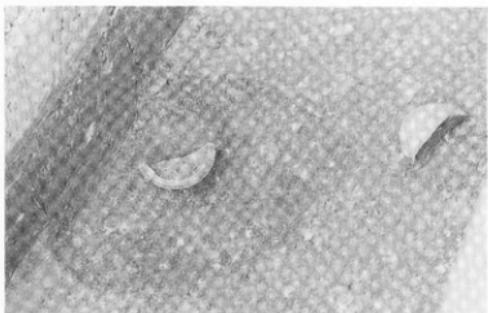
① SD-41 (西から)



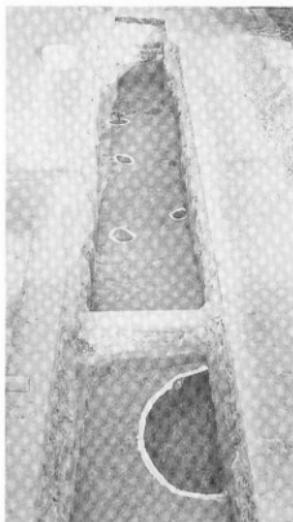
③ SD-54周辺 (南から)



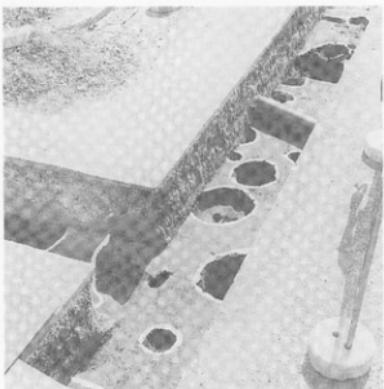
② SC-51 (南東から)



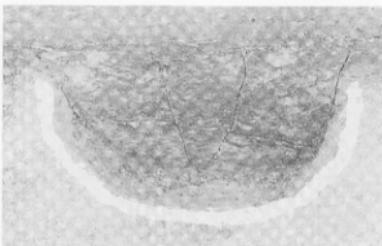
④ SP-56遺物出土状況 (南東から)



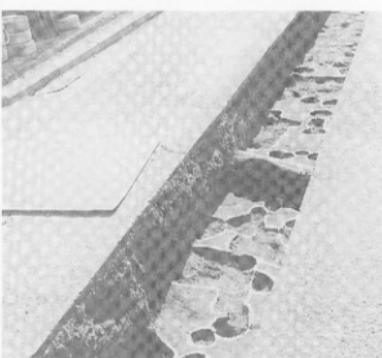
⑤ 2号棟北側調査区 (西から)



① SC-61 (北西から)



③ SC-54内SP-1 土層断面（東から）



④ 1号棟西側調査区（北から）



② SC-131検出状況（南から）



⑤ 1号棟南側調査区（99711調査分、南から）

床面が削平されているのかもしれない（写真14-④）。

(7) 1号棟北管路部分

やはりII層直下で遺構は検出されるが、西端ではアスファルト舗装面から50cm、東端では30cmの深さと、旧地形がかなり東に高かったことが窺い知れる。西よりは遺構がきわめて疎らであり、柱穴が数基あるのみである。この部分のやや西よりに、不規則な凹凸が見られ、その範囲の西側が直線的に画されるらしいことから、方形の堅穴式住居跡のほとんどが削平されてしまった痕跡と判断して、SC-270とした。規模などは不明。このSC-270の東に、幅1m・深さ約50cmの溝状の落ち込みSD-273がある。埋土は1枚で、均質な黒褐色シルト質土。粘性が高く、しまりが弱い。遺物もほとんど含まず、水流の痕跡も認められないことから、2号棟南北の溝（SD-1・41・286）とも、1号棟南の溝（SD-181）とも異なる。このSD-273の西側3mほどは柱穴が数基あるのみだが、それ以東の東西7.5mの範囲は、堅穴式住居跡が累重する。平面で識別できなかったが、土層の観察では異なる3基の堅穴式住居跡（SC-283・284・285）の存在を確認した。あるいはこれ以上の重なりがあるのかもしれない。

3 調査のまとめ

前回の調査（調査番号：99401）で検出された遺構は溝と柱穴にとどまっていたが、今回の調査では、限られた範囲ながら、12棟以上の堅穴式住居跡を確認できた。住居跡の出土遺物は少ないが、溝ないし自然流路

と大きな時期差はなく、いずれも6世紀後半のものと推定される。前回の調査とも同様である。ただし、一部7世紀以降に下る遺物もあり、遺跡の存続期間・遺構の詳しい帰属時期に関しては、今後とも検討を要することを付け加えておきたい。

しかし、前回の調査とも併せて、およそ北吉井団地における遺跡の様相がかなり明確になってきたことは評価できる。すなわち、団地内の北西側を中心に居住域が広がり、その南東を溝あるいは自然流路が画するという集落構成が類推できるようになったのである。

4 調査後の対応と問題点

調査終了後、以後の慎重工事を依頼して、調査を終えた。その後、施工業者から、調査対象外での掘削に伴って遺跡が発見されたとの連絡を受けての調査や、ガス管改修工事に伴う調査に際しての追加調査を行つており、その成果については先に述べたとおりである。

また、今回の調査については、調査計画段階での情報量の不足から、調査を進める段階で大幅に計画を変更せざるを得なかつた。今回は、管路埋設工事中もガス管改修工事に伴う立会調査（調査番号：99711）によって、現場に引き続いて常駐していたことと、施工業者の理解によって不測の事態に速やかに対応できたにすぎない。今後、調査範囲の指定に対して、確実なデータに基づいてなされなければならないことを明記しておく。

（吉田）

99711 北吉井宿舎屋外ガス管改修に伴う調査

調査地点 松山市桑原2丁目9番8号

北吉井団地

調査面積 32m²

調査期間 1997年11月12～14・18日

調査の種別 立会調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成9年11月13日発

愛大施第 第2号

1 調査にいたる経緯

北吉井団地内において、排水管改修工事に伴う発掘調査（調査番号：99710）が行われた際、既存のガス管

が露出し、ガス漏れが検知された。調査中は、当座の応急処置によって露出部分における管の腐朽箇所の交換のみを行つたが、その後の調査で、既存の埋設ガス管の早急なる交換が業者から促された。

これを受けて、ガス管改修が急遽計画され、新たなガス管を隣接地に埋設することとなった。既往の調査から、当然その埋設位置には遺跡が広がり、本格的な調査が必要とされるところである。しかし、ガス漏れの修繕という緊急性と、調査・工事中の安全性の確保といった観点から、調査室・施設部・施工業者で協議の上、また松山市教育委員会からの指導も仰ぎながら、今回に限り緊急避難的に立会調査形式で調査にあたる

こととした。

新設のガス管は、南北管を先の99710調査で排水南北管路南部分・中央部分の西に隣接平行させて埋設し、この主管からそれぞれの棟の南壁際に沿って建物内への引き込み管が設置されることとなった。枝管については、配水管より更に建物際に埋設されるため、余掘り内に当然はいるものとして、発掘調査域からは外して、主管理設部分における立会調査を実施した。

2 調査の記録

工事の関係で北側から調査を進めたので、その順に記述していく(図27)。なお、調査が急を要した立会調査形式であったことと、先の調査の基準点設置箇所に今回の調査区が設定されたことによって、正確な遺構の対応を期し難いことを述べておかなくてはならない。

まず、北側の駐車場西側部分では、先の調査同様やはり柱穴・小柱穴が数基検出されたにとどまる。その南に竪穴式住居跡SC-8が検出され、99710調査のSC-131にある。その南には、99710調査のSX-62・SC-61に対応する遺構が検出できるものと予想していたが、北側では残存状況が不良で、竪穴住居跡の掘方は検出できなかつた。ただし、柱穴などの集中及び南側で掘方のラインを確認できたことから、99710調査のSX-62・SC-61の広がりをSC-14としてほぼ把握することができた。同様に、99710調査SC-58・56にそれぞれ対

応して、SC-16・17を検出した。ただし、この南の99710調査SC-55については、今回の調査で対応する遺構の落ち込みを確認できなかつた。99710調査のSD-54についても、明らかに連続する遺構としては把握しきらず、該当する可能性のあるものとして、SC-19を識別した。その北には別単位のSC-18を認めており、あるいは99710調査でSD-54として溝状遺構とした認識自体を再考すべきなのかもしれない。99710調査SC-53についても、SC-21が該当しそうだが、対応関係が判然としない。99710調査SC-51にいたっては、該当する遺構自体の存在が見あたらない。柱穴などは集中することから、上面を削っている可能性がある。

3 調査後の対応

調査終了後、速やかにガス管改修工事に移行し、慎重工事を依頼した。

その後、枝管部分の掘削が行われたが、2号棟南側では、壁際に最大限寄せてガス管の埋設が行われたため、建築時の余掘り内に管路は収まった。しかし、1号棟南側の枝管埋設では、一部遺跡残存部分を破壊してしまったことが判明した(写真14-⑤)。現状の建物壁から55cmしか余掘り幅がなかったのである。2号棟についてもほぼ同様の余掘幅と推定できよう。

先の調査の問題点で指摘したように、調査区設定に当たって、既応工事に関する正確なデータ提示こそが、前提であることを特に付記しておく。(吉田)

99712 農学部附属農業高等学校校舎新営に伴う調査 (樽味遺跡4次調査)

調査地点 松山市樽味3丁目5番7号

樽味団地

調査面積 1,168m²

調査期間 1997年11月25日～1998年2月4日

調査の種別 全面調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成9年5月28日

愛大農発 第715号

1 調査にいたる経緯

農学部附属農業高等学校校舎新営が計画され、埋蔵文化財調査室では、これに対応して、事前試掘調査を

本体部分(調査番号:99603)、計画管路部分(調査番号:99707)の2度実施した。その結果、本体部分と一部の管路について、事前全面調査を実施することとした。

2 調査の概要(図28、写真15)

重機によって表土掘削を行うと、調査区西半は表土直下で、地山層IV層が現れた。これに対して東半は、土師器小片を含んでしまるのある暗褐色シルト質土が広く堆積していた。包含層であるIII層の再堆積層と判断して、これをIII'層として掘り下げを行った。

III'層の西端では、直下でIV層となるが、東ではその

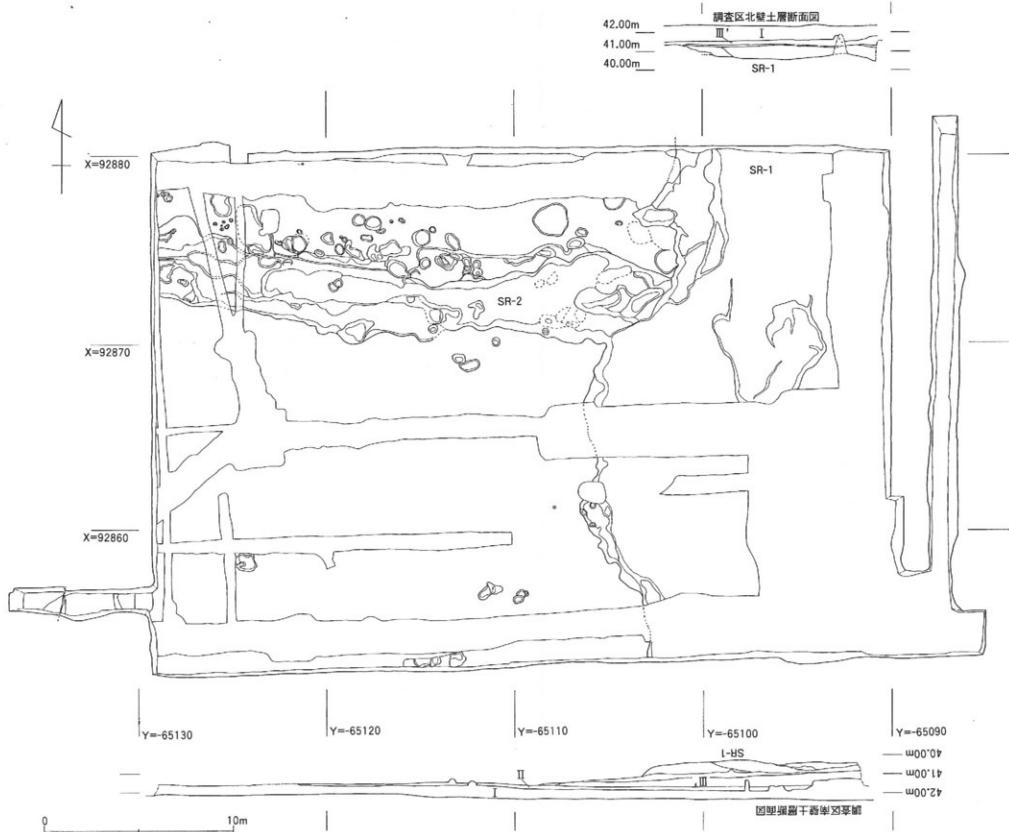
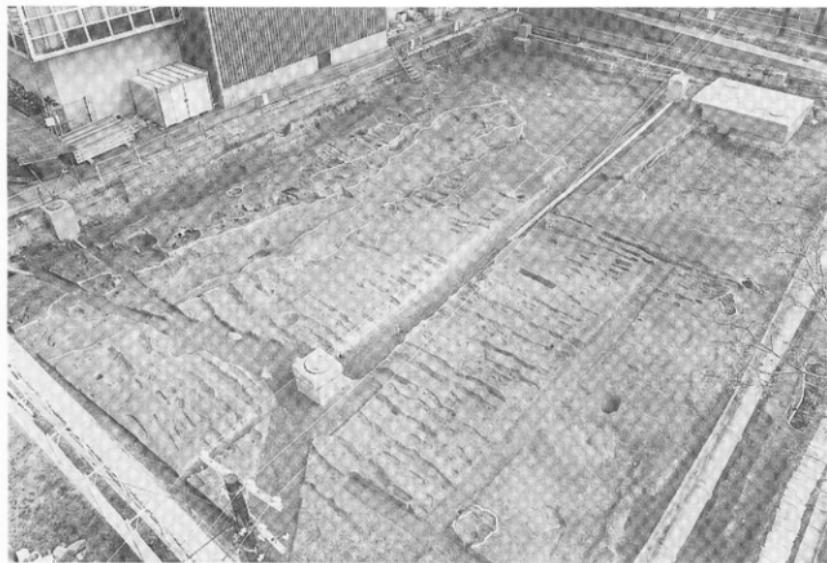
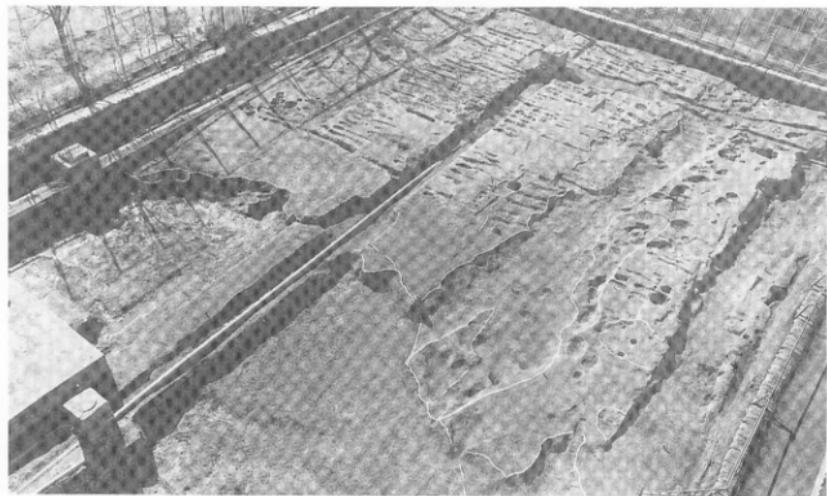


図28 99712調査（梅味遺跡4次）遺構配置図および土層断面図（縮尺1/200）



① 調査区全景 1 (南西から)



② 調査区全景 2 (北東から)

写真15 99712調査（樽味遺跡4次）全景

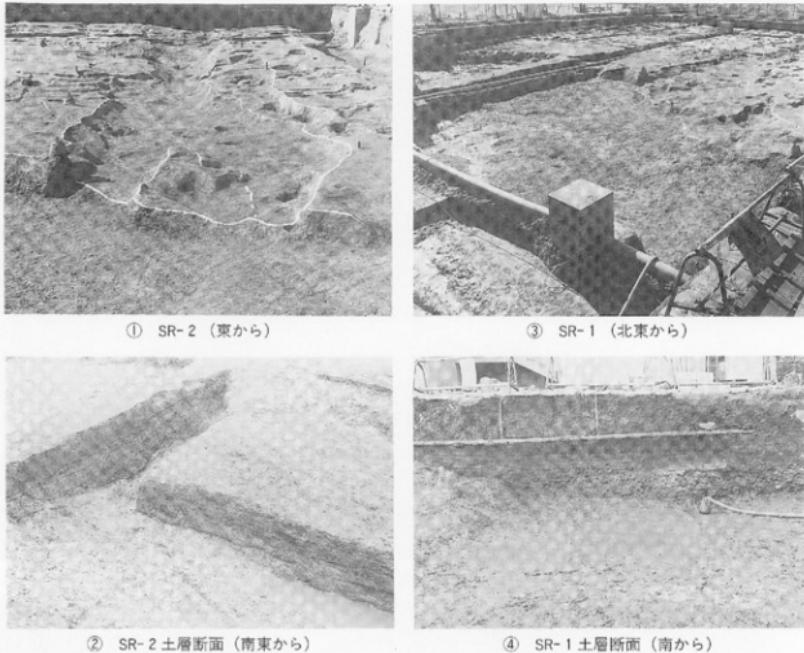


写真16 99712調査（博味遺跡4次）SR-1・2

厚さを増し、流路内堆積へと代わる。その最上部にIII'層は溜まり状に堆積していたことになる。この流路をSR-1とした。SR-1は、やや蛇行しながらも南流しており、調査区内ではその西岸を検出したことになる。東岸は調査区外で明らかでない。しかし、底面の傾斜や埋没土層の観察から、調査区から大きく東へ拡張することはないと推測される。その幅は東西15~20mほどであろう。深さは、西岸のIV層上面との差で、およそ1m（写真16-③・④）。下層の砂礫層からは、弥生土器から中世の土師器までの各時期に及ぶ遺物が、比較的多く出土した。

また、自然流路SR-1に合流する東西方向の流路SR-2も検出している。ほぼ東西に延び、SR-1からの取水を意図した人工的水路かもしれない（写真16-①・②）。遺物は細片が多いが、SR-1同様、弥生時代から中世にわたる。

以外には、IV層上面で若干の柱穴・土壤を検出したが、遺構の残存状況はよくない。ただし、それらの中にも、粘性の高い埋土などから、中世以前に漁ると推定される遺構もある。本来的には安定した基盤層の上で、弥生時代・古墳時代の土地利用が行われていたと推測される。

（吉田）

99713 附属農高運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス 増設工事に伴う調査

調査地点 松山市樽味3丁目5番7号

樽味団地

調査面積 6.1m²

調査期間 1997年12月18日

調査の種別 試掘調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

依頼文書 平成9年12月22日

愛農大発 第703号

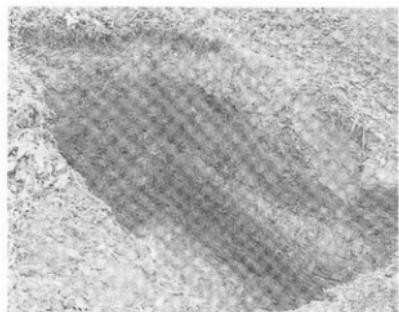
1 調査にいたる経緯

附属農業高等学校の運動場東側防護ネットおよび3

棟東側フェンス増設工事が計画された。そのうち、防球ネットポールの基礎部分が、遺跡に影響を及ぼすことが予想された。しかし、既往の調査データがなく遺跡存在及びその深度が不明なため、事前に試掘調査を行うこととした。

2 調査の記録

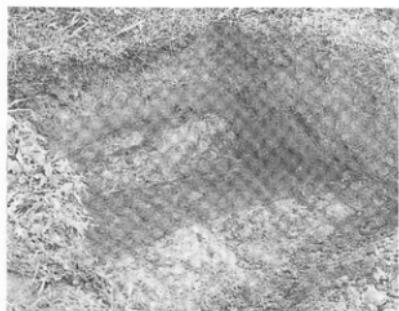
トレーニングは、運動場東の堤部分に、実際のポール設置位置を避けて、4ヶ所設定し、南から1～4トレーニングとした(図29右側)。重機によりまず遺構検出面あるいは地山面まで掘削し、その後精査を行った。



① 1トレーニング (北西から)



② 2トレーニング (北西から)



③ 3トレーニング (北西から)



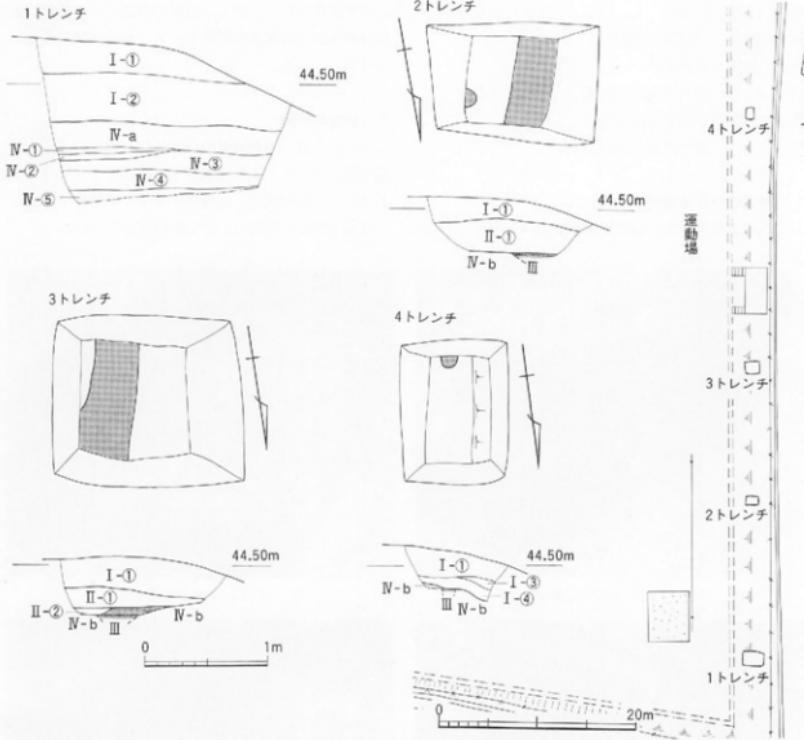
④ 4トレーニング (北西から)

写真17 99713調査1～4トレーニング

(1) 1 レンチ (図29-①、写真17-①)

運動場南東隅に位置する。堤頂部から70cmほどまでは表土層が続く。その直下は地山であるIV層となる。

この地点では、黄色のシルト層(IV-b層)ではなく、褐色のシルト層(IV-a層)となり、北吉井団地や樽味団地の南半に共通する。検出レベルは標高43.8mで、



I-①層：植栽用真砂土。

I-②層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。II層の再堆積層。コンクリート片含む。

I-③層：IV-b層のブロック。

I-④層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。II層の再堆積層。

II-①層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質土。~0.1mmの砂粒を含み、2mm大的の砂粒を少量含む。しまり有。

II-②層：II層・III層およびIV-b層の黄褐色砂がブロック状に混在。

III層：灰黃褐色(10YR4/2)シルト質土。遺構埋土。

IV- a層：褐色(10YR4/5)シルト。

IV- b層：黃褐色(10YR5/6)シルト。

IV-①層：褐色(10YR4/4)シルト。~0.1mmの砂粒を含み、しまり弱い。

IV-②層：黄褐色(10YR5/5)砂礫質土。~2mmの砂粒を含む。IV-a層を若干含み、しまり弱い。①に2~3cmの小砾を混じる。

IV-③層：にぼい黄褐色(10YR5/3)砂礫質土。~2mmの砂粒を含み、しまり弱い。

IV-④層：にぼい黄褐色(10YR5/4)砂礫質土。~2mmの砂粒を含み、しまり弱い。シルト質を若干混じえる。

IV-⑥層：黄褐色(10YR5/6)シルト上部に~0.5mmの砂粒を混じ、しまり強い。IV-b層に一致する可能性高い。

図29 99313調査1~4 レンチ位置図および平面・土層断面図(縮尺1/500、1/40)

運動場面より20cmほど高い。1トレンチでは遺跡は認められなかったので、さら掘削を進めて、下層の状況の確認を行った。IV-a層は20cmほどの厚さで、下にやや砂粒を含む暗灰黄色のシルトの薄層(IV-①層)をはさんで、黄褐色からにぶい黄褐色の砂質土層(IV-②・③・④層)が40cmほど堆積する。その下でしまりの強い黄褐色シルト(IV-⑤層)となる。砂質土層からの湧水もあって、掘削はこれまでとどめた。

(2) 2トレンチ (図29-②、写真17-②)

堤頂部から20cmほどは表土層が続くが、以下ではII層となる。II層は厚さ25cmほど。直下には地山であるIV-b層を検出するとともに、III層(灰黄褐色シルト質土)の落ち込みとして、トレンチ西半に土壌を、東壁際に柱穴を検出した。埋土の色調から中世の遺構と推測される。地山面の検出レベルは、標高44.15mで、運動場面より55cmほど高い。

(3) 3トレンチ (図29-③、写真17-③)

堤頂部から25cmほどは表土層で、その下にII層が続く。II層下面は標高44.15mほどで水平で、地山面及び遺構検出面となる。遺構としては、北北東から南南西方向の溝を検出した。埋土は灰黄褐色シルト質土で、

中世の遺構らしい。

(4) 4トレンチ (図29-④、写真17-④)

堤頂部から35cmほど表土層が続き、直下で地山面及び遺構検出面となる。標高44.3m付近、運動場面からは70cmほど高い位置である。遺構としては南壁際で柱穴を検出し、この埋土も灰黄褐色シルト質土で、中世の遺構と見られる。

3 調査のまとめ

以上のように、運動場東側堤部分には、包含層としてのIII層は存在を確認できなかったが、地山面において遺構の存在を確認することができた。しかもその現地表からの深度は、南行するに従い深くなるものの、北側では表土下30cmほどにまで、きわめて浅い位置に上がってきている。南端こそ70cmほどの表土があるが、2トレンチでは40cmほどであり1-2トレンチ間の状況は明らかでない。また、調査結果から、防球ネット設置にあたっては、深度50cmのポール基礎部分は、ほぼ全域にわたって遺跡に影響を及ぼす可能性が高く、調査が必要である。

(吉田)

99714 附属農高校舎埋蔵文化財発掘調査に伴う支障建物整備工事 (農機舎及び車庫) に伴う調査

調査地点 松山市椿味3丁目5番7号
椿味団地
調査面積 186.5m²
調査期間 1998年2月4日～2月6日
調査の種別 立会調査
調査担当 吉田広・三吉秀充
依頼文書 平成9年12月19日
愛大農発 第702号

た結果、立会調査を行うこととした。

2 調査の記録

本調査では、農機舎新設に伴う掘削地点を1トレンチ、車庫新設に伴う掘削地点を2トレンチとした。

(1) 1トレンチ (図30)

現地表下70cmまで掘削を行ったが瓦礫を伴ったI層が続いており、遺構・遺物は確認できなかった。

(2) 2トレンチ (図31)

現地表下60cmまで掘削を行ったが、道路舗装に伴うと思われる円礫が混じるI層が続いており、遺構・遺物は確認できなかった。

3 調査後の対応

以上のことから1・2トレンチとともに埋蔵文化財への影響はないものと判断し、慎重工事を指示して調査を終了した。

(三吉)

1 調査にいたる経緯

附属農高校舎の建設が計画され、建設予定地にある農機舎及び車庫を移転・新設されることとなった。

農機舎の新設地の一部は、かつて「椿味団地(附属農高)校舎新営に伴う試掘調査」(調査番号:99703)において4トレンチとして調査を行っている。また、車庫新設地は、同調査1トレンチに接した南側部分に予定された。先の調査結果と今回の掘削深度とを考慮し



図30 99714調査1トレンチ位置図および土層柱状図（縮尺1/500、1/40）

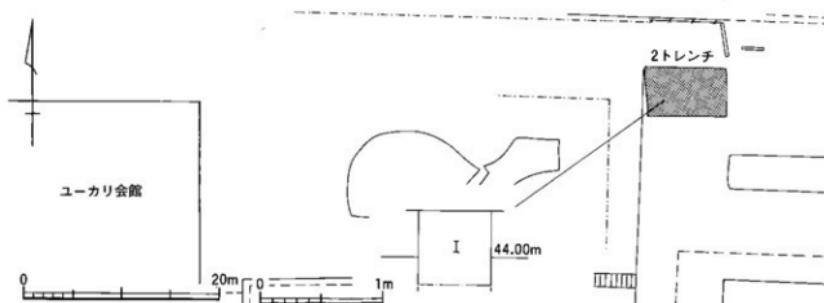


図31 99714調査2トレンチ位置図および土層柱状図（縮尺1/500、1/40）

99715 1997年度構内遺跡確認調査（文京遺跡17次調査）

調査地点 松山市文京町3番
城北団地
調査面積 154m²
調査期間 1998年3月2日～3月10日
調査の種別 確認調査
調査担当 田崎博之・吉田広・三吉秀充
調査補助 宮崎直栄

1 調査にいたる経緯と目的

1996年度の確認調査（文京遺跡15次調査、調査番号：99602）では、城北団地各所に調査トレンチを設定して、団地全域での遺構分布の状況を把握することに努めた。しかし、城北団地における再開発の中心となる旧グラウンド部分では、中央部に南北90mの7トレンチ、西側にある課外活動第3共用施設に南北13mほどの8トレンチを設定したにすぎない。トレンチ調査という

制限もあり、遺構の有無は確認できたが、遺構の分布状況を的確に把握できたわけではない。そのため、埋蔵文化財調査室は、再開発計画に対して、具体的に遺跡の分布状況を提示できないのが実情であった。そこで、1997年度には、再開発の中心となる旧グラウンドにおけるより精度の高い遺構分布状況を把握するため、全学の埋蔵文化財調査委員会に確認調査計画を提出し、その議を経て、調査を実施することとなった。

2 調査の記録

旧グラウンドの3ヶ所に調査トレンチを設定した(図2)。14・16次調査区では弥生時代～古墳時代の遺構がとくに密集するが、その密集範囲が旧グラウンドのどの付近まで広がるかを把握するために、1・2トレンチを設定することとした。1トレンチは、15次調査7トレンチの東側に平行して南北方向に設定した。2トレンチは、15次調査7トレンチの西側、同8トレンチの南側の位置に、東西方向に設定した。また、工学部1号館III期工事に伴う16次調査の成果から、弥生時代の遺構がより西側へひろがることが予想された。そのため、16次調査西側に東西方向の3トレンチを設定した。

今次調査では、遺構の検出に主眼をおいた。そのため、弥生時代～古墳時代の遺物を包含するIII層を一部掘り下げて、遺構の検出に努めた。その際、各トレンチでのIII層部分の遺物の取り上げや、遺構の位置表記には、例言で示した城北団地全域で設定している調査区割りを用いた。各トレンチの層序は、城北団地における既往の調査成果から設定された団地全体にわたる基本層序I～IV層に対応させた。また、今次調査で検出した遺構は、総数53基におよぶ(表2)。これらには、1～3トレンチを通じた連番の遺構番号を付し、竪穴式住居跡にはSC、溝にはSD、土壙にはSK、柱穴もしくは小穴にはSP、自然流路にはSR、の遺構略号を冠して遺構の種別を表した。同時に、遺構の形状・切り合い関係・出土遺物・推定時期などの概要をまとめた一覧表(表3)を作成したので、参照されたい。

(1) 1トレンチ

旧グラウンドの中央部東側、15次調査7トレンチ東側にあたるDK-36～42区部分に、長さ30m、幅2mで設定した。まず、重機掘削を行い、I・II層を取り除いた。このとき、遺物包含層であるIII層の上面で自然流路を1条検出した(図32、写真18-①～③)。

表2 99715調査(文京遺跡17次)遺構一覧1

	1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	合計
竪穴式住居跡	$2 + \alpha$	10	$6 + \alpha$	$18 + \alpha$
土壙	4	3	1	8
溝	2	1		3
自然流路	1		1	2
柱穴・小穴	10	11	2	23

【自然流路】

トレンチ北部のDK-40～42区で、南西から北西方向に向かって延びる自然流路を検出した。これがSR-01である(写真18-③)。流路底が一段低くなった面まで掘り下げて、平面形を確認した。流路幅はトレンチ壁面で10m以上、一段低くなった流路底の幅は約8mを測る。埋土は、黒褐色砂質シルトに暗灰色細砂礫の小ブロックが多数混じる。トレンチ西壁沿いに35cm幅で帯状に断ち割りを行った。緩やかな船底状の横断面をもち、II層下面から流路底までは厚さ50～55cmを測る。埋土上面から土師器・須恵器の細片が多く出土し、DK-41区のほぼ中央からは短頸壺の脚部片が纏まった状態で出土した。

SR-01からは弥生時代から古墳時代の遺物が出土している(図33)。

図33-1～5は弥生土器。矢羽透かしを持つ低脚高坏(5)など中期後葉・複合口縁壺(1)、鉢(3)のような後期の遺物を含む。図33-6～9は須恵器。壺(6)の特徴などから6世紀後半の特徴を示す。したがって、SR-01は古墳時代後期に埋没するとみられる。

その後、人力で遺物包含層であるIII層を掘り下げた。III層は、トレンチ南端では27.3mで現れ、10cm前後の厚さ堆積する。これが北へ向いて深くなり、厚さも増していく。後述するSR-1による削平を受けていないX=94095付近では27.3～27.0mの間がIII層の堆積となる。また、トレンチ北端では、SR-1による削平を一部受けながらも、27.8～27.65mの厚さを残している。

このIII層出土遺物として取り上げたものには、縄文時代から古墳時代の遺物がある(図34・35)。

図34-1は縄文時代後期の深鉢の口縁部である。

図34-2～13は土器は、凹線が施される壺(5)、高坏据部(12)など中期後葉の土器を主体とするが、甕(6～8)、器台(13)のような後期の土器も含まれる。

表3 99715調査(文京遺跡17次)遺構一覧2

トレンチNo	遺構	遺構の特徴			時期
		種別番号	平面形	切り合い関係(古→新)	
1トレンチ	SR: 01				古墳後期
	SP: 02	円形			古墳後期?
	SK: 03	楕円形	SK-03→SK-04?		〃
	SK: 04	楕円形	SK-03・05→SK-04?		〃
	SK: 05	楕円形	SK-05→SK-04?		〃
	SK: 06	不整形	SK-06→SP-07・08	埋土上面から土器細片が出土。	〃
	SP: 07	円形	SK-06→SP-07		〃
	SP: 08	〃	SK-06→SP-08		〃
	SD: 09				〃
	SD: 10		SD-10→SP-11・12		〃
	SP: 11	円形	SD-10→SP-11		〃
	SP: 12	〃	SD-10→SP-12		〃
	SP: 13	〃			〃
	SP: 14	不整形			〃
	SP: 15	楕円形	SP-15→SP-16		〃
	SP: 16	円形?	SP-15→SP-16		〃
	SP: 17	楕円形			〃
	SC: 18	不明		SC-19部分までのびる。 複数の住居が重複している。	〃
	SC: 19	不明			〃
2トレンチ	SC: 20			トレンチ壁の土層断面で確認。埋土中から須恵器が出土。	古墳後期
	SK: 21	方形?	SC-22・23→SK-21		古墳後期?
	SC: 22	方形	SC-23→SC-22→SK-21		弥生中～後期?
	SC: 23	方形?	SC-24→SC-23→SK-21・SC-22		〃
	SC: 24	方形?	SC-25→SC-24→SC-23		〃
	SC: 25	構丸方形?	SC-25→SC-24・SD-29		〃
	SK: 26	方形		埋土上部から須恵器片が出土。	古墳後期
	SC: 27	方形?	SC-27→SC-25・SD-29		弥生中～後期?
	SK: 28	方形	SC-34→SK-28		古墳後期?
	SD: 29		SC-25・27・34・SP-30→SD-29→SC-26	埋土上部から須恵器片が出土。	古墳後期
	SP: 30	円形	SC-34→SP-30→SD-29		古墳後期?
	SP: 31	円形	SC-34→SP-31	埋土上部から須恵器片が出土。	古墳後期
	SP: 32	円形	SC-34→SP-32	〃	〃
	SP: 33	構丸方形	SC-34→SP-33	埋土から獨立柱建物の柱穴と判断。 平面形が不整形であり、複数の道構が切り合っている可能性が強い。	古墳後期? 弥生中～後期?
	SC: 34	不整形	SC-34→SK-28・SD-29・SP-33		古墳後期? 弥生中～後期?
3トレンチ	SP: 35	円形	SC-36→SP-35		古墳後期
	SC: 36	方形?	SC-36→SC-34・SP-35		弥生中～後期?
	SP: 37	構円形	SC-38・40→SP-37	埋土上部から須恵器片が出土。	古墳後期?
	SC: 38	方形?	SC-40→SC-38→SC-36		古墳後期?
	SP: 39	円形	SC-40→SP-39	埋土上部から須恵器片が出土。	古墳後期
	SC: 40	不明	SC-40→SC-36・38、SP-37・39		古墳後期?
	SP: 51	円形	SK-26→SP-51	SC-20に伴う小穴もしくは柱穴	弥生中～後期?
	SP: 52	円形	SK-26・SD-29→SP-52	〃	古墳後期?
	SP: 53	円形	SK-26・SD-29→SP-53	〃	〃
	SP: 54	円形	SC-25・SD-29→SP-54	〃	〃
	SC: 41	円形	SC-42→SC-41		弥生中期
	SC: 42	方形	SC-42→SC-41・43		〃
	SC: 43	小判形	SC-42→SC-43・SP-44		中世以降
	SP: 44	不整形	SC-42・43→SP-44		〃
SK: 45	楕円形		SC-42→SP-45	埋土には拳大の石が混じる。	弥生中期
	SC: 46	方形	SC-48→SP-46		〃
	SC: 47	方形	SC-48→SC-47		〃
	SC: 48	円形	SC-48→SC42・46・47、SK-49	規模的に複数の住居跡が重複している可能性が強い。	〃
	SK: 49	楕円形	C-48→SK-49		〃
	SR: 50		SC-41～43・46～48・SK-49の上面を覆う。	調査トレンチ全域にみられる砂礫層。EB-29区からは、ほぼ完形の弥生土器がかたまって出土。	弥生中期

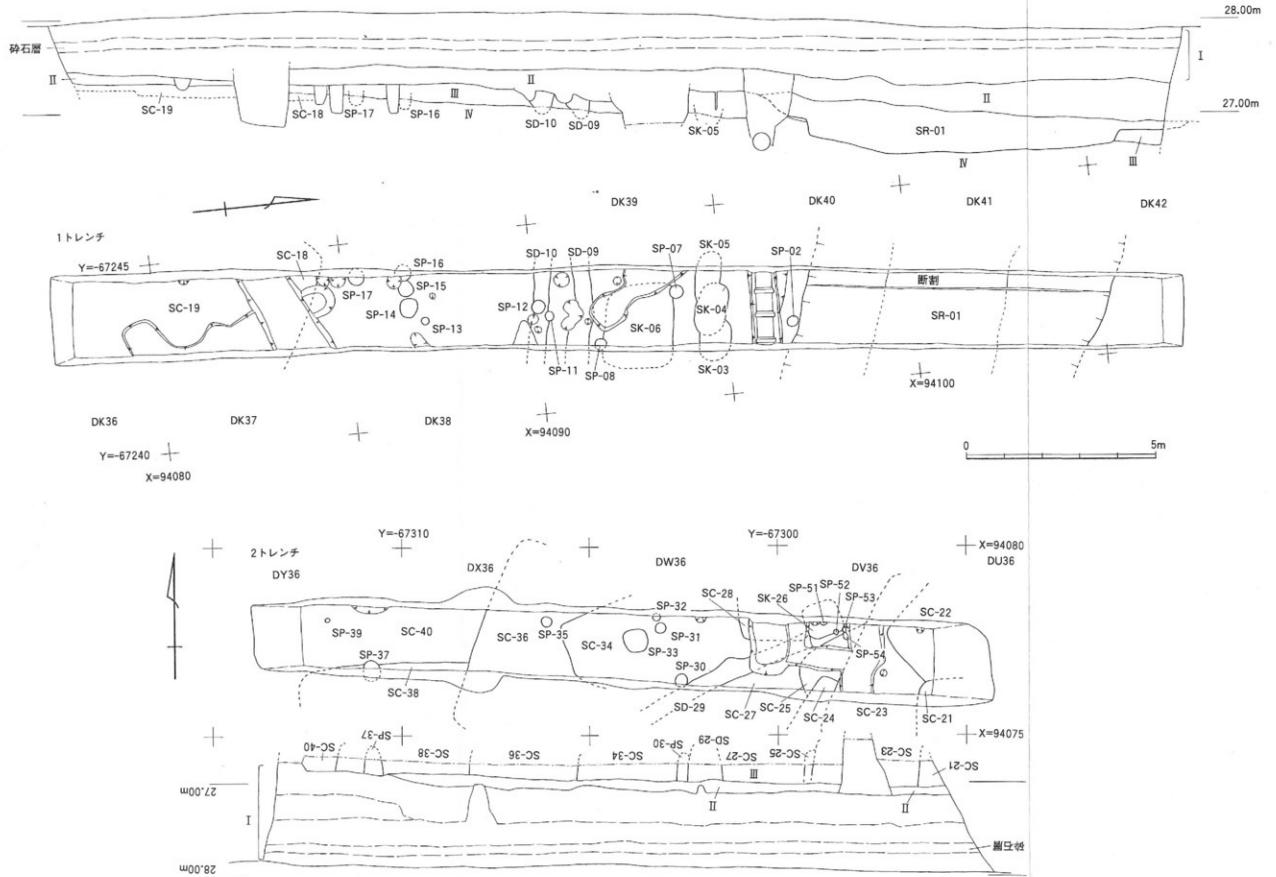


図32 99715調査（文京遺跡17次）1・2トレンチ平面図および土層断面図（縮尺1/100、1/40）



① 1トレンチ全景（南から）



② 1トレンチ遺構検出状況（南から）



③ 1トレンチ西壁土層断面（南東から）



④ 1トレンチSR-01（南東から）



⑤ 2トレンチ全景（南東から）



⑥ 2トレンチ遺構検出状況（西から）

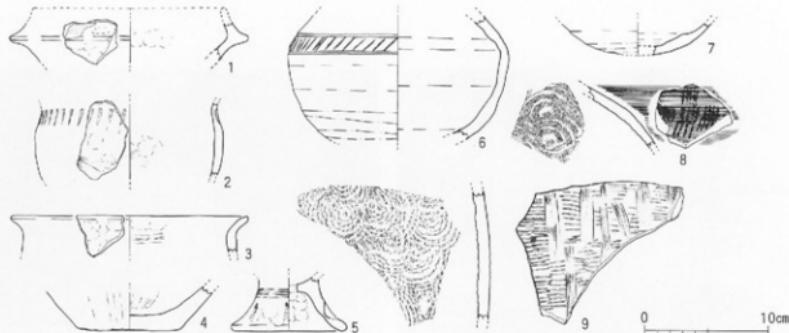


図33 99715調査（文京遺跡17次）1トレンチSR-01出土遺物実測図（縮尺1/4）

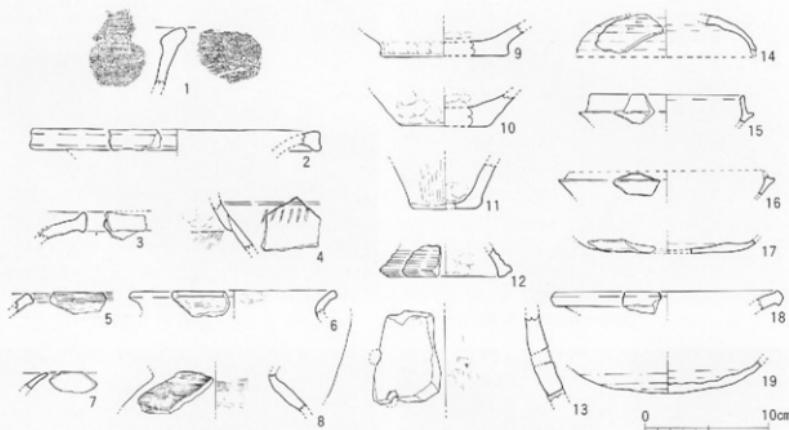


図34 99715調査（文京遺跡17次）1トレンチIII層出土遺物実測図1（縮尺1/4）

図34-14～19は須恵器。环蓋、环身、壺底部などが出士している。時期は、环蓋、环身の形態から6世紀中葉(14-15)・後葉(16-17)である。

図35-1は性格不明の石器。不明瞭ながら擦痕および敲打痕が残る。

III層掘削後、遺構検出を行った。その結果、調査区の北側で自然流路1条(SR-01)、南側に竪穴式住居跡2軒以上(SC-18・19)、中央部では土塘4基(SK-03～06)、溝2条(SD-09・10)、柱穴および小穴10基

(SP-02・07・08・11～17)を検出した。

【竪穴式住居跡】

トレンチ南側にあたるDK-37区で、II層の灰色土を埋土とする小穴・土壤・溝の擾乱部分に挟まれた小範囲で、直線的にのびる輪郭線を検出した。擾乱部分の壁面で観察すると、検出面から深さ8～10cm掘り込まれ、壁がほぼ垂直に立ち上がる。竪穴式住居跡と考え、SC-18とした。南側のDK36・37区のSC-19部分でも、SC-18とほぼ同じ高さの床面を確認でき、SC-19との

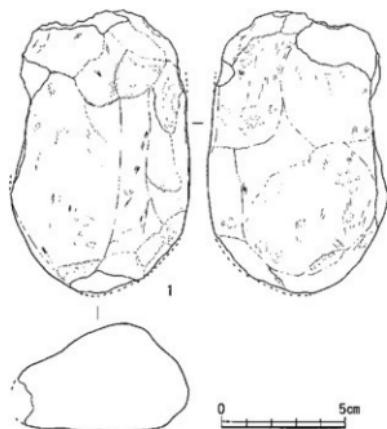


図35 99715調査(文京遺跡17次) 1トレンチⅢ層出土遺物実測図2(縮尺1/2)

切り合いを考えたが、平面ではその関係を明らかにできなかった。埋土は、小石・礫が多く混じる黒褐色砂質シルト質土である。砂礫を多く含み、砂っぽい埋土であることは、南側の14次調査地点北東部分で調査された古墳時代後期の竪穴式住居跡の埋土と共通する。当該期の住居跡と考えられる。

SC-19は、トレンチ南側のDK-36・37区で、II層の灰色土を埋土とする不整形の擾乱壙に一部を切られた状態で確認できた。SC-18と切り合うと考えられるが、時間的な先後関係は不明である。また、擾乱壙の壁面で、床面に段差があることを確認できた。そのため、SC-18を加えると、3軒以上の竪穴式住居跡が重複しているものと考えられる。床面は検出面から6cmないし12cm前後を測る。埋土は、小石・礫が多く混じる黒褐色砂質シルト質土で、SC-18と同様に、埋土の質から、古墳時代後期の住居跡である可能性が高い。

[土壤]

DK-38区とDK-39区の境界部分で、東西方向に互いに切り合う3基の土壤を検出した。

この中で、SK-03はトレンチ東壁沿いの土壤である。北側のSK-04に切られる。ただし、SK-05も含めた切り合い関係は、検出面でどうにか確認できた程度で、先後関係は不確実である。埋土は、小石・礫が少量混じる黒褐色砂質シルト質土で、わずかにぶい黄褐色シルトが混じるため、SK-04と比べて、全体に明るい色調の埋土である。

SK-04はSK-03の北側にあり、SK-03・05を切る。埋土は、小石・礫が少量混じる黒褐色砂質シルト質土で、小指大以下のぶい黄褐色の塊が点々と少量混じる。

SK-05はトレンチ西壁沿いで検出した。SK-04に切られる。埋土は、黒褐色砂質シルトに小石・礫が混じるが、SK-03・04と比べて、砂礫や小石の量は多くない。

SK-06はトレンチのほぼ中央のDK39区で確認した不整形の土壤である。SP-07・08に切られる。埋土は、小石・礫が少量混じる黒褐色砂質シルト質土である。埋土上面から土器細片が点々と出土したが、時期を判別できるものはない。擾乱部分の壁面で、検出面から12~13cmほどの深さをもつことを確認できた。

[溝]

トレンチ中央のDK-39区で、ほぼ東西にのびる2条の溝を検出した。

北側の溝をSD-09とした。溝幅は45~55cmで、II層と同じ灰色系の埋土をもつ小穴(擾乱部分)の壁面で、検出面から9~10cmほどの深さをもつことを確認できた。埋土は、暗灰色粗砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルト質土である。出土遺物はないが、埋土の特徴やSR-01との位置関係から、古墳時代後期の溝と考える。

SD-10は、SD-09の南側の溝で、ほぼ平行して東西にのびる。SP-11・12に切られる。溝幅は40cm前後で、埋土は黒褐色砂質シルト質土である。SD-09と比べて、暗灰色粗砂礫は極端に少ない。擾乱の灰色系の埋土をもつ小穴の壁面で、検出面から8~9cmほどの深さの溝であることを確認できた。SR-01やSD-09とほぼ平行することから、古墳時代後期の溝と考えられる。

[柱穴・小穴]

トレンチ中央部のDK-38区からDK-40区南部で、10基(SP-02・07・08・11~17)の柱穴もしくは小穴を確認した。いずれも黒褐色系の埋土をもつ。シルト質土の埋土をもつSP-07・08・11・12・16と、砂礫や小石が多く混じるSP-02・13~15・17に大別できる。しかし、切り合い関係からは、埋土の差が時間的な先後関係を表すとは限らないようである。いずれも、古墳時代後期のものと考えておきたい。また、トレンチ調査であるため、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴の組み合わせは確認できなかった。埋土の詳細については、

表4 99715調査（文京遺跡17次）遺構一覧3

トレンチNo	遺構番号	埋 土 の 特 徴
1トレンチ	SP-02	黒褐色砂質シルト質土に、にぶい黄褐色砂質シルトの親指先大の小塊が点々と混じる。小石・礫が多い。
	SP-07	黒褐色砂質シルト質土。小指先大の炭化物の小片が点々とごく少く混じる。
	SP-08	黒褐色シルト質土。
	SP-11	黒褐色シルト質土に、にぶい黄褐色シルトの親指先大の塊が少量点々と混じる。礫はほとんど含まない。
	SP-12	黒褐色シルト質土。疊はほとんど含まない。
	SP-13	黒褐色砂質シルトに、暗灰色粗砂が少量混じる。
	SP-14	黒褐色砂質シルト質土に、暗灰色粗砂が多く混じる。
	SP-15	黒褐色砂質シルト質土に、暗灰色粗砂が多く混じり、SP-14埋土と共に通する。
	SP-16	黒褐色砂質シルト質土。
	SP-17	黒褐色砂質シルト質土に、暗灰色粗砂が小ブロックで多く混じる。
2トレンチ	SP-30	暗褐色砂質土。1~2mmの大砂粒含み、シルト質若干混じり、土質は締まっている。
	SP-31	暗褐色砂質土。SC-34埋土に比べ、砂礫混じり少なく砂質強い。
	SP-32	暗褐色砂質土。SC-34埋土に比べ、砂礫混じり少なく砂質強い。
	SP-33	IV質が大塊で混じる暗褐色砂質土。10cm大のIV層ブロックを混じえる。1~5mmの大砂粒を混じえ、しまり有り。少しシルト質ブロックも混じる。雖立柱建物の柱穴。
	SP-35	暗褐色砂質土。1~2mm前後の砂粒含むが、砂質やや強い。
	SP-37	暗褐色砂質土。1mm前後の砂礫を少し含むが、疊混じり少なく砂質強い。
	SP-39	暗褐色砂質土。2mm前後の砂礫を含み、シルト質混じる。土質は締まりあり。
	SP-51	1~3mm大の砂礫が混じる暗褐色シルト質土。土質の締まりは強い。
	SP-52	"
	SP-53	"
	SP-54	"
3トレンチ	SP-44	やや灰色味をおびた褐色砂質シルト。砂礫多し。
	SP-45	SP-44と共に通した埋土であるが、拳大の石が混じる。炭化物が多い。

表4 を参照されたい。

以上、1トレンチでは、SR-01が出土遺物から古墳時代後期の自然流路であることを確認できた。他の遺構についても、近接する14次調査の遺構埋土との比較や、相互の切り合い関係から、古墳時代後期のものと考えられる。このSR-01は、15次調査7トレンチ北側で確認されている谷状の窪地へ流れ込むものと考えられる。トレンチ中央部にはほぼ平行して東西方向にのびるSD-09・10は、15次調査7トレンチで確認されたSD-25と共に通した埋土をもつ。位置関係からも、同一の溝である可能性が強い。また、トレンチ南部のDK-36・37区では、複数の竪穴式住居跡が重複している。16次調査で確認された遺構の密集範囲の北限にあたると考えられる。

(2) 2トレンチ

旧グラウンドの中央部西側、15次調査7トレンチ西侧および同8トレンチと16次調査区のほぼ真ん中に、長さ16.5m、幅1.6~1.8mの2トレンチを設定した。調査区割りでは、DU~DY-36区にあたる(図32)。表土にあたるI層および、灰色系のII層を剥ぎ取ると、黒褐色土層があらわれ、土器の細片が數多く出土し始めた。そのため、この黒褐色土層は遺構の埋土である可能性を考えたが、黒褐色土層上面で遺構の輪郭を検出することは困難であった。そこで、10~20cm掘り下

げて、遺構検出に努めた。

この間に出土した遺物は、III層出土として取り上げたが、弥生時代・中世の遺物が出土している(図36・37)。

図36-1~19は弥生土器。中期後葉の土器を主体とする。甕は口縁部には、端部に凹線を施すもの(2)、口縁が匙面状に内湾するもの(3)、強く外反し、端部に面を持つものがある(4~6)。これらの内4~6は後期の甕である。図37-1は弥生時代の土鉢である。

この他、中世の瓦器焼(20)がある。

III層を一部掘り下げて精査した結果、トレンチ全面で、竪穴式住居跡10軒(SC-20~22~25~27~34~36~38~40)、土墻3基(SK-21~26~28)、溝1条(SD-29)、柱穴および小穴11基(SP-30~33~35~37~39~51~54)が密集した状態で検出できた(図32、写真18-⑤~⑥)。

[竪穴式住居跡]

DV-36区部分のトレンチ北壁の土層断面を精査中に、床面の広がりを確認した。これをSC-20とした。埋土は、暗褐色砂質土で、1~5mmの大砂礫を多く含む。シルト質土の塊はみられず、砂質がかなり強い。また、SK-26・SC-25・SD-29を切るSP-51~54の4基の柱穴もしくは小穴は、SC-20に伴うものと考えられる。埋土中から須恵器片が出土していることから、古墳時代後期の住居跡と考えられる。またトレンチ壁面から、磨

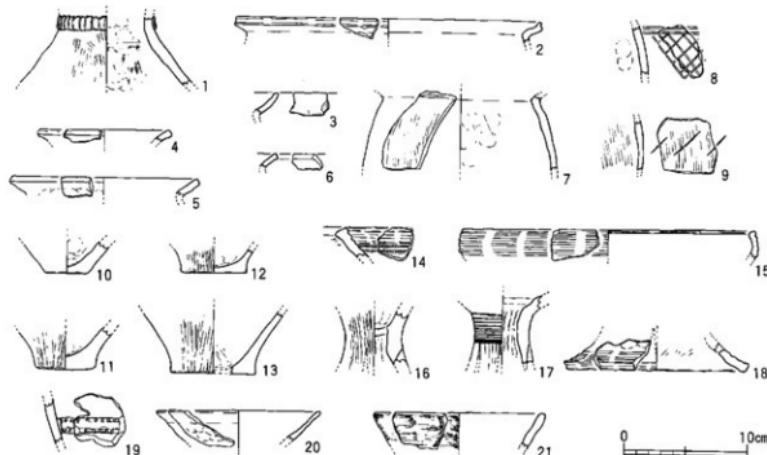
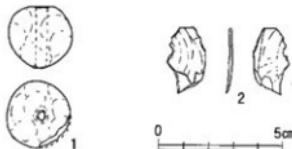


図36 99715調査（文京遺跡17次）2トレンチⅢ層出土遺物実測図1（縮尺1/4）

図37 99715調査（文京遺跡17次）2トレンチⅢ層出土遺物実測図2（縮尺1/2）



石（図38）が出土している。側部に縦方向の擦痕が顕著に残り、側部を主に使用していたことがうかがえる。

SC-22は、トレンチ東端のDV-36区で検出した方形の竪穴式住居跡の北側角である。SC-23を切り、SK-21に切られる。埋土は、暗褐色砂質土で、1～3mmの大の砂礫をかなり多く含み、さらにシルト質土のⅢ層部分にあたる黒褐色土の塊をも含む。土質はしまっている。16次調査の弥生時代中期～後期の竪穴式住居跡の埋土は、古墳時代後期の遺構埋土と比べて、大粒の礫が混じらず、わずかに黒みが強い色調をもつ。SC-22に加えて、後述するSC-23～25・27・34・36・38・40の埋土は、弥生時代中期～後期の竪穴式住居跡の埋土と共通する。当該期の住居跡である可能性が強い。

SC-23は、トレンチ東半部のDV-36区で検出した。SK-21・SC-22に切られ、SC-24を切る。埋土は、暗褐色砂質土で、1～3mmの大の砂礫が少量混じる。基本的

に砂粒は細かい。IV層のにおい黄褐色シルト質土の2cm大の塊が少量混じる。埋土の特徴から、弥生時代中期～後期の住居跡である可能性をもつ。

トレンチ東半部DV-36区の南壁沿いで方形の竪穴式住居跡の北西角部分を確認し、SC-23とした。SC-23に切られ、SC-25を切る。埋土は、暗褐色砂質土で、1～3mmの大の砂礫が混じり、しまりはやや弱い。炭化物片と1cm大のIV層のにおい黄褐色シルト質土の塊が混じる。埋土の特徴から、弥生時代中期～後期の住居跡である可能性をもつ。

DV-36区西半部で方形の竪穴式住居跡の角部分を検出し、SC-25とした。SC-24・SD-29に切られる。埋土は、暗褐色砂質土で、1～2mmの大の砂粒や2mm大の炭化物片が混じる。埋土の特徴から、弥生時代中期～後期の住居跡である可能性をもつ。

DW-36区、トレンチ南壁沿いで、南北～北東方向に

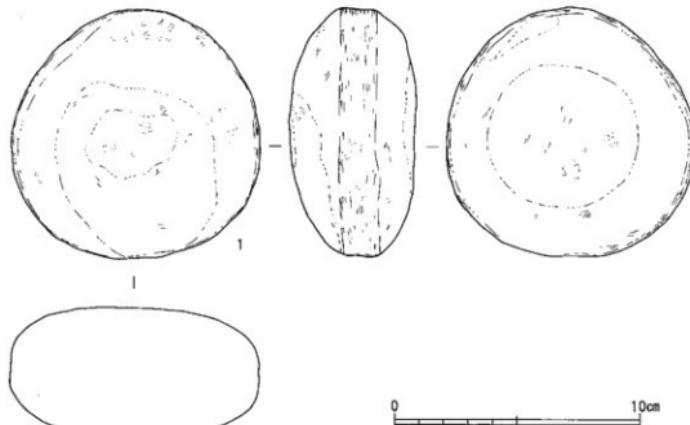


図38 99715調査（文京遺跡17次）SC-20出土遺物実測図（縮尺1/2）

直線的にのびる輪郭線を確認した。方形の竪穴式住居跡として、SC-27とした。SC-25、SD-29に切られるが、SC-34との切り合いは不明である。埋土は、暗褐色砂質土で、1～2mm大の砂粒や、IV層のにぶい黄褐色シルト質土の2cm大の塊が少量混じる。土質はしまっている。埋土は砂質土ではあるが、やや黒みのある色調をもつことから、弥生時代中期～後期の住居跡である可能性がある。

SC-34は、トレンチ中央部のDX36区南端からDW-36区にかけて検出した。規模の面から、竪穴式住居跡と考えたが、南壁近くで輪郭線が東に向かって急に折れる。土壤などとの切り合いが考えられる。SK-28、SD-29、SP-33などに切られる。埋土の特徴から、弥生時代中期～後期の住居跡である可能性をもつ。

トレンチ西半部のDX-36区で、北東～南西方向に直線的にのびる輪郭線を確認した。方形の竪穴式住居跡と考え、SC-36とした。SC-34、SP-35に切られる。埋土は、暗褐色砂質土で、1～3mm大の砂礫を含み、IV層のにぶい黄褐色シルト質土の塊も少量混じる。2～3mm大の炭化物片もみられる。SC-27と同じく、埋土は砂質土ではあるが、黒みを帯びた埋土の色調から、弥生時代中期～後期の住居跡の可能性を考えておく。

トレンチ西半部のDX-36区～DY-36区で、東西方向に直線的にのびる輪郭線を確認できた。方形の竪穴式

住居跡の北辺部分と考え、SC-38とした。SC-36に切られ、SC-40を切る。埋土は、暗褐色砂質土で、1～3mm大の砂粒を混じえ、若干シルト質土を含み、土質はしまっている。2mm大の炭化物片を含む。埋土の特徴から、弥生時代中期～後期の住居跡である可能性をもつ。トレンチ西半部のDX-36区～DY-36区のSC-36・38、SP-37・39に切られた部分は、暗褐色砂質土で、1～2mm前後の砂礫を混じえるが、砂礫混じり少なく、砂質が強い。土器の細片が点々と出土していることや、竪穴式住居跡の埋土と同じく黒みを帯びた色調をもつことから、竪穴式住居跡と考え、SC-40とした。トレンチ西端部分は、ほとんど床面近くが出ているものと思われる。

【土壤】

トレンチ南東隅のDV-36区部分で、方形の土壤と考えられる遺構を検出し、SK-21とした。SC-22・23を切る。一応、土壤と考えたが、トレンチ壁面の土層断面では、周壁がほぼ垂直に立ち上がる。そのため、竪穴式住居跡である可能性も残す。埋土は、暗褐色砂質土で、0.2mm大ほどの細かい砂粒で構成される。砂礫も含まれるが、1mm大のものはなく、少量IV層のにぶい黄褐色シルト質土の2cm大の塊が混じる。埋土はしまっている。大粒の礫を含むことから、古墳時代後期の遺構である可能性が強い。

SK-26は、トレンチ南端部のDV-36区で確認した。方形の土壌で、東西辺が95cmほどを測る。埋土は、砂礫質の強い暗褐色砂質土で、1~5mm大の砂礫が多く混じり、強くしまっている。SD-29の部分的な埋土である可能性も残る。埋土上部から須恵器の破片が出土しており、古墳時代後期の土壌と考える。

SK-28は、トレンチ北壁沿いDV36区とDW36区の境界部分で検出した。SC-34を切る。埋土は、暗褐色砂質土で、1~2mm大の炭化物片を含み、しまりがある。古墳時代後期の土壌か？

【溝】

SD-29は、トレンチ南半部分のDV-36・DW-36区で南西→北東方向にのびる幅40cm前後の溝である。SC-26に切られ、SC-25・27・34・SP-30を切る。埋土でも、上層部分は暗褐色砂質土で、1~5mm大の砂礫が多く混じり、土質はしまりがある。下層部分は、暗褐色で、1mm前後の砂粒を少し混じえるが、基本的にシルト質が強い。溝底の高さは灰色系の埋土をもつ搅乱の深度とほぼ一致している。出土遺物には、須恵器破片が含まれ、古墳時代後期の溝である。

このSD-29は、当初、14次調査47号溝(SD-47)および16次調査SD-10に対応するものと考えた。しかし、後者は下層から上層まで流水状態を示す砂礫で埋まっており、SD-29の埋土とは異なっている。確実に対応する溝とは言い切れない。

【柱穴・小穴】

確認できたSP-30~33・35・37・39・51~54の11基の柱穴もしくは小穴は、いずれも検出した竪穴式住居跡や土壌などを切り、出土遺物からも古墳時代後期のものと考えられる。その中で、SP-51~54はSC-20に伴う柱穴もしくは小穴と考えられる。また、SP-33の埋土には、直径10cm大でやや薄めIV層のにぶい黄褐色の塊が暗褐色の中に混じり、これまでの12・14・16次調査で確認できた掘立柱建物の柱穴埋土と同じである。平面形が角の丸い方形である点からも、掘立柱建物の柱穴と考えられる。しかし、調査範囲が狭いこともあり、掘立柱建物を構成する他の柱穴は検出できなかつた。他の埋土の特徴は、表4にまとめているので、参照されたい。

2トレンチ周辺の14・16次調査区では、古墳時代後期の集落南西部を区画する溝(12次調査SD-06・14次調査SD-10・16次調査SD-73)が確認されている。この区画溝の東側には、弥生時代の遺構もとに密集する。

2トレンチは、この16次調査SD-73の延長部分を検出することで、旧グラウンド中央西半部における遺構の密集範囲を把握するために設定したものである。この2トレンチで検出した溝にはSD-29がある。位置関係では、16次調査のSD-73の延長部分である可能性が考えられる。しかし、埋土は互いに異なり、確実に対応するとは言い難い。一方、2トレンチ全面で幾重にも重複して竪穴式住居跡や土壌が検出されたことは、予想以上に旧グラウンド北半部まで遺構密集地が広がっていることを示している。これらの遺構は、出土遺物、埋土の特徴、切り合い関係から、弥生時代中期と古墳時代後期の両者があるものと考えられる。

(3) 3トレンチ

旧グラウンドの西側、弓道場の北側に長さ約16.5m、幅1.9mの3トレンチを東西方向に設定した。調査区割りでは、EA~EE-29-30区にあたる。西側からパック・ホーによる掘り下げを始めたが、最近のゴミ穴などによる擾乱部分が多く、トレンチ中央部でようやく遺構を覆うように砂礫層(SR-50)が堆積していることに気が付いた。そこで、トレンチ中央部からパック・ホーによる掘削を砂礫層上面に止め、以下は人力で掘り下げ調査を進めることとした(図39、写真19-①・②)。

【自然流路】

最近のゴミ穴で大部分が擾乱されているが、トレンチ全体を覆う砂礫層を検出した。トレンチ東端でその検出レベルは26.9m、厚さ30cm。西端では同じ検出レベルで厚さ70cmを超える。トレンチ壁での土層観察から、北から南へ流れる自然流路を埋める砂礫層と判断した。トレンチ東半部分のEB-29区では、弥生時代中期後葉のほぼ完全に近い壺・壺・高壺などが集中して出土した(写真19-③)。ただし、SR-50出土土器には、壺(3)、甕(3)の2点の後期のものも含む(図40・41)。

このSR-50埋土である砂礫層を除去すると、本来の遺物包含層であるIII層が現れた。遺構検出を行ったために、このIII層の掘り下げを、20cm前後行った。なお、掘り下げの途中で出土した遺物は、III層出土遺物として扱った。いずれも弥生時代の遺物である(図42・43)。

図42-1・2は前期の甕であり、梅木編年I-3期にあたる(梅木謙一1994「西瀬戸内海地方の弥生時代前期土器—松山平野を中心として—」『牟田裕二君追悼論集』)。2の傾きは、不明であり、波状口縁の可能性もある。壺(4・5)・甕(6~8)など中期後葉の特徴を持つものが主体である。また、少數ながら後期の土

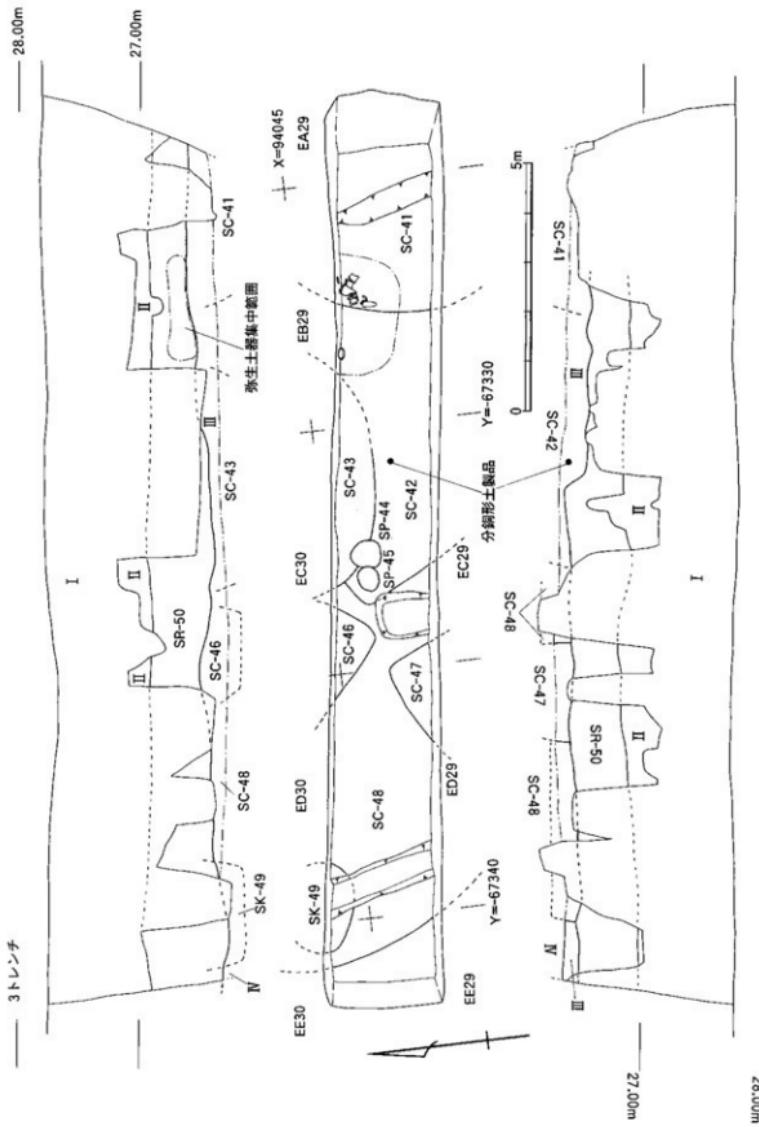
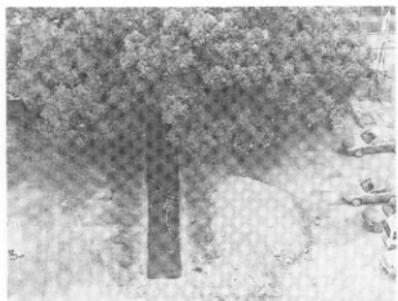


図39 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチ平面図および土層断面図（縮尺1/100, 1/40）



① 3トレンチ全景（東から）



② 3トレンチ遺構検出状況（東から）



③ 3トレンチSR-50遺物出土状況1（南東から）

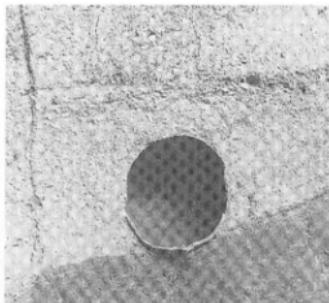
④ 3トレンチSR-50遺物出土状況2
（南東から）

写真19 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチ

器が含まれている（3・9・10）。3の壺は梅木編年V-1期、9の壺はV-2～3期になる。図43-1は、ほぼ完形の分銅形土製品である。

III層を若干掘り下げて精査を行った結果、竪穴式住居跡6軒(SC-41～43・46～48)以上、土壤1基(SK-49)、自然流路1条(SR-50)、柱穴もしくは小穴2基(SP-44・45)を検出した。

〔竪穴式住居跡〕

互いに切り合う6軒以上の竪穴式住居跡を検出した。いずれも、上面を自然流路(SR-50)の堆積物である砂礫層が覆る。後述するように、砂礫層からは弥生時代中期の土器が出土している。したがって、以下に報告する竪穴式住居跡は、いずれも弥生時代中期以前のものである。

トレンチ東端のEA-29区～EB-29区で、緩やかに弧

を描く輪郭線を検出し、SC-41とした。円形の竪穴式住居跡と考え、SC-41とした。SC-42を切る。埋土は、艶のある黒褐色シルト質土で、にぶい黄褐色シルトの小指先大の小塊が点々とあるが、比較的多く混じる。

トレンチ中央部のEC-29区で、方形の竪穴式住居跡の角部分を検出し、SC-43とした。埋土は、黒褐色シルトで、小指から親指先大のにぶい黄褐色シルトの小塊がごく少量点々と混じる。SC-41・43、SP-44・45に切れ、東側のEB-29区まで同色同質の土層が広がるが、これまで、城北墳地で確認されている弥生時代の方形住居跡と比べると、1軒の住居と考えるには大きすぎる。複数の竪穴式住居跡の切り合っている可能性が強い。

SC-43は、EB-29区～EC-29区のトレンチ北壁沿いで検出した小判形の竪穴式住居跡である。SC-42を切

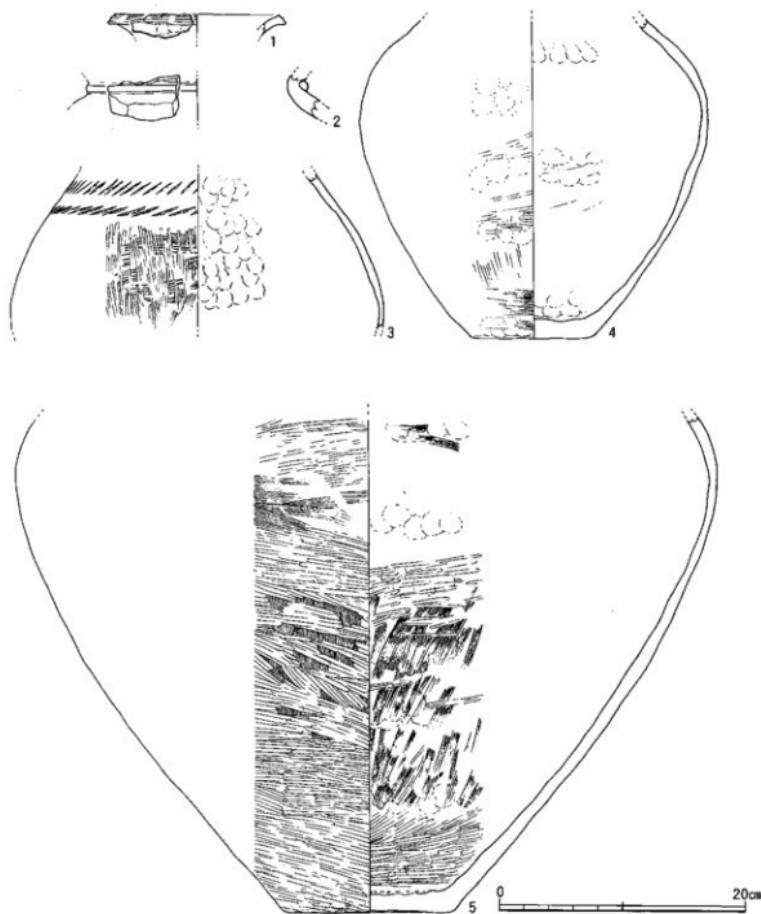


図40 99715調査（文京遺跡17次）3 トレンチSR-50出土遺物実測図1（縮尺1/4）

り、SP-44に切られる。埋土は、黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの直径2~5cmの塊が点々と混じる。

SC-42の埋土と比べて、粘性が強い。炭化物の細片がごく少量含まれている。

SC-46は、トレンチ西側のEC・ED-29・30区に位置する。SC-48を切る。埋土は、飴のある黒褐色シルト質

土で、直径3~5cm大のにぶい黄褐色シルトの塊が点々とごく少量混じる。

EC・ED-29区のトレンチ南壁沿いで方形の堅穴式住居跡の角部分を検出し、SC-47とした。SC-48を切る。埋土は、黒褐色シルト質土で、SC-48と比べて飴があり、東側に隣接する16次調査区の弥生時代の遺構埋土

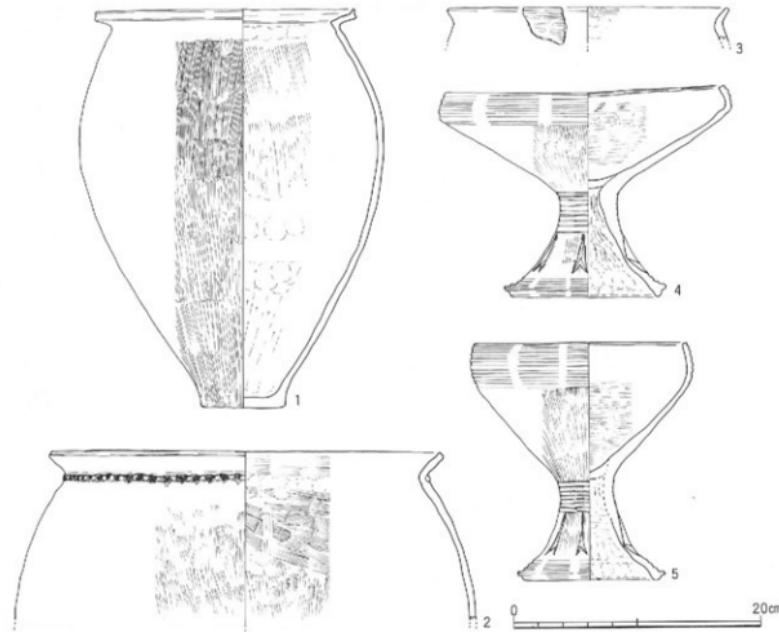


図41 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチSR-50出土遺物実測図2（縮尺1/4）

にもっとも近い。炭化物片が点々と混じる。

トレンチ西端のEE-29・30区で、黒褐色シルト質土を埋土とする緩やかな弧を描く輪郭線を検出し、SC-48とした。EC-29区西半からかなり広範囲にひろがりをもつ。また、擾乱層で確認できた東側の埋土は、下部に暗灰細砂が混じり、東西で埋土の質が異なる。さらに、床面は、西側の擾乱層では検出面から深さ8~10cm、東側の擾乱層では10~12cmを測る。こうした点から、1軒の竪穴式住居跡とは考えられず、複数の竪穴式住居跡が重複している可能性が強い。SC-42・46・47、SK-49に切られる。埋土中には炭化物の細片が多く含まれている。

【土壤】

トレンチ西端部分のED-30区とEE-30区の境界部分で検出した。楕円形の平面形をもつと考えられる土壤を検出し、SK-49とした。SC-48を切る。埋土は黒褐色

シルトである。擾乱溝の壁面で検出面から18~20cmの深さをもつことを確認できた。トレンチ北壁の土層断面では、竪穴式住居跡と同じく、自然流路(SR-50)の砂礫層に覆われている。弥生時代中期以前の土壤と考えられる。

【柱穴・小穴】

トレンチ中央部のEC-29区で、SC-42・43を切る2基の小穴(SP-44・45)を検出した。ともに、やや灰色をおびた褐色の砂礫が多く混じる砂質シルト質土を埋土とする。こうした特徴をもつ埋土は、弥生時代～古墳時代の遺構ではみられず、東側の16次調査地点で出土した中世の土壤と共通する。遺物は出土していないが、中世以降の遺構と考えられる。

以上、16次調査地点の西側への遺構の広がりを把握するために設定した3トレンチでは、弥生時代中期の完形に近い土器が含まれる自然流路(SR-50)の砂礫

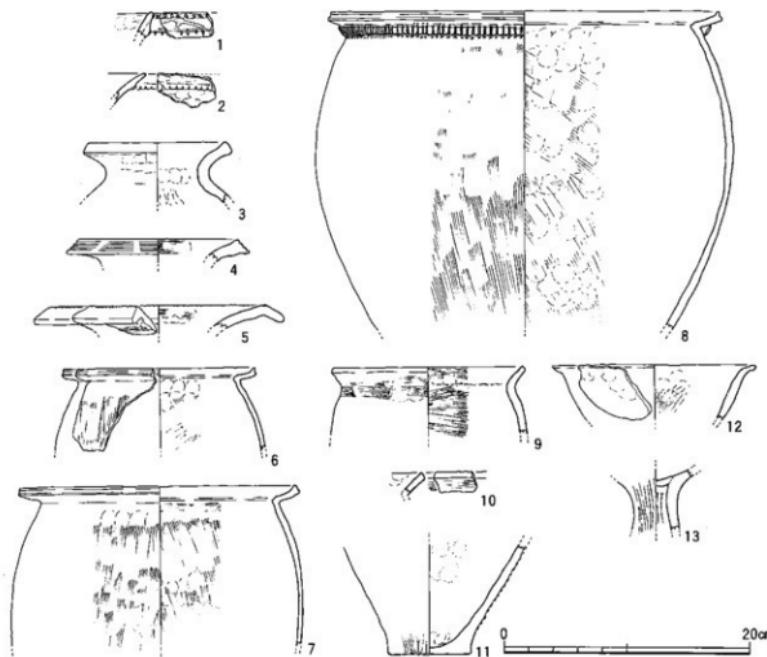


図42 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチⅢ層出土遺物実測図1（縮尺1/4）

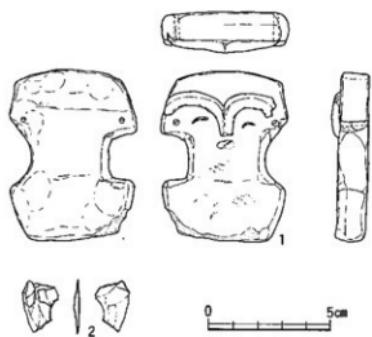


図43 99715調査（文京遺跡17次）3トレンチⅢ層出土遺物実測図2（縮尺1/2）

層に覆われた竪穴式住居跡や土壌を検出できた。これらの遺構のほとんどは、弥生時代中期のSR-50に覆われているため、弥生時代のものと考えられる。

3 調査のまとめ

今次調査と既往の調査成果から、旧グラウンド部分における遺構分布の大略を以下のように推定できる。

- ①旧グラウンド南部の工学部1号館建設に伴う12・14・16次調査部分で確認された弥生時代～古墳時代の遺構密集範囲は、旧グラウンドの中央部分まで広がっている。その北限線は、今次調査1トレンチSD-09・10と15次調査7トレンチのSD-25の延長線上にあると推定される。

- ②今次調査3トレンチでは、工学部1号館III期工事

に伴う16次調査地点西側にも、弥生時代の遺構の密集範囲が広がっていることを把握できた。しかも、旧地形が西に向かって落ち込んでいること、上面にSR-50とした自然流路の砂礫層が厚く堆積するため、16次調査でみられた戦時の塹壕による遺構の破壊は比較的少なく、遺存状況は予想以上に良好である。

- ③旧グラウンド北半部には、15次調査7トレンチの調査成果から、東西方向に谷状の窪地があり、その窪地には古墳時代後期～中世の水田が営まれている。今次調査の1トレンチで検出した自然流路SR-01や、SD-09・10、15次調査7トレンチのSD-25は、窪地に営まれた水田に関わる溝や流路の可能性が考えられる。（田崎・吉田・三吉・山村）

99716 附属農高運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス 増設工事に伴う調査

調査地点 松山市椿味3丁目5番7号

椿味団地

調査面積 21.2m²

調査期間 1997年3月11・12日

調査の種別 立会調査

調査担当 吉田広・三吉秀充

調査補助 宮崎直栄・橋本麻紀

依頼文書 平成9年12月22日発

愛大農発 第703号

1 調査にいたる経緯

附属農業高等学校の運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設工事が計画されたが、工事地周辺のデータがなかったことから先に試掘調査（調査番号：99713）を行った。その結果ポール基礎設置予定地には遺跡の存在が十分予想されたため立会調査を実施することとした。

2 調査の記録

掘削地点は、10ヶ所におよび、南から北に向けて1～10トレンチとした（図44、写真20-①）。以下、トレンチごとに報告を行う。

- (1) 1トレンチ（図45-①、写真20-②）

現地表下50cmまで掘削を行ったが、瓦礫を伴ったI

層が続いており、遺構・遺物ともに出土しなかった。

- (2) 2トレンチ（図45-②、写真20-③）

現地表下60cmまで掘削を行い、IV層（基盤層）を確認したが遺構は存在しなかった。

- (3) 3トレンチ（図45-③、写真20-④）

灰黄色シルトのII層除去後、現地表下40cmで基盤層であるIV層を確認すると同時に、トレンチ南東部でSK-1、トレンチ北端でSK-2を確認した。

SK-1は、深さ約10cmの落ち込みで、底面はほぼ水平をなす。埋土は灰褐色シルト質土で締まりはあまりない。西端部の立ち上がりを検出したのみで、性格などについては不明。遺構埋土からは羽釜の口縁部片、回転台土師器の小皿片、瓦器碗の小片などが出土している。

SK-2も深さ約10cmの落ち込みである。埋土は灰褐色シルト質土に黒褐色シルト質土が混じり粘性をやや帯びる。なお、SK-1とSK-2との切り合い関係は明らかでない。

- (4) 4トレンチ（図45-④、写真20-⑤）

現地表下約20cmでII層、約40cmでIV層を確認し、そのIV層上面で、SP-3～5を検出した。ともに径20cm前後の柱穴である。

SP-3とSP-5の埋土は、褐灰色シルト質土であり、樹木痕の可能性がある。SP-4は褐灰色シルト質土に

明黄褐色シルト質土の小ブロックが混じる。遺物の出土はない。

(5) 5 トレンチ (図45-④、写真21-①)

現地表下約30cmでII層、約45cmでIV層を確認し、同時に、トレンチ西壁際でSD-6を検出した。溝状の遺構の西辺を確認したのみだが、深さ約25cmを測る。埋土は褐灰色シルト質土で粘性を帯びる。ただし水流の痕跡はない。このトレンチの南2m地点が試掘調査99713-3トレンチにあたり、そこでは北北東-南南西方向の溝状遺構を検出している。埋土などの状況も考慮して、今回検出したSD-6と一連のものと考えられる。

(6) 6 トレンチ (図46-①、写真21-②)

現地表下約40cmでIV層(基盤層)を確認した。遺構・遺物ともに存在しなかった。

(7) 7 トレンチ (図46-②、写真21-③)

現地表下約40cmでIV層(基盤層)を確認した。遺構・遺物ともに存在しなかった。

(8) 8 トレンチ (図46-③、写真21-④)

現地表下約40cmでII層を、約45cmでIV層を確認すると同時に、SK-7を検出した。SK-7はトレンチ南西隅でその一画を検出したのみだが、深さは約50cmを測る。埋土は粘性の非常に高い黒褐色粘質シルトで、ぶい黄褐色シルトの小指先大の小塊が混じる。

(9) 9 トレンチ (図46-④、写真21-⑤)

現地表下25cmでIV層(基盤層)を確認した。遺構・遺物ともに存在しなかった。

(10) 10 トレンチ (図46-⑤、写真21-⑥)

現地表下45cmでIV層(基盤層)を確認した。遺構・遺物ともに存在しなかった。

3 調査のまとめ

前回の試掘調査に引き続き、今回の調査でもIV層基盤層を掘り込む遺構の存在を確認できた。前回の調査では、試掘調査ということもあり、遺構検出の段階で調査を終了し、検出した遺構の時期まで特定できていなかったが、3トレンチのSK-1の埋土から中世土器を数点確認できたことにより、中世以前の遺構と確定できたことは大きな成果である。以上のことから、運動場東側堤部分には中世の遺跡が存在していると考えられる。

さて、これまで今回のトレンチが位置する箇所を堤と表記してきたが、現状及び今回の調査から、盛り上

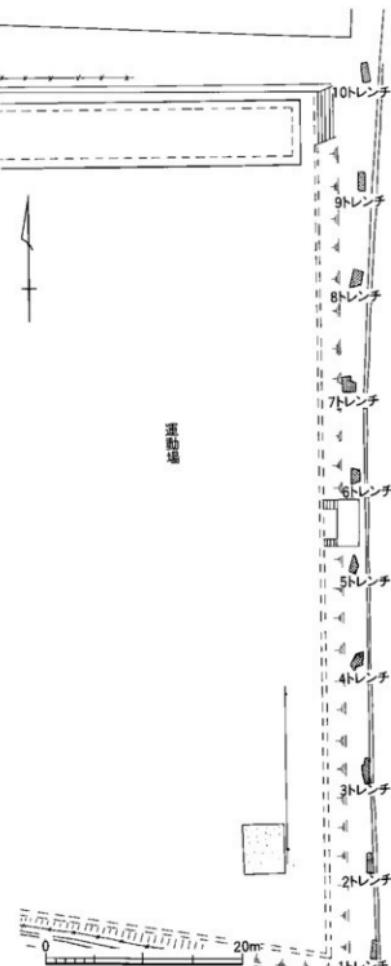


図44 99716調査1~10トレンチ位置図 (縮尺1/500)



① 調査区遠景（北西から）



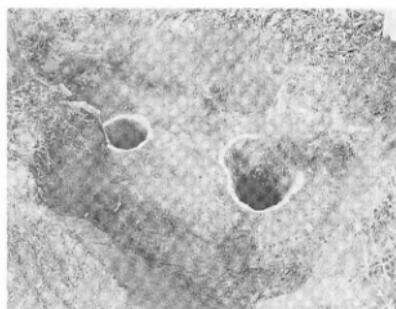
② 1トレンチ（北西から）



③ 2トレンチ（北西から）



④ 3トレンチ（南から）



⑤ 4トレンチ（南東から）

写真20 99716調査地点遠景および1～4トレンチ



① 5 トレンチ (南西から)



② 6 トレンチ (北西から)



③ 7 トレンチ (北西から)



④ 8 トレンチ (北から)



⑤ 9 トレンチ (北から)



⑥ 10 トレンチ (北西から)

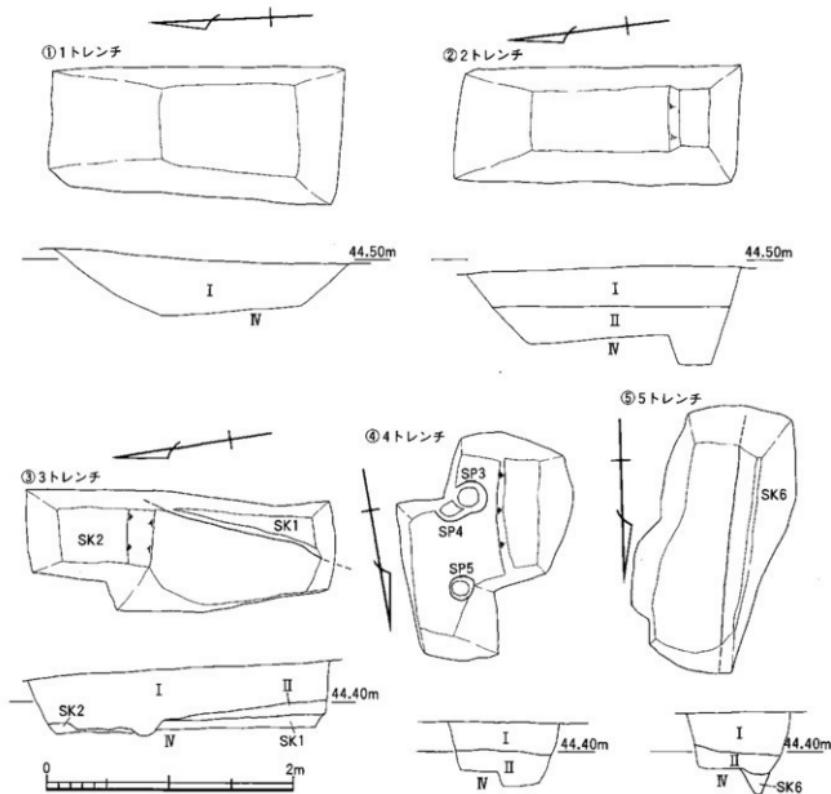


図45 99716調査1～5 トレンチ平面図および土層断面図（縮尺1/40）

げられた堤ではなく、運動場造成の際に削平を免れた部分と考えられる。したがって、堤部分の裾付近は遺跡が破壊されている可能性が高い。ただ、運動場北辺の、堤から西へ約40m地点の98703調査-2 トレンチにおいては、標高約41.90mで遺物包含層であるⅢ層の上

面を確認しており、運動場の造成による遺構面にまで及ぶ削平は、堤付近の東側の一部に限られていると見られる。

調査後、以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。

（吉田・三吉）

99717 工学部校舎新営に伴う外表施設整備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番
城北団地

調査期間 1998年2月17日
調査の種別 緊急調査

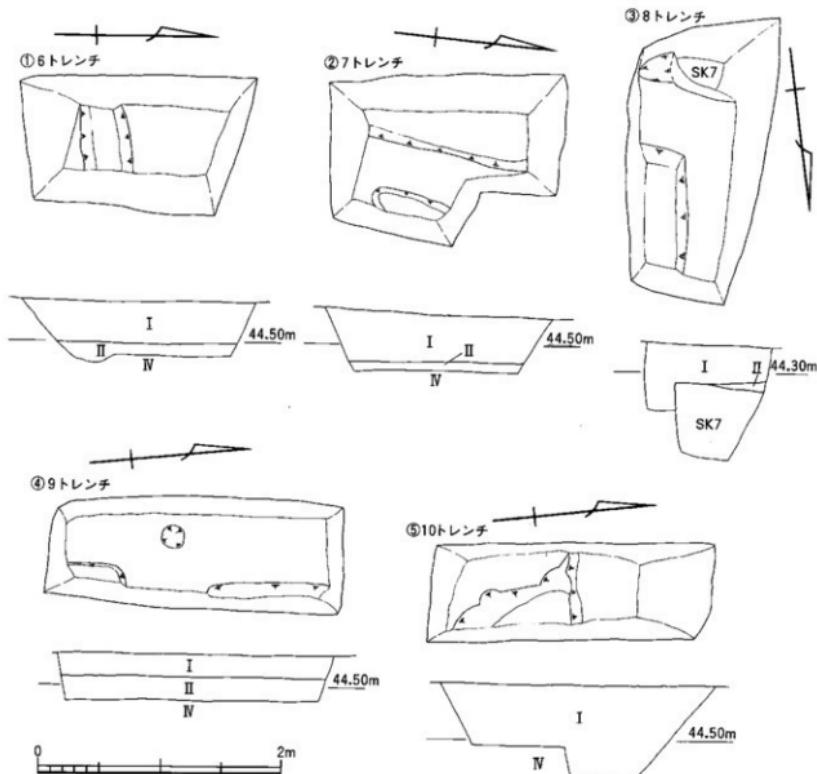


図46 99716調査6~10トレーナー平面図および土層断面図(縮尺1/40)

調査担当 吉田 広

1 調査にいたる経緯

工学部1号館東側入り口付近で、樹木の伐採及び抜根工事が行われ、既にG.L.-80cmまで掘り下げられていたのを、1998年2月17日に吉田が発見した。この工事に関して埋蔵文化財調査室には何ら通知が届いていないので、この旨と現状を施設部企画係に通報した。その後、道路に沿ってU字形側溝敷設工事に伴って掘削中、包含層に達しているらしいとの連絡が施工業者よりあった。

2 調査の記録

抜根工事地点では、既に掘削された深度まで攪乱があり、遺跡は存在しなかった。

一方、U字形側溝敷設工事では、法文学部西側正面で、G.L.-55cm(道路アスファルト面から)で包含層上面が現れていること、これより北側は掘削深度でも包含層に達していないこと。しかし、南側は既に掘削を終えた3mほどは、10cmほど包含層を削ってしまったことを確認した。

3 調査後の対応

U字形側溝敷設工事の未掘削部分に関して、施設部及び施工業者と現地で協議し、包含層に影響の及ばない深度(G.L.-50cm)への工法変更を現場で決定した。同時に、この法文学部西側駐車場周辺は、その遺跡・

遺構の特殊性に鑑み、特に現状地盤掘削に留意すべきことと、工事内容の調査室への連絡を徹底することが必要であることを伝えた。

(吉田)

II 1998年度の調査

1998年度の本格調査は、城北団地において、総合情報処理センター新館に伴う調査（文京遺跡18次調査）と、柳味団地における遺伝子実験施設新館その他工事に伴う調査（柳味遺跡5次調査）の2件である。その他の試掘・立会調査も、城北団地において4件、柳味団地において1件、そして重信団地において1件と、調査件数自体はやや少ない（図47）。

調査自身の問題点として、1998年度の本格調査2件がいずれも補正予算に伴う調査であり、埋蔵文化財調査室の年度当初の調査・整理計画の変更を余儀なくされたことになった。このため、1998年度は確認調査を実施できなかった。こうした発掘調査に加え、7月に文京遺跡シンポジウムを開催した。（吉田）

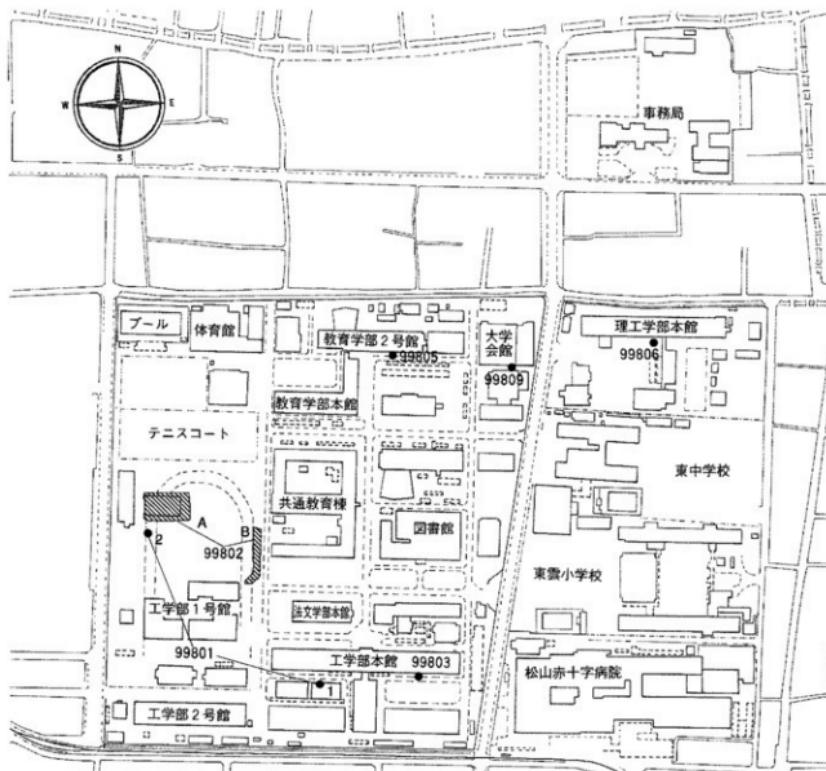


図47 1998年度城北団地（文京遺跡）調査地点（縮尺1/4,000）

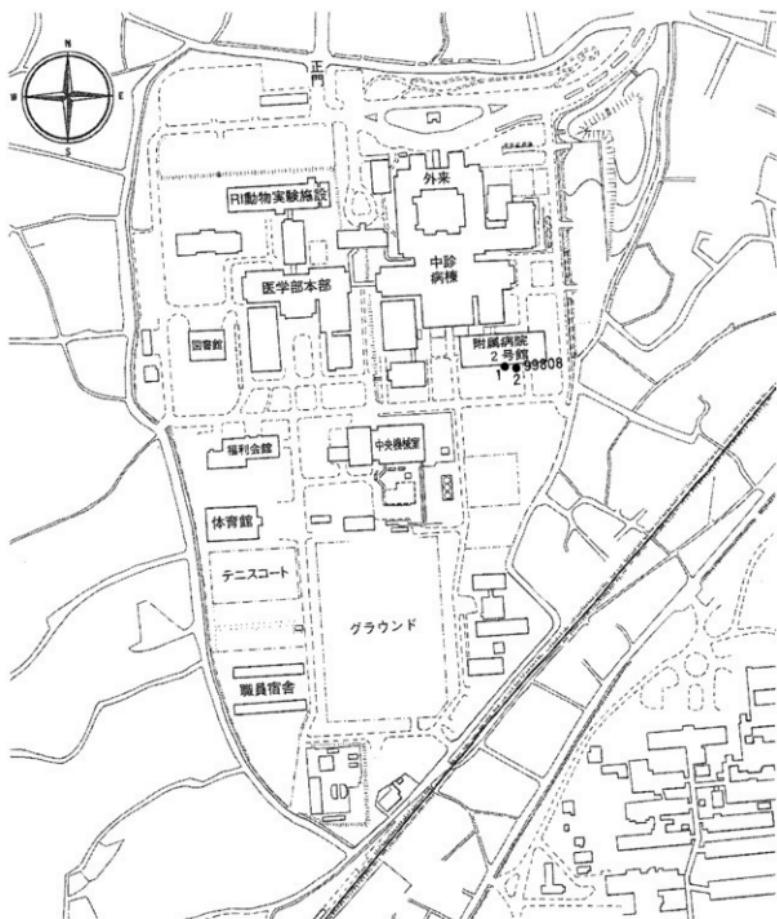


図48 1998年度重信団地調査地点 (縮尺1/4,000)

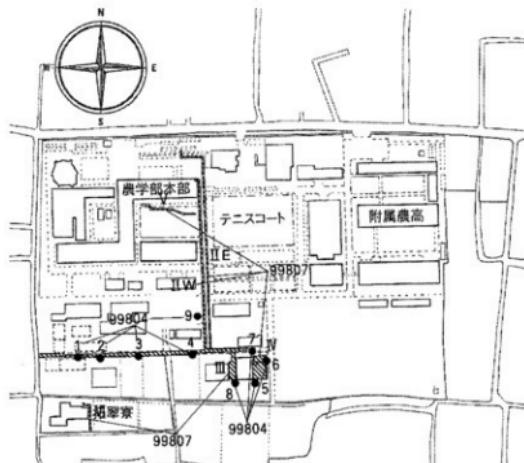


図49 1998年度博味団地（博味遺跡）調査地点（縮尺1/4,000）

99801 「大正天皇お手植えの松」移植に伴う調査

調査地点 松山市文京町3番

城北団地

調査面積 1m²

調査期間 1998年11月8日

調査の種別 立会調査

調査担当 田崎博之・吉田広

調査補助 宮崎直栄

依頼文書 平成10年10月30日付

工学部事務長宛 事務連絡

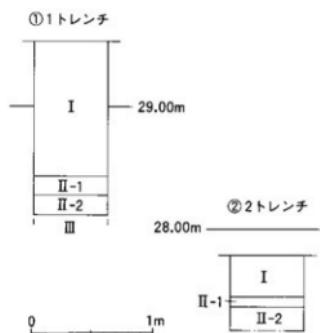
1 調査にいたる経緯

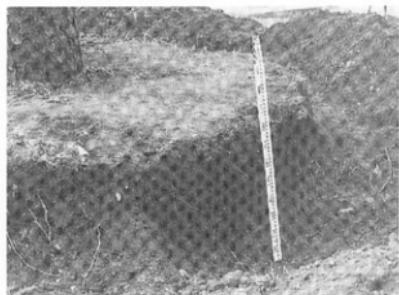
地域共同研究センター東側の「大正天皇お手植えの松」を移植することとなり、現地での掘削深度の指示等が必要と判断されたため、立会調査を行うこととした。

2 調査の記録

移植元を1トレンチ、移植先を2トレンチとする。

(1) 1トレンチ (図50-①、写真22-①)

図50 99801調査1・2トレンチ土層柱状図
(縮尺1/40)



① 1 トレンチ土層断面

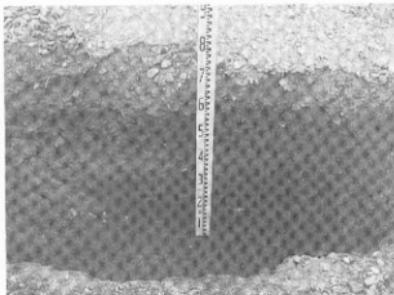


写真22 99801調査土層断面

移植元の1トレンチにおいては、根切り作業に伴って、包含層への到達深度を確認して、その範囲内での作業を指示することとした。その結果、現状表土下約90cmで第II層上面を確認し、さらに約30cm下で包含層である第III層を検出した。検出レベルの標高は28.12mである。

(2) 2トレンチ (図50-②、写真22-②)

移植先の2トレンチは、課外活動第3共用施設の南東約14mの地点に設定された。当該地点は、今後新営の工学部1号校舎の現状地表に併せて、土盛りが約60cmほどなされる予定であり、先の1トレンチの根切り深度を勘案して、現状から約60cmの範囲での掘削深度が保証されればよいと判断した。したがって、その範囲内の土層の確認を行った。結果、地表下の約35cmから第II層となるが、以下深度約70cmまでII層が続き、掘削予定深度内ではIII層に達しないことを確認した。

3 調査後の対応

1トレンチについては、調査成果に基づいて掘削深

度120cm内の慎重工事を指示し、2トレンチでも確認した掘削深度60cm内の慎重工事を指示した。

4 調査にかかわる問題点

1998年にはいり、営繕工事などに伴う立会調査・事前試掘調査にあたり、関係部局と施設部の連絡調整が混亂している。1998年2月17日に実施した工学部校舎新営に伴う外壁施設整備工事に伴う立会調査、1998年6月3日の学生会館ガス管改修に伴う立会調査については、依頼文書さえ提出されていない。また、今回の場合も、連絡調整が十分詰められず、依頼文書も事務連絡の形式がとられるなど、これまで整備されてきた「埋蔵文化財調査に関する手続きフローチャート」が無視されている。こうした混亂と手続きの無視は、工事と埋蔵文化財調査の調整がつかない事態を招きかねない。従前にも増し、「手続きフローチャート」を施設部および関連部局への周知徹底が必要である。

(吉田)

99802 総合情報処理センター新営に伴う調査 (文京遺跡18次調査)

調査地点 松山市文京町3番
城北団地

調査面積 1,192m²

調査期間 1998年12月15日～1999年8月2日

調査の種別 事前全面調査

調査担当 田崎博之・三吉秀充
依頼文書 平成10年6月25日付

総合情報処理センター長発 事務連絡

1 調査にいたる経緯

愛媛大学総合情報処理センター建物の新宮が計画され、既往の周辺の調査状況から事前全面調査が行われることとなった。調査地点は、建物本体部分に当たるA区と共同溝部分にあたるB区との2地区からなる。A区は、グラウンド北西部、課外活動第3共用施設建物の西側に位置する。B区はグラウンドの東側に位置し、調査区の南端は、文京遺跡14次調査区に接している。なお、文京遺跡18次調査A区は、グラウンドに設けられた保存地区的北側に、B区は東側に接している。

調査は、まず建物部分であるA区に着手し、A区終了後B区の調査を行った。出土した遺構は、後述するように、A区上層水田層に関連するものに1~42、中層水田層に101~123、中層と下層水田層間の遺構群に201~214、下層水田層に301~317、微高地上の遺構群に401~600、B区で検出した遺構には601~741の連番の遺構番号を付し、遺構略号を冠して種別を表した。

(三吉)

2 調査の概要

(1) A区の調査

本調査区の一部は、1996年度実施の文京遺跡15次調査（調査番号：99602）8トレンチとして確認調査が行

われている。確認調査では、調査区壁の観察所見から、中世以前にさかのぼる水田の存在が想定されていた。今回の全面調査では、その予想に違わず11世紀から13世紀にかけての水田層3層が検出され、同時に弥生時代から中世の掘立柱建物や土壙などが発見された。

(三吉)

①基本層序

調査区全面にわたって、現地表面から深さ約1mまでは、グラウンドの造成土である瓦礫を伴った基本層序I層が堆積する。さらに直下には、近世の水田層である基本層序II層が約30~40cm堆積する。

本調査区におけるII層以下の堆積状況には、礫および砂礫からなる基本層序のV層が大きな影響を与えている。V層は、調査区の南端から北端にかけて急激に低くなり谷状を呈する。V層の上面には、繩文時代後期～晩期段階に基本層序のIV層である黄褐色シルトが堆積するが、その堆積は調査区の南半分に限られている。さらに、調査区北半分においては、V層直上に古代に埋没がほぼ終わる旧河道の基盤面である拳大前後の砂礫層が堆積する。旧河道の堆積土は、拳大頭大の花崗岩の円礫が下部を中心に含まれている。旧河道の埋没後、谷部には砂礫混じりの灰色シルト層の堆積が始まり、11世紀頃には本調査区の北半分を覆いつく



写真23 99802調査（文京遺跡18次）A区東壁土層断面

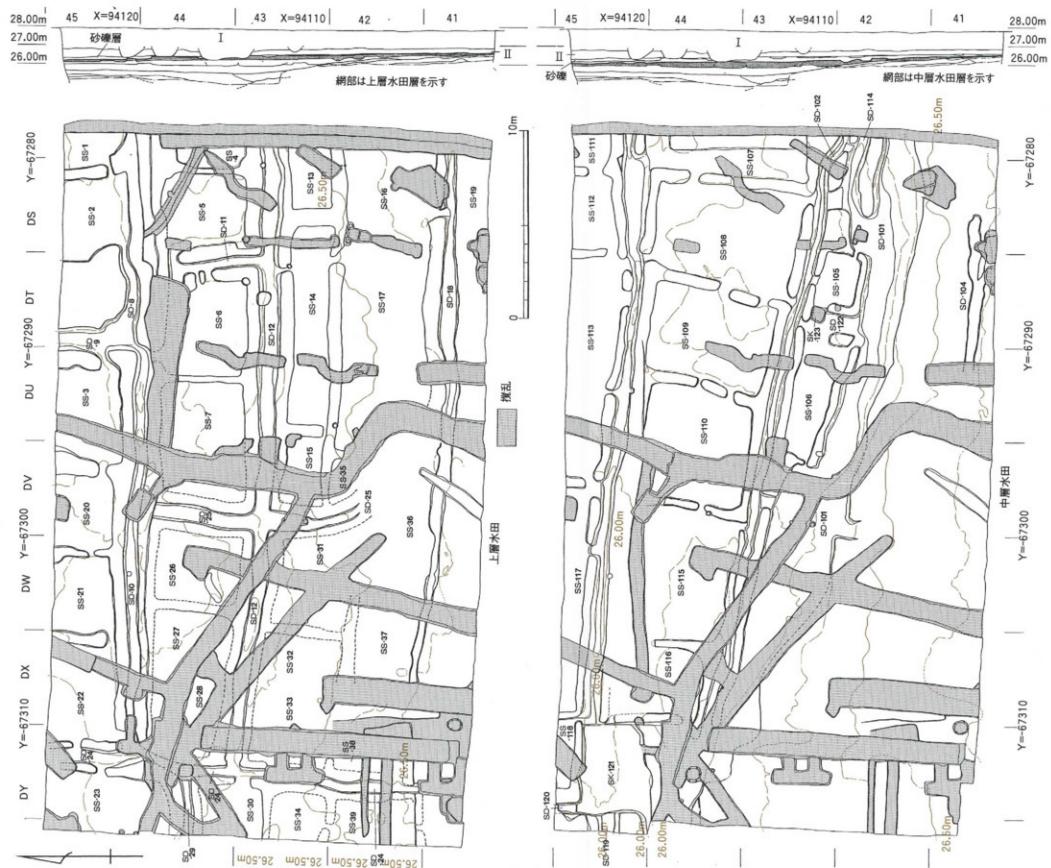
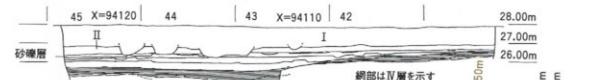
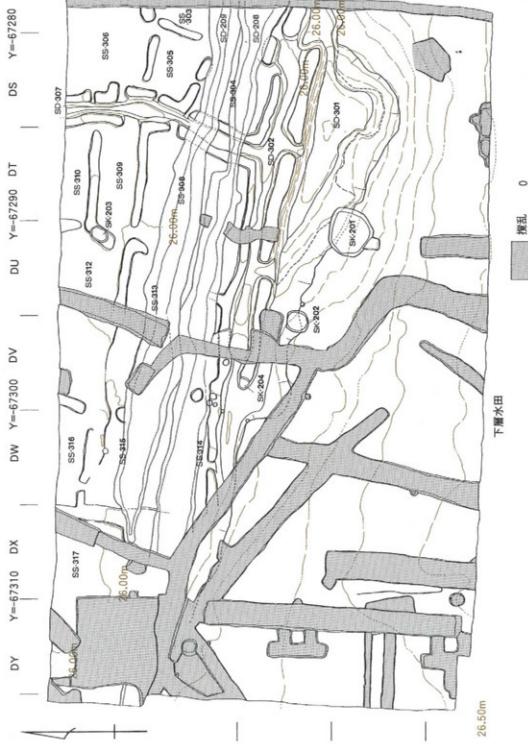


図51 9980(2)調査 (文京通筋18次) A1区上層水田・中層水田および耕柵区土層断面図 (縮尺1/200)



網部は下層水田層を示す



網部はIV層を示す

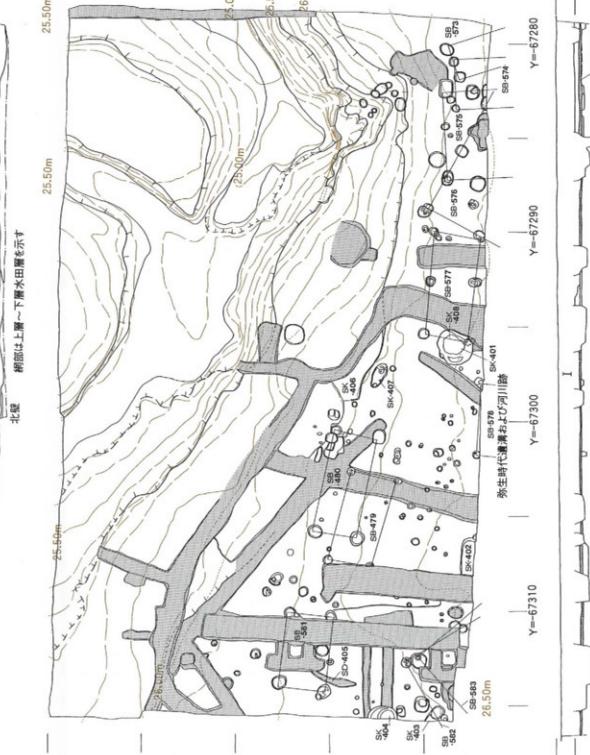


図52 99802調査（文京遺跡18次）A区下層水田・自然河道・微高地上の遺構および調査区土層断面図（縮尺1/200）

す。

この段階にいたって、水田が拓かれ始め、少なくとも11世紀段階の下層水田、12世紀段階の中層水田、13世紀段階の上層水田が確認できた。水田層はオーピー褐色砂質シルトを呈し、灌漑水によって生じた鉄・マンガンの沈着層が縞状に認められる。さらに、各段階の水田層上面は砂礫が多く混じる土層が堆積している。

(三吉)

②谷部の遺構

A区では、調査区北半部にひろがる谷部では、上層・中層・下層の3枚の水田層、中層と下層水田層間で溝・土壤など、最下層では自然河道を検出し、調査区南半部の微高地と谷部への落ち際にIV層上面でも掘立柱建物や土壤などを確認できた。

【上層水田層】

調査区全面で、13世紀の水田（SS-1～7・13～17・19～23・26～28・30～39）と、これに伴う水路（SD-8～12・18・24・25・29）を検出した（図51、写真24-①）。ただし、調査区南半部のSS-16・17・19・31～34・36～39は、耕作土が削平され、擬似畦畔で水田区画を推定している。この他、上層水田の耕土と共通する埋土を持つ小穴（SP-40～42）がある。

水田を検出した地形面は、南から北に向かって緩やかに傾斜する。DY-41～45区では、南から北に向かって幅60～90cmの溝が掘られ、これに同規模の東西方向のSD-10・12・18を連結させる。さらに、SD-9・25などでSD-10・12・18を繋ぎ、その中に小区画の水田を造成している。SD-10のDV-45区西端から土師器片や歯齒などが出土している。

【中層水田層】

上層水田層を掘り下げると、調査区の南半部分ではIV層があらわれ、調査区北半部の谷状に低くなっている部分で、12世紀の水田層である中層水田層を確認した。水田（SS-105～113・115～118）を面的に検出できた範囲は、調査区の約70%に当たる。また、水路（SD-101～104・114・119・120・122）、土塹（SK-121・123）が、この水田層に伴う遺構である（図51、写真24-②）。

中層水田の段階では、谷状の窪地への落ち際に沿い、東西に幅2mほどの幹線水路（SD-101）を設け、幹線水路に平行する幅0.5～1mの枝水路（SD-102・103など）を設け、その間に水田を営んでいる。水田は、東西に延びる水路の間に、小さく区画されている。また、調査区北西角のDY-44・45区では、東からのびてきた

SD-101やSD-102・103がSK-121に合流し、さらに西側へSD-119、北側へSD-120がのびていく。SK-121は、南北6m、東西5mほどを測り、水路の配置関係や埋土から、水路を流れてきた用水を一旦集め、さらに下流の水路へと導く貯水構造と考えた。

【中層と下層水田層間の遺構】

中層水田を掘り下げる過程で、下層水田より新しい時期に位置づけられる東西方向の水路であるSD-208・209を検出した。また、下層水田面での確認であったが、土壤SK-201～204と、小穴SP-205・207・210～214も、下層水田層ではなくSD-208・209に伴う遺構と考えられる。

SD-208・209は幅1.5～2mほどを測り、水路と同じ時期に位置づけられる水田面の検出には至らなかったが、前後の時期における水田の存在から、水田に伴う可能性が高い。また、東西に横走する水路のうち、南側のSD-208では、灰が一度に放り込まれた状況で出土している（写真26-①）。

【下層水田層】

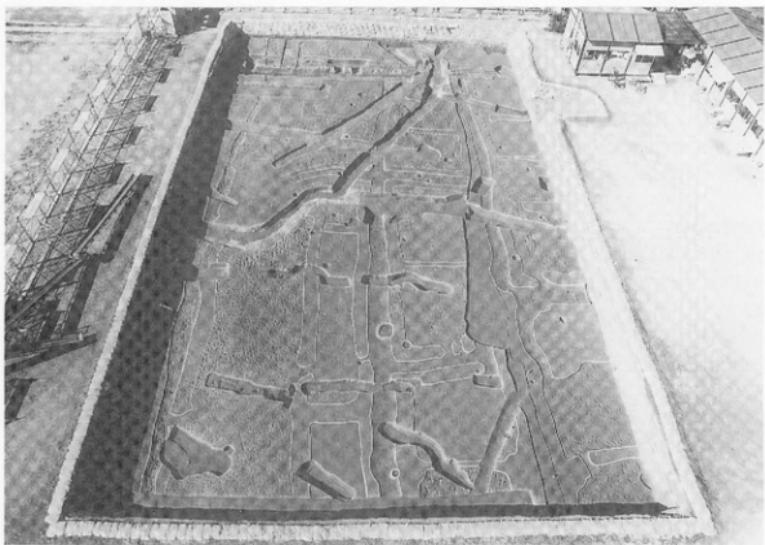
下層水田は11世紀の水田で、中層水田と同様に調査区北半部の谷状に低くなっている部分で確認できた。しかし、営まれていた水田面の広がりは、調査区の約60%と中層水田よりさらに狭くなっている。水田（SS-303～306・308～317）と水路（SD-301・302・307）を検出した（図52、写真25-①）。

下層水田の段階では、谷状の窪地への落ち際に沿い、東西に幅1.2～1.8mの幹線水路（SD-301）を掘り、その途中のDS～DU-42・43区部分では、南側の微高地の縁辺を削り、南北3～5m、東西10m程の溜め池を設けている（写真26-②）。さらに、幹線水路や溜め池に沿って、東西方向の幅1m前後の枝水路（SD-302）、さらに北に延びる幅0.5～1mの枝水路（SD-307）が掘られている。水田は、幹線水路に平行して設けられた幅0.5～1mの枝水路の間に営まれており、上層水田や下層水田と同様に、小区画の水田である。

【自然河道】

下層水田層の下位には、灰色砂礫混じりのシルト質土層が堆積している。東から西に向かって蛇行しながら流れる自然流路の最上面に堆積した土層である。弥生土器に混じり、8世紀代の須恵器が出土している。

この河道の基底面には、拳～人頭大の砂礫を主体とする砂礫層が堆積している（図52、写真25-②）。基本層序のV層と近似しているので、調査区北壁に沿って

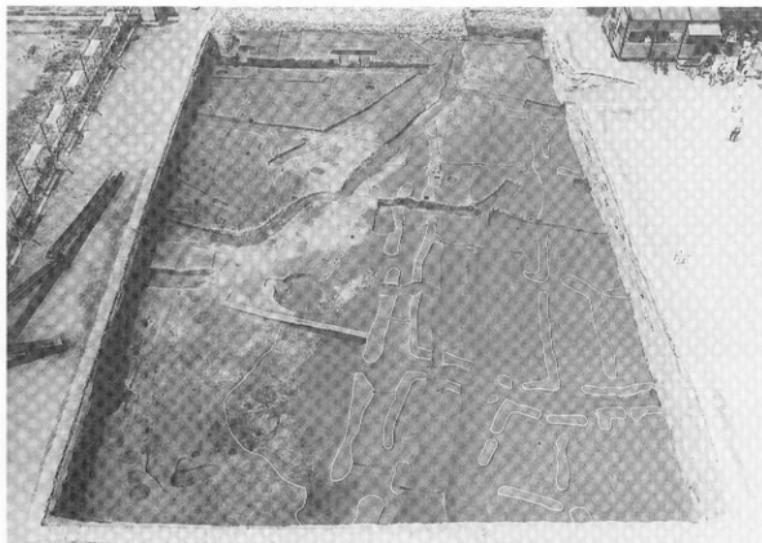


① A区上層水田（東から）

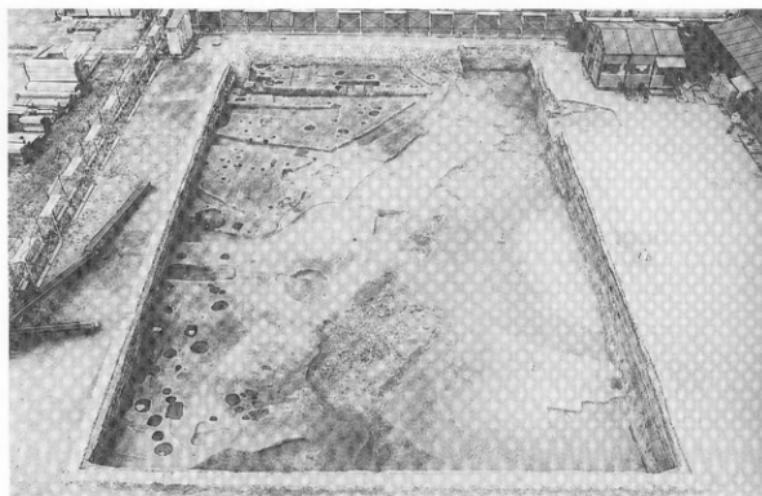


② A区中層水田（東から）

写真24 99802調査（文京遺跡18次）A区上層水田・中層水田



① A区下層水田（東から）



② A区自然流路・微高地上の遺構（東から）

写真25 99802調査（文京遺跡18次）A区下層水田・自然流路・微高地上の遺構